
Python Tutorial

リリース *2.6ja2*

Guido van Rossum
Fred L. Drake, Jr., editor

2011 年 11 月 06 日

Python Software Foundation
Email: docs@python.org

目次

第 1 章	やる気を高めよう	3
第 2 章	Python インタプリタを使う	5
2.1	インタプリタを起動する	5
2.2	インタプリタとその環境	7
第 3 章	形式ばらない Python の紹介	11
3.1	Python を電卓として使う	11
3.2	プログラミングへの第一歩	20
第 4 章	その他の制御フローツール	23
4.1	if 文	23
4.2	for 文	23
4.3	range() 関数	24
4.4	break 文と continue 文とループの else 節	25
4.5	pass 文	25
4.6	関数を定義する	26
4.7	関数定義についてもう少し	27
4.8	間奏曲: コーディングスタイル	32
第 5 章	データ構造	33
5.1	リスト型についてもう少し	33
5.2	del 文	38
5.3	タプルとシーケンス	38
5.4	集合型	39
5.5	辞書	40
5.6	ループのテクニック	41
5.7	条件についてもう少し	42
5.8	シーケンスとその他の型の比較	43
第 6 章	モジュール	45
6.1	モジュールについてもう少し	46

6.2	モジュールをスクリプトとして実行する	47
6.3	標準モジュール	49
6.4	<code>dir()</code> 関数	49
6.5	パッケージ	50
第 7 章	入力と出力	55
7.1	ファンシーな出力の書式化	55
7.2	ファイルを読み書きする	58
第 8 章	エラーと例外	63
8.1	構文エラー	63
8.2	例外	63
8.3	例外を処理する	64
8.4	例外を送出する	66
8.5	ユーザ定義の例外	67
8.6	クリーンアップ動作を定義する	68
8.7	定義済みクリーンアップ処理	69
第 9 章	クラス	71
9.1	名前とオブジェクトについて	71
9.2	Python のスコープと名前空間	72
9.3	クラス初見	73
9.4	いろいろな注意点	76
9.5	継承	78
9.6	プライベート変数	79
9.7	残りののはしばし	80
9.8	イテレータ (iterator)	81
9.9	ジェネレータ (generator)	82
9.10	ジェネレータ式	83
第 10 章	標準ライブラリミニツアー	85
10.1	OS へのインタフェース	85
10.2	ファイルのワイルドカード表記	85
10.3	コマンドライン引数	86
10.4	エラー出力のリダイレクトとプログラムの終了	86
10.5	文字列のパターンマッチング	86
10.6	数学	86
10.7	インターネットへのアクセス	87
10.8	日付と時刻	87
10.9	データ圧縮	88
10.10	パフォーマンスの計測	88
10.11	品質管理	88
10.12	バッテリー同梱	89
第 11 章	標準ライブラリミニツアー – その 2	91
11.1	出力のフォーマット	91
11.2	文字列テンプレート	92
11.3	バイナリデータレコードの操作	93

11.4	マルチスレッド処理	93
11.5	ログ記録	94
11.6	弱参照	95
11.7	リスト操作のためのツール	95
11.8	10 進浮動小数演算	96
第 12 章 さあ何を？		99
第 13 章 対話入力編集とヒストリ置換		101
13.1	行編集	101
13.2	ヒストリ置換	101
13.3	キー割り当て	102
13.4	インタラクティブインタプタの代替	103
第 14 章 浮動小数点演算、その問題と制限		105
14.1	表現エラー	107
第 15 章 日本語訳について		109
15.1	翻訳者一覧 (敬称略)	109
付 録 A 用語集		111
付 録 B このドキュメントについて		119
B.1	Python ドキュメント 貢献者	119
付 録 C History and License		121
C.1	Python の歴史	121
C.2	Terms and conditions for accessing or otherwise using Python	122
C.3	Licenses and Acknowledgements for Incorporated Software	125
付 録 D Copyright		133
索引		135

Release 2.6**Date** 2011 年 11 月 06 日

Python は簡単に習得でき、それでいて強力な言語の一つです。Python は高レベルなデータ構造を効率的に実装していて、オブジェクト指向プログラミングに対しても、単純ながら効果的なアプローチをとっています。洗練された文法とデータ型を動的に決定する機能、そしてインタプリタであるという特徴から、Python はほとんどのプラットフォームの幅広い対象領域において、スクリプティングや迅速なアプリケーション開発のための理想的な言語になっています。

Python インタプリタ自体と膨大な標準ライブラリは、ソースコード形式や、主要なプラットフォーム向けのバイナリ形式で、Python Web サイト <http://www.python.org/> から無料で入手でき、かつ無料で再配布できます。また、Python Web サイトでは、無料で手に入るたくさんのサードパーティ製 Python モジュールから、プログラム、ツール類、その他のドキュメントに至るまで、配布物やポイントの情報を公開しています。

Python インタプリタは、C 言語や C++ 言語 (あるいはその他の C 言語から呼び出せる言語) で実装された新たな関数やデータ構造を組み込んで簡単に拡張できます。Python はまた、カスタマイズ可能なアプリケーションを作るための拡張機能記述言語としても適しています。

このチュートリアルでは、Python の言語仕様と仕組みについて、基本的な概念と機能をざっと紹介します。Python インタプリタが手元にあれば、自分で試しながら学ぶ助けになりますが、例題は全て自己完結しているので、オフラインでも十分読めます。

標準のオブジェクトやモジュールの記述については、*library-index* を参照してください。*reference-index* には、より形式的な言語の定義が書いてあります。C 言語や C++ 言語で拡張モジュールを書くなれば、*extending-index* や *c-api-index* を参照してください。他にも、Python について広く深くカバーしている書籍はいくつかあります。

このチュートリアルは網羅的な内容を目指しているわけではありませんし、Python の個別の機能や、よく使われる機能でさえ完全にカバーしてはいません。その代わり、このチュートリアルでは Python の特筆すべき機能をたくさん紹介して、この言語の持ち味やスタイルについて好印象を持ってもらうつもりです。このチュートリアルを読んだ後には、読者のみなさんは Python のモジュールやプログラムを読み書きできるようになり、*library-index* に記述されているさまざまな Python ライブラリモジュールについて学べるようになるでしょう。

用語集 もまた役に立つはずです。

やる気を高めよう

コンピュータを使って様々な作業をしていたら、自動化したい作業が出てくるでしょう。たとえば、たくさんのテキストファイルで検索-置換操作を行いたい、大量の写真ファイルを込み入ったやりかたでリネームまたは整理したいといったものです。ひょっとすると、小さなカスタムデータベースや、何かに特化した GUI アプリケーション、シンプルなゲームを作りたいかもしれません。

もしあなたがプロのソフト開発者なら、C/C++/Java ライブラリを扱う必要があって、通常の write/compile/test/re-compile サイクルが遅すぎると感じるかもしれません。ひょっとするとそのようなライブラリのテストスイートを書いていて、テスト用のコードを書くのにうんざりしているかもしれません。拡張言語を使えるプログラムを書いていて、アプリケーションのために新しい言語一式の設計と実装をしたくないと思っているかもしれません。

Python はそんなあなたのための言語です。

それらの作業の幾つかは、Unix シェルスクリプトや Windows バッチファイルで書くこともできますが、シェルスクリプトはファイル操作やテキストデータの操作には向いているものの GUI アプリケーションやゲームにはむいていません。C/C++/Java プログラムを書くこともできますが、最初の試し書きにすらかなりの時間がかかってしまいます。Python は簡単に利用でき、Windows、Mac OS X、そして Unix オペレーティングシステムで動作し、あなたの作業を素早く行う助けになるでしょう。

Python は簡単に利用できますが、本物のプログラミング言語であり、シェルスクリプトやバッチファイルで提供されるよりもたくさんの、大規模プログラム向けの構造やサポートを提供しています。一方、Python は C よりたくさんのエラーチェックを提供しており、超高級言語 (*very-high-level language*) であり、可変長配列や辞書などの高級な型を組み込みで持っています。そのような型は一般的なため、Python は Awk や Perl が扱うものより (多くの場合、少なくともそれらの言語と同じくらい簡単に) 大規模な問題に利用できます。

Python ではプログラムをモジュールに分割して他の Python プログラムで再利用できます。Python には膨大な標準モジュールが付属していて、プログラムを作る上での基盤として、あるいは Python プログラミングを学ぶためのサンプルとして利用できます。組み込みモジュールではまた、ファイル I/O、システムコール、ソケットといった機能や、Tk のようなグラフィカルユーザインタフェースツールキットを使うためのインタフェースなども提供しています。

Python はインタプリタ言語です。コンパイルやリンクが必要ないので、プログラムを開発する際にかなりの時間を節約できます。インタプリタは対話的な使い方もできます。インタプリタは対話的にも使えるので、言語の様々な機能について実験してみたり、書き捨てのプログラムを書いたり、ボトムアップでプロ

グラムを開発する際に関数をテストしたりといったことが簡単にできます。便利な電卓にもなります。

Python では、とてもコンパクトで読みやすいプログラムを書けます。Python で書かれたプログラムは大抵、同じ機能を提供する C 言語、C++ 言語や Java のプログラムよりもはるかに短くなります。これには以下のようないくつかの理由があります：

- 高レベルのデータ型によって、複雑な操作を一つの実行文で表現できます。
- 実行文のグループ化を、グループの開始や終了の括弧ではなくインデントで行えます。
- 変数や引数の宣言が不要です。

Python は拡張 できます: C 言語でプログラムを書く方法を知っているなら、新たな組み込み関数やモジュールを簡単にインタプリタに追加できます。これによって、処理速度を決定的に左右する操作を最大速度で動作するように実現したり、(ベンダ特有のグラフィクスライブラリのように) バイナリ形式でしか手に入らないライブラリを Python にリンクしたりできます。その気になれば、Python インタプリタを C で書かれたアプリケーションにリンクして、アプリケーションに対する拡張言語や命令言語としても使えます。

ところで、この言語は BBC のショー番組、”モンティパイソンの空飛ぶサーカス (Monty Python's Flying Circus)” から取ったもので、爬虫類とは関係ありません。このドキュメントでは、モンティパイソンの寸劇への参照が許可されているだけでなく、むしろ推奨されています！

さて、皆さんはもう Python にワクワクして、もうちょっと詳しく調べてみたくなったはずです。プログラミング言語を習得する最良の方法は使ってみることですから、このチュートリアルではみなさんが読んだ内容を Python インタプリタで試してみることをおすすめします。

次の章では、まずインタプリタを使うための機微を説明します。これはさして面白みのない情報なのですが、後に説明する例題を試してみる上で不可欠なことです。

チュートリアルの残りの部分では、Python プログラム言語と実行システムの様々な機能を例題を交えて紹介します。単純な式、実行文、データ型から始めて、関数とモジュールを経て、最後には例外処理やユーザ定義クラスといったやや高度な概念にも触れます。

Python インタプリタを使う

2.1 インタプリタを起動する

Python が使えるコンピュータなら、インタプリタは大抵 `/usr/local/bin/python` にインストールされています。Unix シェルの検索パスに `/usr/local/bin` を入れれば、シェルで

```
python
```

とコマンドを入力すれば使えるようになります。

どのディレクトリに Python インタプリタをインストールするかはインストール時に選択できるので、インタプリタは他のディレクトリにあるかもしれません; 身近な Python に詳しい人が、システム管理者に聞いてみてください。(例えば、その他の場所としては `/usr/local/python` が一般的です。)

Windows では、Python は大抵の場合 `C:\Python26` にインストールされますが、インストーラ実行時に変更することができます。このディレクトリをあなたのパスに追加するには、以下のコマンドをコマンドプロンプトで実行してください。

```
set path=%path%;C:\python26
```

ファイル終端文字 (Unix では `Control-D`、DOS や Windows では `Control-Z`) を一次プロンプト (訳注: ‘>>>’ のこと) に入力すると、インタプリタが終了ステータス 0 で終了します。もしこの操作がうまく働かないなら、コマンド: `quit()` と入力すればインタプリタを終了できます。

通常、インタプリタの行編集機能は、あまり洗練されたものではありません。Unix では、インタプリタをインストールした誰かが GNU readline ライブラリのサポートを有効にしていれば、洗練された対話的行編集やヒストリ機能が利用できます。コマンドライン編集機能がサポートされているかを最も手っ取り早く調べる方法は、おそらく最初に表示された Python プロンプトに `Control-P` を入力してみることでしょう。ビーブ音が鳴るなら、コマンドライン編集機能があります。編集キーについての解説は付録 [対話入力編集とヒストリ置換](#) を参照してください。何も起こらないように見えるか、`^P` がエコーバックされるなら、コマンドライン編集機能は利用できません。この場合、現在編集中の行から文字を削除するにはバックスペースを使うしかありません。

インタプリタはさながら Unix シェルのように働きます。標準入力端末に接続された状態で呼び出されると、コマンドを対話的に読み込んで実行します。ファイル名を引数にしたり、標準入力からファイルを入力すると、インタプリタはファイルからスクリプトを読み込んで実行します。

インタプリタを起動する第二の方法は `python -c command [arg] ...` です。この形式では、シェルの `-c` オプションと同じように、`command` に指定した文を実行します。Python 文には、スペースなどのシェルにとって特殊な意味をもつ文字がしばしば含まれるので、`command` 全体をシングルクォート (訳注: ') で囲っておいたほうが良いでしょう。

Python のモジュールには、スクリプトとしても便利に使えるものがあります。`python -m module [arg] ...` のようにすると、`module` のソースファイルを、フルパスを指定して起動したかのように実行できます。

`python file` と `python <file` の違いに注意してください。後者の場合、プログラム内で `input()` や `raw_input()` が呼び出され、ユーザからの入力が必要な場合、入力は `file` から取り込まれます。この場合、パーザはプログラムの実行を開始される前にファイルを終端まで読み込んでおくので、プログラムはすぐに入力の終わりまで到達してしまいます。前者の場合 (大抵はこちらの方が望ましい動作です)、入力には Python インタプリタの標準入力に接続された何らかのファイルまたはデバイスが充てられます。

スクリプトファイルが使われた場合、スクリプトを走らせて、そのまま対話モードに入れると便利ことがあります。これには `-i` をスクリプトの前に追加します。(前の段落で述べたのと同じ理由から、スクリプトを標準入力から読み込んだ場合には、このオプションはうまく働きません。)

2.1.1 引数の受け渡し

スクリプト名と引数を指定してインタプリタを起動した場合、スクリプト名やスクリプト名以後に指定した引数は、スクリプトからは `sys.argv` でアクセスできるようになります。`sys.argv` は文字列からなるリストで、少なくとも一つ要素が入っています。スクリプト名も引数も指定しなければ `sys.argv[0]` は空の文字列になります。スクリプト名の代わりに `'-'` (標準入力を意味します) を指定すると、`sys.argv[0]` は `'-'` になります。`-c command` を使うと、`sys.argv[0]` は `'-c'` になります。`-m module` を使った場合、`sys.argv[0]` はモジュールのフルパスになります。`-c command` や `-m module` の後ろにオプションを指定した場合、Python インタプリタ自体はこれらの引数を処理せず、`sys.argv` を介して `command` や `module` から扱えるようになります。

2.1.2 対話モード

インタプリタが命令を端末 (tty) やコマンドプロンプトから読み取っている場合、インタプリタは対話モード (*interactive mode*) で動作しているといえます。このモードでは、インタプリタは一次プロンプト (*primary prompt*) を表示して、ユーザにコマンドを入力するよう促します。一次プロンプトは普通、三つの「大なり記号」(>>>) です。一つの入力が次の行まで続く (行継続: *continuation line* を行う) 場合、インタプリタは二次プロンプト (*secondary prompt*) を表示します。二次プロンプトは、デフォルトでは三つのドット (...) です。インタプリタは、最初のプロンプトを出す前にバージョン番号と著作権表示から始まる起動メッセージを出力します。

```
python
Python 2.6 (#1, Feb 28 2007, 00:02:06)
Type "help", "copyright", "credits" or "license" for more information.
>>>
```

行継続は、例えば以下の `if` 文のように、複数の行からなる構文を入力するときが必要です。

```
>>> the_world_is_flat = 1
>>> if the_world_is_flat:
...     print "Be careful not to fall off!"
...
Be careful not to fall off!
```

2.2 インタプリタとその環境

2.2.1 エラー処理

エラーが発生すると、インタプリタはエラーメッセージとスタックトレース (stack trace) を出力します。対話モードにいるときは、インタプリタは一次プロンプトに戻ります; スクリプトをファイルから実行しているときは、インタプリタはスタックトレースを出力した後、非ゼロの終了ステータスで終了します。(try 文の except 節で処理された例外は、ここでいうエラーにはあたりません。) いくつかのエラーは常に致命的であり、非ゼロの終了ステータスとなるプログラムの終了を引き起こします。例えばインタプリタ内部の矛盾やある種のメモリ枯渇が当てはまります。エラーメッセージは全て標準エラー出力に書き込まれます; これに対して、通常は実行した命令から出力される内容は標準出力に書き込まれます。

割り込み文字 (interrupt character、普通は Control-C か DEL) を一次または二次プロンプトに対してタイプすると、入力を取り消されて一次プロンプトに戻ります。¹ コマンドの実行中に割り込み文字をタイプすると KeyboardInterrupt 例外が送出されます。この例外は try 文で処理できます。

2.2.2 実行可能な Python スクリプト

BSD 風の Unix システムでは、Python スクリプトはシェルスクリプトのように直接実行可能にできます。これを行うには、以下の行

```
#!/usr/bin/env python
```

(ここではインタプリタがユーザの PATH 上にあると仮定しています) をスクリプトの先頭に置き、スクリプトファイルに実行可能モードを設定します。#! はファイルの最初の 2 文字でなければなりません。プラットフォームによっては、この最初の行を終端する改行文字が Windows 形式 ('\\r\\n') ではなく、Unix 形式 ('\\n') でなければならないことがあります。ハッシュまたはポンド文字、すなわち '#' は、Python ではコメントを書き始めるために使われていることに注意してください。

chmod コマンドを使えば、スクリプトに実行モード (または実行権) を与えることができます。

```
$ chmod +x myscript.py
```

Windows では、"実行モード" のような概念はありません。Python のインストーラーは自動的に .py ファイルを python.exe に関連付けるので、Python ファイルをダブルクリックするとそれをスクリプトとして実行します。.pyw 拡張子も (訳注: pythonw.exe に) 関連付けられ、通常コンソールウィンドウを抑制して実行します。

¹ GNU Readline パッケージに関する問題のせいで妨げられることがあります。

2.2.3 ソースコードの文字コード

ASCII 形式でない文字コードエンコーディングを Python ソースコードファイル中で使うことができます。最良の方法は、`#!` 行の直後にもう一行特殊なコメントを挿入して、ソースファイルのエンコーディングを指定するというものです。

```
# -*- coding: エンコーディング -*-
```

このように宣言しておく、ソースファイル中の全ての文字はエンコーディングという文字コードでエンコードされているものとして扱われ、Unicode 文字列リテラルを指定したエンコードで直接記述できます。実際に利用できるエンコードのリストは Python ライブラリリファレンスの `codecs` の節にあります。

ノート: 訳注: エンコーディングの部分には、実際には `utf-8` や `cp932` など、そのソースコードのエンコーディングを記述します。

プログラムから日本語を扱う場合には、必ずある程度の文字コードの知識が必要になります。もし文字コードについてよく判らないのであれば、まずは英語だけ扱いながらチュートリアルを読み進めて、並行して文字コードについても勉強してみましょう。

現在は、Unicode の扱い易さの観点から、推奨される文字コードは `utf-8` です。ただし、`utf-8` でソースを書いた場合、`utf-8` を表示できない Windows のコマンドプロンプトは `print "こんにちは"` を実行すると文字化けを起こすでしょう。その場合は、互換性のために古い `cp932` エンコーディングを使うか、`print u"こんにちは"` のように Unicode 文字列を使います。

例えばユーロ通貨記号を含む Unicode リテラルを書くために、ISO-8859-15 エンコーディングを使えます。ISO-8859-15 では、ユーロ通貨記号の序数 (ordinal) は 164 です。以下のスクリプトは 8364 という値 (Unicode でユーロ記号に対応するコードポイントの値) を出力して終了します。

```
# -*- coding: iso-8859-15 -*-
```

```
currency = u"€"  
print ord(currency)
```

利用しているエディタがファイルを UTF-8 バイト整列記号 (通称 BOM: Byte Order Mark) 付きの UTF-8 で保存できる場合、エンコード宣言の代わりに使うことができます。IDLE は `Options/General/Default Source Encoding/UTF-8` が設定されている場合、UTF-8 でエンコードされたファイルの識別機能をサポートします。ただし、(2.2 以前の) 古い Python リリースは UTF-8 シグネチャを理解しませんし、オペレーティングシステムは (Unix システムでしか使われていませんが) `#!` の行を含むスクリプトファイルを判別できなくなるので注意してください。

UTF-8 を (シグネチャやエンコーディング宣言を行って) 使うと、世界中のほとんどの言語で使われている文字を文字列リテラルやコメントの中に同時に使うことができます。識別子に対する非 ASCII 文字の使用はサポートされていません。全ての文字を正しく表示できるようにするには、使っているエディタがファイルを UTF-8 であると認識することができなければならず、かつファイル内で使われている全ての文字をサポートするようなフォントを使わなければなりません。

2.2.4 対話モード用の起動時実行ファイル

Python を対話的に使うときには、インタプリタが起動する度に実行される何らかの標準的なコマンドがあると便利なのがよくあります。これを行うには、PYTHONSTARTUP と呼ばれる環境変数を、インタプリタ起動時に実行されるコマンドが入ったファイル名に設定します。この機能は Unix シェルの .profile に似ています。

このファイルは対話セッションのときだけ読み出されます。Python がコマンドをスクリプトから読み出しているときや、/dev/tty がコマンドの入力元として明示的に指定されている (この場合対話的セッションのように動作します) わけではない 場合にはこのファイルは読み出されません。ファイル内のコマンドは、対話的コマンドが実行される名前空間と同じ名前空間内で実行されます。このため、ファイル内で定義されていたり import されたオブジェクトは、そのまま対話セッション内で使うことができます。また、このファイル内で sys.ps1 や sys.ps2 を変更して、プロンプトを変更することもできます。

もし現在のディレクトリから追加でスタートアップファイルを読み出したいのなら、グローバルのスタートアップファイルの中に if os.path.isfile('.pythonrc.py'): execfile('.pythonrc.py') のようなプログラムを書くことができます。スクリプト中でスタートアップファイルを使いたいのなら、以下のようにしてスクリプト中で明示的に実行しなければなりません。

```
import os
filename = os.environ.get('PYTHONSTARTUP')
if filename and os.path.isfile(filename):
    execfile(filename)
```

脚注

形式ばらない Python の紹介

以下の例では、入力と出力は(>>> や ...)といったプロンプトがあるかないかで区別します。例を実際に試してみるためには、プロンプトが表示されているときに、例中のプロンプトよりも後ろの内容全てをタイプ入力しなければなりません。プロンプトが先頭でない行はインタプリタからの出力です。

例中には二次プロンプトだけが表示されている行がありますが、これは空行を入力しなければならないことを意味しています。空行の入力は複数の行からなる命令の終わりをインタプリタに教えるために使われます。

このマニュアルにある例の多くは、対話プロンプトで入力されるものでもコメントを含んでいます。Python におけるコメント文はハッシュ文字 # で始まり、物理行の終わりまで続きます。コメントは行の先頭にも、空白やコードの後にも書くことができますが、文字列リテラルの内部に置くことはできません。文字列リテラル中のハッシュ文字はただのハッシュ文字です。

コメントはコードを明快にするためのものであり、Python はコメントを解釈しません。なので、コードサンプルを実際に入力して試して見るときは、コメントをを省いても大丈夫です。

例:

```
# これは1番目のコメント
SPAM = 1                # そしてこれは2番目のコメント
                        # ... そしてこれは3番目!
STRING = "# これはコメントではありません。"
```

3.1 Python を電卓として使う

それでは、簡単な Python コマンドをいくつか試しましょう。インタプリタを起動して、一次プロンプト、>>> が現れるのを待ちます。(そう長くはかからないはず)

3.1.1 数

インタプリタは単純な電卓のように動作します: 式を入力すると、その結果が表示されます。式の文法は素直なものです: 演算子 +, -, *, / は (Pascal や C といった) 他のほとんどの言語と同じように動作します。丸

括弧をグループ化に使うこともできます。例えば、

```
>>> 2+2
4
>>> # これはコメント
... 2+2
4
>>> 2+2 # そしてこれはコードと同じ行にあるコメント
4
>>> (50-5*6)/4
5
>>> # 整数の除算は floor (実数の解を越えない最大の整数) を返す:
... 7/3
2
>>> 7/-3
-3
```

等号 ('=') は変数に値を代入するときに使います。代入を行っても、その結果が次のプロンプトの前に出力されたりはしません。

```
>>> width = 20
>>> height = 5*9
>>> width * height
900
```

複数の変数に同時に値を代入することができます。

```
>>> x = y = z = 0 # x と y と z をゼロにする
>>> x
0
>>> y
0
>>> z
0
```

変数は、利用する前に (値を代入することによって) “定義” しなければなりません。定義していない変数を利用しようとするとエラーが発生します。

```
>>> # 未定義変数にアクセスする
... n
Traceback (most recent call last):
  File "<stdin>", line 1, in <module>
NameError: name 'n' is not defined
```

浮動小数点を完全にサポートしています。演算対象の値 (オペランド) の型が統一されていない場合、演算子は整数のオペランドを浮動小数点型に変換します。

```
>>> 3 * 3.75 / 1.5
7.5
>>> 7.0 / 2
3.5
```

複素数もサポートされています。虚数は接尾辞 `j` または `J` を付けて書き表します。ゼロでない実数部をもつ複素数は (実数部+虚数部 `j`) のように書き表すか、`complex` (実数部, 虚数部) 関数で生成できます。

```
>>> 1j * 1J
(-1+0j)
>>> 1j * complex(0,1)
(-1+0j)
>>> 3+1j*3
```

```
(3+3j)
>>> (3+1j)*3
(9+3j)
>>> (1+2j)/(1+1j)
(1.5+0.5j)
```

複素数は、常に実数部と虚数部に相当する二つの浮動小数点数で表されます。複素数 z からそれぞれの部分を取り出すには、`z.real` と `z.imag` を使います。

```
>>> a=1.5+0.5j
>>> a.real
1.5
>>> a.imag
0.5
```

浮動小数点数や整数へと変換する関数 (`float()`, `int()`, `long()`) は複素数に対しては動作しません—複素数を実数に変換する方法には、ただ一つの正解というものがないからです。絶対値 (magnitude) を (浮動小数点数として) 得るには `abs(z)` を使い、実数部を得るには `z.real` を使ってください。

```
>>> a=3.0+4.0j
>>> float(a)
Traceback (most recent call last):
  File "<stdin>", line 1, in ?
TypeError: can't convert complex to float; use abs(z)
>>> a.real
3.0
>>> a.imag
4.0
>>> abs(a) # sqrt(a.real**2 + a.imag**2)
5.0
```

対話モードでは、最後に表示された結果は変数 `_` に代入されます。このことを利用すると、Python を電卓として使うときに、計算を連続して行う作業が多少楽になります。以下に例を示します。

```
>>> tax = 12.5 / 100
>>> price = 100.50
>>> price * tax
12.5625
>>> price + _
113.0625
>>> round(_, 2)
113.06
```

ユーザはこの変数を読み取り専用の値として扱うべきです。この変数に明示的な代入を行ってはいけません—そんなことをすれば、同じ名前で元の特別な動作をする組み込み変数を覆い隠してしまうような、別のローカルな変数が生成されてしまいます。

3.1.2 文字列

数のほかに、Python は文字列も操作できます。文字列はいくつもの方法で表現できます。文字列はシングルまたはダブルのクォートで囲みます。

```
>>> 'spam eggs'
'spam eggs'
>>> 'doesn\'t'
"doesn't"
```

```
>>> "doesn't"
"doesn't"
>>> ' "Yes," he said.'
' "Yes," he said.'
>>> "\"Yes,\" he said."
' "Yes," he said.'
>>> ' "Isn\'t," she said.'
' "Isn\'t," she said.'
```

文字列リテラルはいくつかの方法で複数行にまたがって記述できます。一つ目の方法は継続行を使うことで、これには行の末尾の文字をバックスラッシュにします。こうすることで、次の行が現在の行と論理的に継続していることを示します。

```
hello = "This is a rather long string containing\n\
several lines of text just as you would do in C.\n\
    Note that whitespace at the beginning of the line is\
significant."

print hello
```

`\n` を使って文字列に改行位置を埋め込まなくてはならないことに注意してください。末尾のバックスラッシュの後ろにある改行文字は無視されます。従って、上の例は以下のような出力を行います。

```
This is a rather long string containing
several lines of text just as you would do in C.
    Note that whitespace at the beginning of the line is significant.
```

別の方法として、対になった三重クォート `"""` または `'''` で文字列を囲むこともできます。三重クォートを使っているときには、行末をエスケープする必要はありません。代わりに、行末の改行文字も文字列に含まれることになります。

```
print """
Usage: thingy [OPTIONS]
    -h                        Display this usage message
    -H hostname              Hostname to connect to
"""
```

は以下のような出力を行います。

```
Usage: thingy [OPTIONS]
    -h                        Display this usage message
    -H hostname              Hostname to connect to
```

文字列リテラルを“raw”文字列にすると、`\n` のようなエスケープシーケンスは改行に変換されません。逆に、行末のバックスラッシュやソースコード中の改行文字が文字列データに含まれます。つまり、以下の例:

```
hello = r"This is a rather long string containing\n\
several lines of text much as you would do in C."

print hello
```

は、以下のような出力を行います。

```
This is a rather long string containing\n\
several lines of text much as you would do in C.
```

インタプリタは、文字列演算の結果を、タイプして入力する時と同じ方法で出力します。文字列はクオー

ト文字で囲い、クオート文字自体やその他の特別な文字は、正しい文字が表示されるようにバックslashでエスケープします。文字列がシングルクオートを含み、かつダブルクオートを含まない場合には、全体をダブルクオートで囲います。そうでない場合にはシングルクオートで囲みます。(後で述べる `print` 文を使って、クオートやエスケープのない文字列を表示することができます。)

文字列は `+` 演算子で連結させる (くっつけて一つにする) ことができ、`*` 演算子で反復させることができます。

```
>>> word = 'Help' + 'A'
>>> word
'HelpA'
>>> '<' + word*5 + '>'
'<HelpAHelpAHelpAHelpAHelpA>'
```

隣あった二つの文字列リテラルは自動的に連結されます: 例えば、上記の最初の行は `word = 'Help' + 'A'` と書くこともできました; この機能は二つともリテラルの場合にのみ働くもので、任意の文字列表現で使うことができるわけではありません。

```
>>> 'str' 'ing'          # <- これは ok
'string'
>>> 'str'.strip() + 'ing' # <- これは ok
'string'
>>> 'str'.strip() 'ing'   # <- これはダメ
File "<stdin>", line 1, in ?
    'str'.strip() 'ing'
                ^
SyntaxError: invalid syntax
```

文字列は添字表記 (インデックス表記) することができます; C 言語と同じく、文字列の最初の文字の添字 (インデックス) は 0 となります。独立した文字型というものはありません; 単一の文字は、単にサイズが 1 の文字列です。Icon 言語と同じく、部分文字列を スライス表記: コロンで区切られた二つのインデックスで指定することができます。

```
>>> word[4]
'A'
>>> word[0:2]
'He'
>>> word[2:4]
'lp'
```

スライスのインデックスには便利なデフォルト値があります; 最初のインデックスを省略すると、0 と見なされます。第 2 のインデックスを省略すると、スライスしようとする文字列のサイズとみなされます。

```
>>> word[:2]      # 最初の 2 文字
'He'
>>> word[2:]      # 最初の 2 文字を除くすべて
'lpA'
```

C 言語の文字列と違い、Python の文字列は変更できません。インデックス指定された文字列中のある位置に代入を行おうとするとエラーになります。

```
>>> word[0] = 'x'
Traceback (most recent call last):
  File "<stdin>", line 1, in ?
TypeError: object does not support item assignment
>>> word[:1] = 'Splat'
Traceback (most recent call last):
```

```
File "<stdin>", line 1, in ?
TypeError: object does not support slice assignment
```

一方、文字列同士の内容を組み合わせた新しい文字列の生成は、簡単で効率的です。

```
>>> 'x' + word[1:]
'xelpA'
>>> 'Splat' + word[4]
'SplatA'
```

スライス演算には便利な不変式があります: `s[:i] + s[i:]` は `s` に等しくなります。

```
>>> word[:2] + word[2:]
'HelpA'
>>> word[:3] + word[3:]
'HelpA'
```

スライス表記に行儀の悪いインデックス指定をしても、値はたしなみよく処理されます: インデックスが大きすぎる場合は文字列のサイズと置き換えられます。スライスの下境界 (文字列の左端) よりも小さいインデックス値を上境界 (文字列の右端) に指定すると、空文字列が返されます。

```
>>> word[1:100]
'elpA'
>>> word[10:]
''
>>> word[2:1]
''
```

インデックスを負の数にして、右から数えることもできます。例えば、

```
>>> word[-1]      # 末尾の文字
'A'
>>> word[-2]      # 末尾から 2 つめの文字
'p'
>>> word[-2:]     # 末尾の 2 文字
'pA'
>>> word[:-2]     # 末尾の 2 文字を除くすべて
'Hel'
```

-0 は 0 と全く同じなので、右から数えることができません。注意してください!

```
>>> word[-0]      # (-0 は 0 に等しい)
'H'
```

負で、かつ範囲外のインデックスをスライス表記で行うと、インデックスは切り詰められます。しかし、単一の要素を指定する (スライスでない) インデックス指定でこれを行ってはいけません:

```
>>> word[-100:]
'HelpA'
>>> word[-10]     # エラー
Traceback (most recent call last):
  File "<stdin>", line 1, in ?
IndexError: string index out of range
```

スライスの働きかたをおぼえる良い方法は、インデックスが文字と文字のあいだ (*between*) を指しており、最初の文字の左端が 0 になっていると考えることです。そうすると、 n 文字からなる文字列中の最後の文字の右端はインデックス n となります。例えば、

```

+---+---+---+---+---+
| H | e | l | p | A |
+---+---+---+---+
0   1   2   3   4   5
-5  -4  -3  -2  -1

```

といった具合です。

数が記された行のうち、最初の方の行は、文字列中のインデクス 0...5 の位置を表します; 次の行は、対応する負のインデクスを表しています。 i から j までのスライス、それぞれ i, j とラベル付けされたけられた境界の間のすべての文字からなります。

非負のインデクス対の場合、スライスされたシーケンスの長さは、スライスの両端のインデクスが範囲内にあるかぎり、インデクス間の差になります。例えば、`word[1:3]` の長さは 2 になります。

組込み関数 `len()` は文字列の長さ (length) を返します。

```

>>> s = 'supercalifragilisticexpialidocious'
>>> len(s)
34

```

参考:

typeseq 次節で記述されている文字列および Unicode 文字列はシーケンス型の例であり、シーケンス型でサポートされている共通の操作をサポートしています。

string-methods (バイト) 文字列や Unicode 文字列では、基本的な変換や検索を行うための数多くのメソッドをサポートしています。

new-string-formatting `str.format()` を使った文字列のフォーマットについて、ここで解説されています。

string-formatting (バイト) 文字列や Unicode 文字列が `%` 演算子の左オペランドである場合に呼び出される (古い) フォーマット操作については、ここで詳しく記述されています。

3.1.3 Unicode 文字列

Python 2.0 から、プログラマはテキスト・データを格納するための新しいデータ型、Unicode オブジェクトを利用できるようになりました。Unicode オブジェクトを使うと、Unicode データ (<http://www.unicode.org/> 参照) を記憶したり、操作したりできます。また、Unicode オブジェクトは既存の文字列オブジェクトとよく統合されていて、必要に応じて自動変換されます。

Unicode には、古今のテキストで使われているあらゆる書き文字のあらゆる文字について、対応付けを行うための一つの序数を規定しているという利点があります。これまでは、書き文字のために利用可能な序数は 256 個しかなく、テキストは書き文字の対応付けを行っているコードページに束縛されているのが通常でした。このことは、とりわけソフトウェアの国際化 (internationalization. よく、`i18n` と書かれます — '`i`' + 18 文字 + '`n`' の意) に対して大きな混乱をもたらしました。Unicode では、すべての書き文字に対して単一のコードページを定義することで、これらの問題を解決しています。

Python では、Unicode 文字列の作成は通常の文字列を作成するのと同じように単純なものです。

```

>>> u'Hello World !'
u'Hello World !'

```

クオートの前にある小文字の 'u' は、Unicode 文字列を生成することになっていることを示します。文字列に特殊な文字を含めたいければ、Python の *Unicode-Escape* エンコーディングを使って行えます。以下はその方法を示しています。

```
>>> u'Hello\u0020World !'
u'Hello World !'
```

エスケープシーケンス `\u0020` は、序数の値 `0x0020` を持つ Unicode 文字 (スペース文字) を、指定場所に挿入することを示します。

他の文字は、それぞれの序数値をそのまま Unicode の序数値に用いて解釈されます。多くの西洋諸国で使われている標準 Latin-1 エンコーディングのリテラル文字列があれば、Unicode の下位 256 文字が Latin-1 の 256 文字と同じになっていて便利だと思うことでしょう。

上級者のために、通常の文字列の場合と同じく raw モードもあります。これには、文字列を開始するクオート文字の前に 'ur' を付けて、Python に *Raw-Unicode-Escape* エンコーディングを使わせなければなりません。このモードでは、上記の `\uXXXX` の変換は、小文字の 'u' の前に奇数個のバックスラッシュがあるときにだけ適用されます。

```
>>> ur'Hello\u0020World !'
u'Hello World !'
>>> ur'Hello\\u0020World !'
u'Hello\\\u0020World !'
```

raw モードは、正規表現を記述する時のように、沢山のバックスラッシュを入力しなければならないときとても役に立ちます。

これら標準のエンコーディングとは別に、Python では、既知の文字エンコーディングに基づいて Unicode 文字列を生成する一連の手段を提供しています。

組み込み関数 `unicode()` は、登録されているすべての Unicode codecs (COder: エンコーダと DECoder デコーダ) へのアクセス機能を提供します。codecs が変換できるエンコーディングには、よく知られているものとして *Latin-1*, *ASCII*, *UTF-8* および *UTF-16* があります。後者の二つは可変長のエンコードで、各 Unicode 文字を 1 バイトまたはそれ以上のバイト列に保存します。デフォルトのエンコーディングは通常 ASCII に設定されています。ASCII では 0 から 127 の範囲の文字だけを通過させ、それ以外の文字は受理せずエラーを出します。Unicode 文字列を印字したり、ファイルに書き出したり、`str()` で変換すると、デフォルトのエンコーディングを使った変換が行われます。

```
>>> u"abc"
u'abc'
>>> u"あいう"
u'\x82\xa0\x82\xa2\x82\xa4'
>>> str(u"あいう")
Traceback (most recent call last):
  File "<stdin>", line 1, in ?
UnicodeEncodeError: 'ascii' codec can't encode characters in position 0-5:
ordinal not in range(128)
```

ノート: 訳注: IDLE をはじめ、ほとんどの Python 2 用のインタラクティブシェルは、非 ASCII 文字を含む Unicode リテラルを利用することができません。このサンプルを実行するには、インタプリタ内蔵のインタラクティブシェルを利用する必要があります。

この問題は Python 3 では解決されています。

特定のエンコーディングを使って Unicode 文字列を 8 ビットの文字列に変換するために、Unicode オブジェクトは `encode()` メソッドを提供しています。このメソッドは第一引数としてエンコーディングの名前をとります。エンコーディング名には小文字の使用が推奨されています。

```
>>> u"あいう".encode('utf-8')
'\xe3\x81\x82\xe3\x81\x84\xe3\x81\x86'
```

特定のエンコーディングで書かれているデータがあり、そこから Unicode 文字列を生成したいなら、`unicode()` を使い、第 2 引数にエンコーディング名を指定します。

```
>>> unicode('\xe3\x81\x82\xe3\x81\x84\xe3\x81\x86', 'utf-8')
u'\u3042\u3044\u3046'
```

3.1.4 リスト

Python は数多くの 複合 (*compound*) データ型を備えており、別々の値を一まとめにするために使えます。最も汎用的なデータ型は リスト (*list*) で、コンマで区切られた値からなるリストを各カッコで囲んだものとして書き表されます。リストの要素をすべて同じ型にする必要はありません。

```
>>> a = ['spam', 'eggs', 100, 1234]
>>> a
['spam', 'eggs', 100, 1234]
```

文字列のインデクスと同じく、リストのインデクスは 0 から開始します。また、スライス、連結なども行えます。

```
>>> a[0]
'spam'
>>> a[3]
1234
>>> a[-2]
100
>>> a[1:-1]
['eggs', 100]
>>> a[:2] + ['bacon', 2*2]
['spam', 'eggs', 'bacon', 4]
>>> 3*a[:3] + ['Boo!']
['spam', 'eggs', 100, 'spam', 'eggs', 100, 'spam', 'eggs', 100, 'Boo!']
```

すべてのスライス演算は、要求された要素を含む新しいリストを返します。これは、以下のスライスがリスト *a* の浅いコピーを返すことを意味します。

```
>>> a[:]
['spam', 'eggs', 100, 1234]
```

不変 (*immutable*) な文字列型と違い、リストは個々の要素を変更することができます。

```
>>> a
['spam', 'eggs', 100, 1234]
>>> a[2] = a[2] + 23
>>> a
['spam', 'eggs', 123, 1234]
```

スライスに代入することもできます。スライスの代入を行って、リストのサイズを変更したり、完全に消すことさえできます。

```
>>> # いくつかの項目を置換する:
... a[0:2] = [1, 12]
>>> a
[1, 12, 123, 1234]
>>> # いくつかの項目を除去する:
... a[0:2] = []
>>> a
[123, 1234]
>>> # いくつかの項目を挿入する:
... a[1:1] = ['bletch', 'xyzzy']
>>> a
[123, 'bletch', 'xyzzy', 1234]
>>> # それ自身 (のコピー) を先頭に挿入する
>>> a[:0] = a
>>> a
[123, 'bletch', 'xyzzy', 1234, 123, 'bletch', 'xyzzy', 1234]
>>> # リストをクリアする: 全てのアイテムを空のリストに置換する
>>> a[:] = []
>>> a
[]
```

組込み関数 `len()` はリストにも適用できます。

```
>>> a = ['a', 'b', 'c', 'd']
>>> len(a)
4
```

リストを入れ子にする (ほかのリストを含むリストを造る) ことも可能です。例えば、

```
>>> q = [2, 3]
>>> p = [1, q, 4]
>>> len(p)
3
>>> p[1]
[2, 3]
>>> p[1][0]
2
>>> p[1].append('extra')      # 5.1 節を参照
>>> p
[1, [2, 3, 'extra'], 4]
>>> q
[2, 3, 'extra']
```

最後の例では、`p[1]` と `q` が実際には同一のオブジェクトを参照していることに注意してください! オブジェクトの意味付け (*semantics*) については、後ほど触れることにします。

3.2 プログラミングへの第一歩

もちろん、2 たす 2 よりももっと複雑な仕事にも Python を使うことができます。 *Fibonacci* 級数列の先頭の部分列は次のようにして書くことができます。

```
>>> # Fibonacci 級数:
... # 二つの要素の和が次の要素を定義する
... a, b = 0, 1
>>> while b < 10:
...     print b
...     a, b = b, a+b
... 
```

```

1
1
2
3
5
8

```

上の例では、いくつか新しい機能を取り入れています。

- 最初の行には 複数同時の代入 (*multiple assignment*) が入っています: 変数 `a` と `b` は、それぞれ同時に新しい値 `0` と `1` になっています。この代入は最後の行でも再度使われており、代入が行われる前に右辺の式がまず評価されます。右辺の式は左から右へと順番に評価されます。
- `while` は、条件 (ここでは `b < 10`) が真である限り実行を繰り返し (ループし) ます。Python では、C 言語と同様に、ゼロでない整数値は真となり、ゼロは偽です。条件式は文字列値やリスト値、実際には任意のシーケンス型でもかまいません。1 つ以上の長さのシーケンスは真で、空のシーケンスは偽になります。例中で使われている条件テストはシンプルな比較です。標準的な比較演算子は C 言語と同様です: すなわち、`<` (より小さい)、`>` (より大きい)、`==` (等しい)、`<=` (より小さいか等しい)、`>=` (より大きい等しい)、および `!=` (等しくない)、です。
- ループの本体 (*body*) は インデント (*indent*, 字下げ) されています: インデントは Python において実行文をグループにまとめる方法です。Python は (いまだに!) 賢い入力行編集機能を提供していないので、インデントされた各行を入力するにはタブや (複数の) スペースを使わなければなりません。実際には、Python へのより複雑な入力を準備するにはテキストエディタを使うことになるでしょう; ほとんどのテキストエディタは自動インデント機能を持っています。複合文を対話的に入力するときには、(パーザはいつ最後の行を入力したのか推し量ることができないので) 入力 of 完了を示すために最後に空行を続けなければなりません。基本ブロックの各行は同じだけインデントされていなければならないので注意してください。
- `print` は指定した (1 つまたは複数の) 式の値を書き出します。 `print` は、(電卓の例でしたように) 単に値を出力したい式を書くのとは、複数の式や文字列を扱う方法が違います。文字列は引用符無しで出力され、複数の要素の間にはスペースが挿入されるので、以下のように出力をうまく書式化できます。

```

>>> i = 256*256
>>> print 'The value of i is', i
The value of i is 65536

```

末尾にコンマを入れると、出力を行った後に改行されません。

```

>>> a, b = 0, 1
>>> while b < 1000:
...     print b,
...     a, b = b, a+b
...
1 1 2 3 5 8 13 21 34 55 89 144 233 377 610 987

```

インタプリタは、最後に入力した行がまだ完全な文になっていない場合、改行をはさんで次のプロンプトを出力することに注意してください。

その他の制御フローツール

先ほど紹介した `while` 文の他にも、Python は他の言語でおなじみの制御フロー文を備えていますが、これらには多少ひねりを加えています。

4.1 `if` 文

おそらく最もおなじみの文型は `if` 文でしょう。例えば、

```
>>> x = int(raw_input("Please enter an integer: "))
Please enter an integer: 42
>>> if x < 0:
...     x = 0
...     print 'Negative changed to zero'
... elif x == 0:
...     print 'Zero'
... elif x == 1:
...     print 'Single'
... else:
...     print 'More'
...
More
```

ゼロ個以上の `elif` 部を使うことができ、`else` 部を付けることもできます。キーワード '`elif`' は '`else if`' を短くしたもので、過剰なインデントを避けるのに役立ちます。一連の `if ... elif ... elif ...` は、他の言語における `switch` 文や `case` 文の代用となります。

4.2 `for` 文

Python の `for` 文は、読者が C 言語や Pascal 言語で使われているかもしれない `for` 文とは少し違います。(Pascal のように) 常に算術型の数列にわたる反復を行ったり、(C のように) 繰返しステップと停止条件を両方ともユーザが定義できるようにするのは違い、Python の `for` 文は、任意のシーケンス型 (リストまたは文字列) にわたって反復を行います。反復の順番はシーケンス中に要素が現れる順番です。例えば、

```
>>> # いくつかの文字列の長さを測る:
... a = ['cat', 'window', 'defenestrate']
>>> for x in a:
...     print x, len(x)
...
cat 3
window 6
defenestrate 12
```

反復操作の対象になっているシーケンスをループの中で書き換える操作(リストのような、変更可能 (mutable) なシーケンス型でおきます)は、安全ではありません。もし反復処理を行う対象とするリスト型を変更したいのなら、(対象の要素を複製するなどして) コピーに対して反復を行わなければなりません。この操作にはスライス表記を使うと特に便利です。

```
>>> for x in a[:]: # リスト全体のスライス・コピーを作る
...     if len(x) > 6: a.insert(0, x)
...
>>> a
['defenestrate', 'cat', 'window', 'defenestrate']
```

4.3 range() 関数

数列にわたって反復を行う必要がある場合、組み込み関数 `range()` が便利です。この関数は算術型の数列が入ったリストを生成します。

```
>>> range(10)
[0, 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9]
```

指定した終端値は生成されるリストには入りません。 `range(10)` は 10 個の値からなるリストを生成し、長さ 10 のシーケンスにおける各項目のインデックスとなります。 `range` を別の数から開始したり、他の増加量 (負の増加量でさえも; 増加量は時に ‘ステップ (step)’ と呼ばれることもあります) を指定することもできます。

```
>>> range(5, 10)
[5, 6, 7, 8, 9]
>>> range(0, 10, 3)
[0, 3, 6, 9]
>>> range(-10, -100, -30)
[-10, -40, -70]
```

あるシーケンスにわたってインデックスで反復を行うには、 `range()` と `len()` を次のように組み合わせられます。

```
>>> a = ['Mary', 'had', 'a', 'little', 'lamb']
>>> for i in range(len(a)):
...     print i, a[i]
...
0 Mary
1 had
2 a
3 little
4 lamb
```

しかし、多くの場合は `enumerate()` 関数を使う方が便利です。[ループのテクニック](#) を参照してください。

4.4 break 文と continue 文とループの else 節

break 文は、C 言語と同じく、最も内側の for または while ループを中断します。

continue 文は、これもまた C 言語から借りてきたものですが、ループを次の反復処理に飛ばします。

ループ文は else 節を持つことができます。else 節は、(for で) 反復処理対象のリストを使い切ってループが終了したとき、または (while で) 条件が偽になったときに実行されますが、break 文でループが終了したときは実行されません。この動作を、素数を探す下記のループを例にとって示します。

```
>>> for n in range(2, 10):
...     for x in range(2, n):
...         if n % x == 0:
...             print n, 'equals', x, '*', n/x
...             break
...         else:
...             # 因数が見つからずにループが終了
...             print n, 'is a prime number'
...
2 is a prime number
3 is a prime number
4 equals 2 * 2
5 is a prime number
6 equals 2 * 3
7 is a prime number
8 equals 2 * 4
9 equals 3 * 3
```

4.5 pass 文

pass 文は何もしません。pass は、文を書くことが構文上要求されているが、プログラム上何の動作もする必要がない時に使われます。

```
>>> while True:
...     pass # キーボード割り込み (keyboard interrupt, Ctrl+C) をビジーウェイトする。
...
```

これは最小のクラスを作るときによく使われる方法です。

```
>>> class MyEmptyClass:
...     pass
...
```

pass が使われるもう 1 つの場所は、新しいコードを書いている時の関数や条件文の中身です。こうすることで、具体的なコードを書かないで抽象的なレベルで考えることができます。pass は何もすることなく無視されます。

```
>>> def initlog(*args):
...     pass # 忘れずにここを実装すること!
...
```

4.6 関数を定義する

フィボナッチ数列 (Fibonacci series) を任意の上限値まで書き出すような関数を作成できます。

```
>>> def fib(n):      # n までのフィボナッチ級数を出力する
...     """Print a Fibonacci series up to n."""
...     a, b = 0, 1
...     while a < n:
...         print a,
...         a, b = b, a+b
...
>>> # 今しがた定義した関数を呼び出す:
... fib(2000)
0 1 1 2 3 5 8 13 21 34 55 89 144 233 377 610 987 1597
```

`def` は関数の定義 (*definition*) を導くキーワードです。`def` の後には、関数名と仮引数を丸括弧で囲んだりストを続けなければなりません。関数の実体を構成する実行文は次の行から始め、インデントされていなければなりません。

関数の本体の記述する文の最初の行は文字列リテラルにすることもできます。その場合、この文字列は関数のドキュメンテーション文字列 (documentation string)、または *docstring* と呼ばれます。(docstring については [ドキュメンテーション文字列](#) でさらに扱っています。) ドキュメンテーション文字列を使ったツールには、オンライン文書や印刷文書を自動的に生成したり、ユーザが対話的にコードから直接閲覧できるようにするものがあります。自分が書くコードにドキュメンテーション文字列を入れるのはよい習慣です。書く癖をつけてください。

関数を実行 (*execution*) するとき、関数のローカル変数のために使われる新たなシンボルテーブル (symbol table) が用意されます。もっと正確にいうと、関数内で変数への代入を行うと、その値はすべてこのローカルなシンボルテーブルに記憶されます。一方、変数の参照を行うと、まずローカルなシンボルテーブルが検索され、次にさらに外側の関数¹のローカルなシンボルテーブルを検索し、その後グローバルなシンボルテーブルを調べ、最後に組み込みの名前テーブルを調べます。従って、関数の中では、グローバルな変数を参照することはできますが、直接値を代入することは (global 文で名前を挙げておかない限り) できません。

関数を呼び出す際の実際のパラメタ (引数) は、関数が呼び出されるときに関数のローカルなシンボルテーブル内に取り込まれます。そうすることで、引数は値渡し (*call by value*) で関数に渡されることとなります (ここでの値 (*value*) とは常にオブジェクトへの参照 (*reference*) をいい、オブジェクトの値そのものではありません)²。ある関数がほかの関数を呼び出すときには、新たな呼び出しのためにローカルなシンボルテーブルが新たに作成されます。

関数の定義を行うと、関数名は現在のシンボルテーブル内に取り入れられます。関数名の値は、インタプリタからはユーザ定義関数 (user-defined function) として認識される型を持ちます。この値は別の名前に代入して、後にその名前を関数として使うこともできます。これは一般的な名前変更のメカニズムとして働きます。

```
>>> fib
<function fib at 10042ed0>
>>> f = fib
>>> f(100)
0 1 1 2 3 5 8 13 21 34 55 89
```

¹ 訳注: Python では関数内で関数を定義することができ、内側の関数から外側の関数のローカル変数を参照することができます。

² 実際には、オブジェクトへの参照渡し (*call by object reference*) と書けばよいのかもしれませんが。というのは、変更可能なオブジェクトが渡されると、関数の呼び出し側は、呼び出された側の関数がオブジェクトに (リストに値が挿入されるといった) 何らかの変更に出くわすことになるからです。

他の言語出身の人からは、`fib` は値を返さないので関数ではなく手続き (procedure) だと異論があるかもしれませんね。技術的に言えば、実際には `return` 文を持たない関数もややつまらない値ですが値を返しています。この値は `None` と呼ばれます (これは組み込みの名前です)。 `None` だけを書き出そうとすると、インタプリタは通常出力を抑制します。本当に出力したいのなら、以下のように `print` を使うと見ることができます。

```
>>> fib(0)
>>> print fib(0)
None
```

フィボナッチ数列の数からなるリストを出力する代わりに、値を返すような関数を書くのは簡単です。

```
>>> def fib2(n): # n までのフィボナッチ級数を返す
...     """Return a list containing the Fibonacci series up to n."""
...     result = []
...     a, b = 0, 1
...     while a < n:
...         result.append(a)      # 下記参照
...         a, b = b, a+b
...     return result
...
>>> f100 = fib2(100)      # 関数を呼び出す
>>> f100                  # 結果を出力する
[0, 1, 1, 2, 3, 5, 8, 13, 21, 34, 55, 89]
```

この例は Python の新しい機能を示しています。

- `return` 文では、関数から一つ値を返します。 `return` の引数となる式がない場合、 `None` が返ります。関数が終了したときにも `None` が返ります。
- 文 `result.append(a)` では、リストオブジェクト `result` のメソッド (*method*) を呼び出しています。メソッドとは、オブジェクトに‘属している’関数のことで、`obj` を何らかのオブジェクト (式であっても構いません)、`methodname` をそのオブジェクトで定義されているメソッド名とすると、`obj.methodname` と書き表されます。異なる型は異なるメソッドを定義しています。異なる型のメソッドで同じ名前のメソッドを持つことができ、あいまいさを生じることはありません。(クラス (*class*) を使うことで、自前のオブジェクト型とメソッドを定義することもできます。 [クラス](#) 参照) 例で示されているメソッド `append()` は、リストオブジェクトで定義されています; このメソッドはリストの末尾に新たな要素を追加します。この例での `append()` は `result = result + [a]` と等価ですが、より効率的です。

4.7 関数定義についてもう少し

可変個の引数を伴う関数を定義することもできます。引数の定義方法には 3 つの形式があり、それらを組み合わせることができます。

4.7.1 デフォルトの引数値

もっとも便利なのは、一つ以上の引数に対してデフォルトの値を指定する形式です。この形式を使うと、定義されている引数より少ない個数の引数で呼び出せる関数を作成します。

```
def ask_ok(prompt, retries=4, complaint='Yes or no, please!'):
    while True:
        ok = raw_input(prompt)
        if ok in ('y', 'ye', 'yes'):
            return True
        if ok in ('n', 'no', 'nop', 'nope'):
            return False
        retries = retries - 1
        if retries < 0:
            raise IOError('refusenik user')
        print complaint
```

この関数はいくつかの方法で呼び出せます。

- 必須の引数のみ与える: `ask_ok('Do you really want to quit?')`
- 一つのオプション引数を与える: `ask_ok('OK to overwrite the file?', 2)`
- 全ての引数を与える: `ask_ok('OK to overwrite the file?', 2, 'Come on, only yes or no!')`

この例では `in` キーワードが導入されています。このキーワードはシーケンスが特定の値を含んでいるかどうか調べるのに使われます。

デフォルト値は、関数が定義された時点で、関数を定義している側のスコープ (scope) で評価されるので、

```
i = 5

def f(arg=i):
    print arg

i = 6
f()
```

は 5 を出力します。

重要な警告: デフォルト値は 1 度だけしか評価されません。デフォルト値がリストや辞書のような変更可能なオブジェクトの時にはその影響がでます。例えば以下の関数は、後に続く関数呼び出しで関数に渡されている引数を累積します。

```
def f(a, L=[]):
    L.append(a)
    return L

print f(1)
print f(2)
print f(3)
```

このコードは、

```
[1]
[1, 2]
[1, 2, 3]
```

を出力します。

後続の関数呼び出しでデフォルト値を共有したくなければ、代わりに以下のように関数を書くことができます。

```
def f(a, L=None):
    if L is None:
        L = []
    L.append(a)
    return L
```

4.7.2 キーワード引数

関数を `keyword = value` という形式のキーワード引数を使って呼び出すこともできます。例えば、以下の関数は、

```
def parrot(voltage, state='a stiff', action='vroom', type='Norwegian Blue'):
    print "-- This parrot wouldn't", action,
    print "if you put", voltage, "volts through it."
    print "-- Lovely plumage, the", type
    print "-- It's", state, "!"
```

以下のいずれの方法でも呼び出せます。

```
parrot(1000)
parrot(action = 'VOOOOOM', voltage = 1000000)
parrot('a thousand', state = 'pushing up the daisies')
parrot('a million', 'bereft of life', 'jump')
```

しかし、以下の呼び出しはすべて不正なものです。

```
parrot() # 必要な引数がない
parrot(voltage=5.0, 'dead') # キーワード引数の後に非キーワード引数がある
parrot(110, voltage=220) # 引数に対して値が重複している
parrot(actor='John Cleese') # 未知のキーワードを使用している
```

一般に、引数リストでは、固定引数 (positional argument) の後ろにキーワード引数を置かねばならず、キーワードは仮引数名から選ばなければなりません。仮引数がデフォルト値を持っているかどうかは重要ではありません。引数はいずれも一つ以上の値を受け取りません — 同じ関数呼び出しの中では、固定引数に対応づけられた仮引数名をキーワードとして使うことはできません。この制限のために実行が失敗する例を以下に示します。

```
>>> def function(a):
...     pass
...
>>> function(0, a=0)
Traceback (most recent call last):
  File "<stdin>", line 1, in ?
TypeError: function() got multiple values for keyword argument 'a'
```

仮引数の最後に `**name` の形式のものと、それまでの仮引数に対応したものを除くすべてのキーワード引数が入った辞書 (*typesmapping* を参照) を受け取ります。 `**name` は `*name` の形式をとる、仮引数のリストを超えた位置指定引数の入ったタプルを受け取る引数 (次の節で述べます) と組み合わせることができます。 (`*name` は `**name` より前になければなりません)。例えば、ある関数の定義を以下のようにすると、

```
def cheeseshop(kind, *arguments, **keywords):
    print "-- Do you have any", kind, "?"
    print "-- I'm sorry, we're all out of", kind
    for arg in arguments: print arg
```

```
print "-" * 40
keys = keywords.keys()
keys.sort()
for kw in keys: print kw, ":", keywords[kw]
```

呼び出しは以下のようになり、

```
cheeseshop("Limburger", "It's very runny, sir.",
           "It's really very, VERY runny, sir.",
           shopkeeper="Michael Palin",
           client="John Cleese",
           sketch="Cheese Shop Sketch")
```

もちろん以下のように出力されます。

```
-- Do you have any Limburger ?
-- I'm sorry, we're all out of Limburger
It's very runny, sir.
It's really very, VERY runny, sir.
-----
client : John Cleese
shopkeeper : Michael Palin
sketch : Cheese Shop Sketch
```

キーワード引数名のリストに対して `sort()` を呼び出した後に `keywords` 辞書の内容を出力していることに注意してください。 `sort()` が呼び出されていないと、引数が出力される順番は不確定となります。

4.7.3 任意引数リスト

最後に、最も使うことの少ない選択肢として、関数が任意の個数の引数で呼び出せるよう指定する方法があります。これらの引数はタプル(タプルとシーケンスを参照)に格納されます。可変個の引数の前に、ゼロ個かそれ以上の引数があっても構いません。

```
def write_multiple_items(file, separator, *args):
    file.write(separator.join(args))
```

4.7.4 引数リストのアンパック

引数がすでにリストやタプルになっていて、個別な固定引数を要求する関数呼び出しに渡すためにアンパックする必要がある場合には、逆の状況が起こります。例えば、組み込み関数 `range()` は引数 `start` と `stop` を別に与える必要があります。個別に引数を与えることができない場合、関数呼び出しを `*` 演算子を使って書き、リストやタプルから引数をアンパックします。

```
>>> range(3, 6)                # 個別の引数を使った通常の呼び出し
[3, 4, 5]
>>> args = [3, 6]
>>> range(*args)               # リストからアンパックされた引数での呼び出し
[3, 4, 5]
```

同じやりかたで、`**` オペレータを使って辞書でもキーワード引数を渡すことができます。

```
>>> def parrot(voltage, state='a stiff', action='vroom'):
...     print "-- This parrot wouldn't", action,
...     print "if you put", voltage, "volts through it.",
...     print "E's", state, "!"
...
>>> d = {"voltage": "four million", "state": "bleedin' demised", "action": "VOOM"}
>>> parrot(**d)
-- This parrot wouldn't VOOM if you put four million volts through it. E's bleedin' demised !
```

4.7.5 ラムダ式

多くの人の要望により、Lisp のような関数型プログラミング言語によくあるいくつかの機能が Python に加えられました。キーワード `lambda` を使うと、名前のない小さな関数を生成できます。例えば `lambda a, b: a+b` は、二つの引数の和を返す関数です。ラムダ式 (lambda form) は、関数オブジェクトが要求されている場所にならどこでも使うことができます。ラムダ式は、構文上単一の式に制限されています。意味付け的には、ラムダ形式はただ通常の関数に構文的な糖衣をかぶせたものに過ぎません。入れ子構造になった関数定義と同様、ラムダ式もそれを取り囲むスコープから変数を参照することができます。

```
>>> def make_incrementor(n):
...     return lambda x: x + n
...
>>> f = make_incrementor(42)
>>> f(0)
42
>>> f(1)
43
```

4.7.6 ドキュメンテーション文字列

ドキュメンテーション文字列については、その内容と書式に関する慣習ができつつあります。

最初の行は、常に対象物の目的を短く簡潔にまとめたものでなくてはなりません。簡潔に書くために、対象物の名前や型を明示する必要はありません。名前や型は他の方法でも得られるからです (名前がたまたま関数の演算内容を記述する動詞である場合は例外です)。最初の行は大文字で始まり、ピリオドで終わってなければなりません。

ドキュメンテーション文字列中にさらに記述すべき行がある場合、二行目は空行にし、まとめの行と残りの記述部分を視覚的に分離します。つづく行は一つまたはそれ以上の段落で、対象物の呼び出し規約や副作用について記述します。

Python のパーザは複数行にわたる Python 文字列リテラルからインデントを剥ぎ取らないので、ドキュメントを処理するツールでは必要に応じてインデントを剥ぎ取らなければなりません。この処理は以下の規約に従って行います。最初の行の 後にある 空行でない最初の行が、ドキュメント全体のインデントの量を決めます。(最初の行は通常、文字列を開始するクォートに隣り合っているため、インデントが文字列リテラル中に現れないためです。) このインデント量と “等価な” 空白が、文字列のすべての行頭から剥ぎ取られます。インデントの量が少ない行を書いてはならないのですが、もしそういう行があると、先頭の空白すべてが剥ぎ取られます。インデントの空白の大きさが等しいかどうかは、タブ文字を (通常は 8 文字のスペースとして) 展開した後に調べられます。

以下に複数行のドキュメンテーション文字列の例を示します。

```
>>> def my_function():
...     """Do nothing, but document it.
...
...     No, really, it doesn't do anything.
...     """
...     pass
>>> print my_function.__doc__
Do nothing, but document it.

    No, really, it doesn't do anything.
```

4.8 間奏曲: コーディングスタイル

これからより長くより複雑な Python のコードを書いていくので、そろそろコーディングスタイル について語っても良い頃です。ほとんどの言語は様々なスタイルで書け (もっと簡潔に言えばフォーマットでき)、スタイルによって読み易さが異なります。他人にとって読み易いコードにしようとするのはどんなときでも良い考えであり、良いコーディングスタイルを採用することが非常に強力な助けになります。

Python には、ほとんどのプロジェクトが守っているスタイルガイドとして [PEP 8](#) があります。それは非常に読み易く目に優しいコーディングスタイルを推奨しています。全ての Python 開発者はある時点でそれを読むべきです。ここに最も重要な点を抜き出しておきます。

- インデントには空白 4 つを使い、タブは使わないこと。

空白 4 つは (深くネストできる) 小さいインデントと (読み易い) 大きいインデントのちょうど中間に当たります。タブは混乱させるので、使わずにおくのが良いです。

- ソースコードの幅が 79 文字を越えないように行を折り返すこと。

こうすることで小さいディスプレイを使っているユーザも読み易くなり、大きなディスプレイではソースコードファイルを並べることもできるようになります。

- 関数やクラスや関数内の大きめのコードブロックの区切りに空行を使いなさい。

- 可能なら、コメントはコードと同じ行に書きなさい。

- docstring を使いなさい。

- 演算子の前後とコンマの後には空白を入れ、括弧類のすぐ内側には空白を入れないこと: `a = f(1, 2) + g(3, 4)`

- クラスや関数に一貫性のある名前を付けなさい。慣習では `CamelCase` をクラス名に使い、`lower_case_with_underscores` を関数名やメソッド名に使います。常に `self` をメソッドの第 1 引数の名前 (クラスやメソッドについては [クラス初見](#) を見よ) として使いなさい。

- あなたのコードを世界中で使ってもらうつもりなら、風変りなエンコーディングは使わないこと。どんな場合でも ASCII が最も上手いきます。

脚注

データ構造

この章では、すでに学んだことについてより詳しく説明するとともに、いくつか新しいことを追加します。

5.1 リスト型についてもう少し

リストデータ型には、他にもいくつかメソッドがあります。リストオブジェクトのすべてのメソッドを以下に示します。

`list.append(x)`

リストの末尾に要素を一つ追加します。 `a[len(a):] = [x]` と等価です。

`list.extend(L)`

指定したリスト中のすべての要素を対象のリストに追加し、リストを拡張します。 `a[len(a):] = L` と等価です。

`list.insert(i, x)`

指定した位置に要素を挿入します。第 1 引数は、リストのインデクスで、そのインデクスを持つ要素の直前に挿入が行われます。従って、`a.insert(0, x)` はリストの先頭に挿入を行います。また `a.insert(len(a), x)` は `a.append(x)` と等価です。

`list.remove(x)`

リスト中で、値 `x` を持つ最初の要素を削除します。該当する項目がなければエラーとなります。

`list.pop([i])`

リスト中の指定された位置にある要素をリストから削除して、その要素を返します。インデクスが指定されなければ、`a.pop()` はリストの末尾の要素を削除して返します。この場合も要素は削除されます。(メソッドの用法 (signature) で `i` の両側にある角括弧は、この引数がオプションであることを表しているだけなので、角括弧を入力する必要はありません。この表記法は Python Library Reference の中で頻繁に見ることになるでしょう。)

`list.index(x)`

リスト中で、値 `x` を持つ最初の要素のインデクスを返します。該当する項目がなければエラーとなります。

```
list.count(x)
```

リストでの x の出現回数を返します。

```
list.sort()
```

リストの項目を、インプレース演算 (in place、元のデータを演算結果で置き換えるやりかた) でソートします。

```
list.reverse()
```

リストの要素を、インプレース演算で逆順にします。

以下にリストのメソッドをほぼ全て使った例を示します。

```
>>> a = [66.25, 333, 333, 1, 1234.5]
>>> print a.count(333), a.count(66.25), a.count('x')
2 1 0
>>> a.insert(2, -1)
>>> a.append(333)
>>> a
[66.25, 333, -1, 333, 1, 1234.5, 333]
>>> a.index(333)
1
>>> a.remove(333)
>>> a
[66.25, -1, 333, 1, 1234.5, 333]
>>> a.reverse()
>>> a
[333, 1234.5, 1, 333, -1, 66.25]
>>> a.sort()
>>> a
[-1, 1, 66.25, 333, 333, 1234.5]
```

5.1.1 リストをスタックとして使う

リスト型のメソッドのおかげで、簡単にリストをスタックとして使えます。スタックでは、最後に追加された要素が最初に取り出されます (“last-in, first-out”)。スタックの一番上に要素を追加するには `append()` を使います。スタックの一番上から要素を取り出すには `pop()` をインデックスを指定せずに使います。例えば以下のようにします。

```
>>> stack = [3, 4, 5]
>>> stack.append(6)
>>> stack.append(7)
>>> stack
[3, 4, 5, 6, 7]
>>> stack.pop()
7
>>> stack
[3, 4, 5, 6]
>>> stack.pop()
6
>>> stack.pop()
5
>>> stack
[3, 4]
```

5.1.2 リストをキューとして使う

リストをキュー (queue) として使うことも可能です。この場合、最初に追加した要素を最初に取り出します (“first-in, first-out”)。しかし、リストでは効率的にこの目的を達成することが出来ません。追加 (append) や取り出し (pop) をリストの末尾に対しておこなうと速いのですが、挿入 (insert) や取り出し (pop) をリストの先頭に対しておこなうと遅くなってしまいます (他の要素をひとつずつずらす必要があるからです)。

キューの実装には、`collections.deque` を使うと良いでしょう。このクラスは良く設計されていて、高速な追加 (append) と取り出し (pop) を両端に対して実現しています。例えば以下のようにします。

```
>>> from collections import deque
>>> queue = deque(["Eric", "John", "Michael"])
>>> queue.append("Terry")           # Terry arrives
>>> queue.append("Graham")         # Graham arrives
>>> queue.popleft()                # The first to arrive now leaves
'Eric'
>>> queue.popleft()                # The second to arrive now leaves
'John'
>>> queue                           # Remaining queue in order of arrival
deque(['Michael', 'Terry', 'Graham'])
```

5.1.3 関数型のプログラミングツール

組み込み関数には、リストに対して使うと非常に便利なものが三つあります。`filter()`, `map()`, `reduce()` です。

`filter(function, sequence)` は、シーケンス *sequence* 中の要素 *item* から、`function(item)` が真となるような要素からなるシーケンスを返します。もし *sequence* が `string` か `tuple` なら、返り値も同じ型になります。そうでなければ `list` になります。例えば、いくつかの素数を計算するには以下のようになります。

```
>>> def f(x): return x % 2 != 0 and x % 3 != 0
...
>>> filter(f, range(2, 25))
[5, 7, 11, 13, 17, 19, 23]
```

`map(function, sequence)` は、シーケンス *sequence* の各要素 *item* に対して `function(item)` を呼び出し、その戻り値からなるリストを返します。例えば、三乗された値の列を計算するには以下のようになります。

```
>>> def cube(x): return x*x*x
...
>>> map(cube, range(1, 11))
[1, 8, 27, 64, 125, 216, 343, 512, 729, 1000]
```

複数のシーケンスを渡すこともできます。その場合、第一引数の関数はシーケンスの数と等しい数の引数を受け取る必要があり、各シーケンスの値が渡されます。(幾つかのシーケンスが他のシーケンスよりも短かった場合は、その場所には `None` が渡されます。) 例です。

```
>>> seq = range(8)
>>> def add(x, y): return x+y
...
>>> map(add, seq, seq)
[0, 2, 4, 6, 8, 10, 12, 14]
```

`reduce(function, sequence)` は単一の値を返します。この値は 2 つの引数をとる関数 *function* をシーケンス *sequence* の最初の二つの要素を引数として呼び出し、次にその結果とシーケンスの次の要素を引数にとり、以降これを繰り返していきます。例えば、1 から 10 までの数の総和を計算するには以下のようになります。

```
>>> def add(x,y): return x+y
...
>>> reduce(add, range(1, 11))
55
```

シーケンス中にただ一つしか要素がなければ、その値自体が返されます。シーケンスが空なら、例外が送出されます。

3 つめの引数をわたして、初期値を指定することもできます。この場合、空のシーケンスを渡すと初期値が返されます。それ以外の場合には、まず初期値とシーケンス中の最初の要素に対して関数が適用され、次いでその結果とシーケンスの次の要素に対して適用され、以降これが繰り返されます。例えば以下のようになります。

```
>>> def sum(seq):
...     def add(x,y): return x+y
...     return reduce(add, seq, 0)
...
>>> sum(range(1, 11))
55
>>> sum([])
0
```

実際には、上の例のように `sum()` を定義しないでください。数値の合計は広く必要とされている操作なので、すでに組み込み関数 `sum(sequence)` が提供されており、上の例と全く同様に動作します。バージョン 2.3 で追加。

5.1.4 リストの内包表記

リストの内包表記 (list comprehension) は、`map()` や `filter()` や `lambda` を使わずにリストを生成するための簡潔な方法を提供しています。内包表記によるリストの定義は、たいてい `map()`, `filter()`, `lambda` を使ってリストを生成するコードよりも明快になります。リストの内包表記は、式、続いて `for` 節、そしてその後ろに続くゼロ個以上の `for` 節または `if` 節からなります。結果として得られるリストの要素は、式を、それに続く `for` と `if` 節のコンテキストで評価した値になります。式をタプルとして評価したいなら、丸括弧で囲わなければなりません。

```
>>> freshfruit = [' banana', ' loganberry ', 'passion fruit ']
>>> [weapon.strip() for weapon in freshfruit]
['banana', 'loganberry', 'passion fruit']
>>> vec = [2, 4, 6]
>>> [3*x for x in vec]
[6, 12, 18]
>>> [3*x for x in vec if x > 3]
[12, 18]
>>> [3*x for x in vec if x < 2]
[]
>>> [[x,x**2] for x in vec]
[[2, 4], [4, 16], [6, 36]]
>>> [x, x**2 for x in vec] # エラー - タプルには丸括弧が必要
File "<stdin>", line 1, in ?
[x, x**2 for x in vec]
```

```

^
SyntaxError: invalid syntax
>>> [(x, x**2) for x in vec]
[(2, 4), (4, 16), (6, 36)]
>>> vec1 = [2, 4, 6]
>>> vec2 = [4, 3, -9]
>>> [x*y for x in vec1 for y in vec2]
[8, 6, -18, 16, 12, -36, 24, 18, -54]
>>> # 訳注: 上記の内包表記をループで書きなおすと、こうなります。
>>> L = []
>>> for x in vec1:
...     for y in vec2:
...         L.append(x*y)
...
>>> L
[8, 6, -18, 16, 12, -36, 24, 18, -54]
>>> [x+y for x in vec1 for y in vec2]
[6, 5, -7, 8, 7, -5, 10, 9, -3]
>>> [vec1[i]*vec2[i] for i in range(len(vec1))]
[8, 12, -54]

```

ノート: 訳注: 内包表記の中に `for` や `if` が複数回現れる場合、左側の `for, if` が、内包表記ではなくループで書いた場合の外側のブロックになります。上の例はまだ判りやすいですが、複雑な内包表記はすぐに読みにくくなってしまいますので、その場合はループで書き下した方が良いでしょう。

リストの内包表記は `map()` よりもはるかに柔軟性があり、複雑な式や入れ子になった関数でも利用できます。

```

>>> [str(round(355/113.0, i)) for i in range(1, 6)]
['3.1', '3.14', '3.142', '3.1416', '3.14159']

```

5.1.5 ネストしたリストの内包表記

もし望むなら、リストの内包表記はネストさせることができます。ネストしたリストの内包表記はとても強力な道具なのですが、全ての強力な道具がそうであるように – とにかく気を付けて使う必要があります。

1 行を 1 つのリストに対応させた 3 つのリストからなるリストで、3 行 3 列の行列を表現した例を考えます。

```

>>> mat = [
...     [1, 2, 3],
...     [4, 5, 6],
...     [7, 8, 9],
... ]

```

ここで、行と列を入れ換えたいとしたときにリストの内包表記が使えます。

```

>>> print [[row[i] for row in mat] for i in [0, 1, 2]]
[[1, 4, 7], [2, 5, 8], [3, 6, 9]]

```

ネストした リストの内包表記は特に気を付けて使わなければなりません。

リストの内包表記を怖がらずにネストするためには、右から左へ読んでください。

このコードの断片のより冗長なバージョンを見ると処理の流れがはっきりします。

```
for i in [0, 1, 2]:
    for row in mat:
        print row[i],
    print
```

実際には複雑な流れの式よりも組み込み関数を使う方が良いです。この場合 `zip()` 関数が良い仕事をしてくれるでしょう。

```
>>> zip(*mat)
[(1, 4, 7), (2, 5, 8), (3, 6, 9)]
```

この行にあるアスタリスクの詳細については [引数リストのアンパック](#) を参照してください。

5.2 del 文

リストから要素を削除する際、値を指定する代わりにインデックスを指定する方法があります。それが `del` 文です。これは `pop()` メソッドと違い、値を返しません。`del` 文はリストからスライスを除去したり、リスト全体を削除することもできます (以前はスライスに空のリストを代入して行っていました)。例えば以下のようにします。

```
>>> a
[-1, 1, 66.25, 333, 333, 1234.5]
>>> del a[0]
>>> a
[1, 66.25, 333, 333, 1234.5]
>>> del a[2:4]
>>> a
[1, 66.25, 1234.5]
>>> del a[:]
>>> a
[]
```

`del` は変数全体の削除にも使えます。

```
>>> del a
```

この文の後で名前 `a` を参照すると、(別の値を `a` に代入するまで) エラーになります。`del` の別の用途についてはまた後で取り上げます。

5.3 タプルとシーケンス

リストや文字列には、インデックスやスライスを使った演算のように、数多くの共通の性質があることを見てきました。これらはシーケンス (*sequence*) データ型 (*typeseq* を参照) の二つの例です。Python はまだ進歩の過程にある言語なので、他のシーケンスデータ型が追加されるかもしれません。標準のシーケンス型はもう一つあります: タプル (*tuple*) 型です。

タプルはコンマで区切られたいくつかの値からなります。例えば以下のように書きます。

```
>>> t = 12345, 54321, 'hello!'
>>> t[0]
12345
>>> t
```

```
(12345, 54321, 'hello!')
>>> # タプルを入れ子にしてもよい
... u = t, (1, 2, 3, 4, 5)
>>> u
((12345, 54321, 'hello!'), (1, 2, 3, 4, 5))
```

ご覧のように、出力ではタプルは常に丸括弧で囲われています。これは、入れ子になったタプルが正しく解釈されるようにするためです。入力の際には丸括弧なしでもかまいませんが、結局 (タプルがより大きな式の一部分の場合) 大抵必要となります。

タプルの用途はたくさんあります。例えば、(x, y) 座標対、データベースから取り出した従業員レコードなどです。タプルは文字列と同じく、変更不能です。タプルの個々の要素に代入を行うことはできません (スライスと連結を使って同じ効果を実現することはできますが)。リストのような変更可能なオブジェクトの入ったタプルを作成することも可能です。

問題は 0 個または 1 個の項目からなるタプルの構築です。これらの操作を行うため、構文には特別な細工がされています。空のタプルは空の丸括弧ペアで構築できます。一つの要素を持つタプルは、値の後ろにコンマを続ける (単一の値を丸括弧で囲むだけでは不十分です) ことで構築できます。美しくはないけれども、効果的です。例えば以下のようにします。

```
>>> empty = ()
>>> singleton = 'hello',      # <-- 末尾のコンマに注目
>>> len(empty)
0
>>> len(singleton)
1
>>> singleton
('hello',)
```

文 `t = 12345, 54321, 'hello!'` はタプルのパック (*tuple packing*) の例です。値 `12345`, `54321`, `'hello!'` が一つのタプルにパックされます。逆の演算も可能です。

```
>>> x, y, z = t
```

この操作は、シーケンスのアンパック (*sequence unpacking*) とでも呼ぶべきもので、右辺には全てのシーケンス型を使うことができます。シーケンスのアンパックでは、左辺に列挙されている変数が、右辺のシーケンスの長さと同じであることが要求されます。複数同時の代入が実はタプルのパックとシーケンスのアンパックを組み合わせたものに過ぎないことに注意してください。

5.4 集合型

Python には、集合 (*set*) を扱うためのデータ型もあります。集合とは、重複する要素をもたない、順序づけられていない要素の集まりです。Set オブジェクトは、結合 (*union*)、交差 (*intersection*)、差分 (*difference*)、対称差 (*symmetric difference*) といった数学的な演算もサポートしています。

簡単なデモンストレーションを示します。

```
>>> basket = ['apple', 'orange', 'apple', 'pear', 'orange', 'banana']
>>> fruit = set(basket)          # 重複のない集合を作成
>>> fruit
set(['orange', 'pear', 'apple', 'banana'])
>>> 'orange' in fruit            # 高速なメンバシップテスト
True
```

```
>>> 'crabgrass' in fruit
False

>>> # 二つの単語の文字を例にした集合間の演算
...
>>> a = set('abracadabra')
>>> b = set('alacazam')
>>> a                                     # a 内の一意な文字
set(['a', 'r', 'b', 'c', 'd'])
>>> a - b                                 # a にあって b にない文字
set(['r', 'd', 'b'])
>>> a | b                                 # a か b にある文字
set(['a', 'c', 'r', 'd', 'b', 'm', 'z', 'l'])
>>> a & b                                 # a と b の双方にある文字
set(['a', 'c'])
>>> a ^ b                                 # a または b の片方だけにある文字
set(['r', 'd', 'b', 'm', 'z', 'l'])
```

5.5 辞書

もう一つ、有用な型が Python に組み込まれています。それは 辞書 (*dictionary*) (*typesmapping* を参照) です。辞書は他の言語にも“連想記憶 (associated memory)”や“連想配列 (associative array)”という名前で存在することがあります。ある範囲の数でインデクス化されているシーケンスと異なり、辞書は キー (*key*) でインデクス化されています。このキーは何らかの変更不能な型になります。文字列、数値は常にキーにすることができます。タプルは、文字列、数値、その他のタプルのみを含む場合はキーにすることができます。直接、あるいは間接的に変更可能なオブジェクトを含むタプルはキーにできません。リストをキーとして使うことはできません。これは、リストにスライスやインデクス指定の代入を行ったり、`append()` や `extend()` のようなメソッドを使うと、インプレースで変更することができるためです。

辞書は順序付けのされていない キー (*key*): 値 (*value*) のペアの集合であり、キーが (辞書の中で) 一意でなければならない、と考えるとよいでしょう。波括弧 (brace) のペア: `{ }` は空の辞書を生成します。カンマで区切られた `key: value` のペアを波括弧ペアの間に入れると、辞書の初期値となる `key: value` が追加されます; この表現方法は出力時に辞書が書き出されるのと同じ方法です。

辞書での主な操作は、ある値を何らかのキーを付けて記憶することと、キーを指定して値を取り出すことです。`del` で `key: value` のペアを削除することもできます。すでに使われているキーを使って値を記憶すると、以前そのキーに関連づけられていた値は忘れ去られてしまいます。存在しないキーを使って値を取り出そうとするとエラーになります。

辞書オブジェクトの `keys()` メソッドは、辞書で使われている全てのキーからなるリストを適当な順番で返します (ソートされたリストが欲しい場合は、このキーのリストに `sort()` を使ってください)。ある単一のキーが辞書にあるかどうか調べるには、`in` キーワードを使います。

以下に、辞書を使った簡単な例を示します。

```
>>> tel = {'jack': 4098, 'sape': 4139}
>>> tel['guido'] = 4127
>>> tel
{'sape': 4139, 'guido': 4127, 'jack': 4098}
>>> tel['jack']
4098
>>> del tel['sape']
>>> tel['irv'] = 4127
>>> tel
```

```
{'guido': 4127, 'irv': 4127, 'jack': 4098}
>>> tel.keys()
['guido', 'irv', 'jack']
>>> 'guido' in tel
True
```

`dict()` コンストラクタは、キーと値のペアのタプルを含むリストから辞書を生成します。キーと値のペアがあるパターンをなしているなら、リストの内包表現を使えばキーと値のリストをコンパクトに指定できます。

```
>>> dict([('sape', 4139), ('guido', 4127), ('jack', 4098)])
{'sape': 4139, 'jack': 4098, 'guido': 4127}
>>> dict([(x, x**2) for x in (2, 4, 6)])      # リスト内包表現を利用
{2: 4, 4: 16, 6: 36}
```

後ほど、key, value ペアを `dict()` コンストラクタに渡すのにより適した、ジェネレータ式について学習します。

キーが単純な文字列の場合、キーワード引数を使って定義する方が単純な場合もあります。

```
>>> dict(sape=4139, guido=4127, jack=4098)
{'sape': 4139, 'jack': 4098, 'guido': 4127}
```

5.6 ループのテクニック

辞書に対してループを行う際、`iteritems()` メソッドを使うと、キーとそれに対応する値を同時に取り出せます。

```
>>> knights = {'gallahad': 'the pure', 'robin': 'the brave'}
>>> for k, v in knights.iteritems():
...     print k, v
...
gallahad the pure
robin the brave
```

シーケンスにわたるループを行う際、`enumerate()` 関数を使うと、要素のインデックスと要素を同時に取り出すことができます。

```
>>> for i, v in enumerate(['tic', 'tac', 'toe']):
...     print i, v
...
0 tic
1 tac
2 toe
```

二つまたはそれ以上のシーケンス型を同時にループするために、関数 `zip()` を使って各要素をひと組みにすることができます。

```
>>> questions = ['name', 'quest', 'favorite color']
>>> answers = ['lancelot', 'the holy grail', 'blue']
>>> for q, a in zip(questions, answers):
...     print 'What is your {0}? It is {1}'.format(q, a)
...
What is your name? It is lancelot.
What is your quest? It is the holy grail.
What is your favorite color? It is blue.
```

シーケンスを逆方向に渡ってループするには、まずシーケンスの範囲を順方向に指定し、次いで関数 `reversed()` を呼び出します。

```
>>> for i in reversed(xrange(1,10,2)):
...     print i
...
9
7
5
3
1
```

シーケンスをソートされた順序でループするには、`sorted()` 関数を使います。この関数は元の配列を変更せず、ソート済みの新たな配列を返します。

```
>>> basket = ['apple', 'orange', 'apple', 'pear', 'orange', 'banana']
>>> for f in sorted(set(basket)):
...     print f
...
apple
banana
orange
pear
```

5.7 条件についてもう少し

`while` や `if` 文で使った条件 (condition) には、値の比較だけでなく、他の演算子も使うことができます、

比較演算子 `in` および `not in` は、ある値があるシーケンス中に存在するか (または存在しないか) どうかを調べます。演算子 `is` および `is not` は、二つのオブジェクトが実際に同じオブジェクトであるかどうかを調べます。この比較は、リストのような変更可能なオブジェクトにだけ意味があります。全ての比較演算子は同じ優先順位を持っており、ともに数値演算子よりも低い優先順位となります。

ノート: 訳注: `is` は、`is None` のように、シングルトンの変更不能オブジェクトとの比較に用いる場合もあります。(「変更可能なオブジェクトにだけ意味があります」の部分削除することを Doc-SIG に提案中。)

比較は連結させることができます。例えば、`a < b == c` は、`a` が `b` より小さく、かつ `b` と `c` が等しいかどうかをテストします。

ブール演算子 `and` や `or` で比較演算を組み合わせることができます。そして、比較演算 (あるいは何らかのブール式) の結果の否定は `not` でとれます。これらの演算子は全て、比較演算子よりも低い優先順位になっています。`A and not B or C` と `(A and (not B)) or C` が等価になるように、ブール演算子の中で、`not` の優先順位が最も高く、`or` が最も低くなっています。もちろん、丸括弧を使えば望みの組み合わせを表現できます。

ブール演算子 `and` と `or` は、いわゆる 短絡 (*short-circuit*) 演算子です。これらの演算子の引数は左から右へと順に評価され、結果が確定した時点で評価を止めます。例えば、`A` と `C` は真で `B` が偽のとき、`A and B and C` は式 `C` を評価しません。一般に、短絡演算子の戻り値をブール値ではなくて一般的な値として用いると、値は最後に評価された引数になります。

比較や他のブール式の結果を変数に代入することもできます。例えば、

```
>>> string1, string2, string3 = '', 'Trondheim', 'Hammer Dance'
>>> non_null = string1 or string2 or string3
>>> non_null
'Trondheim'
```

Python では、C 言語と違って、式の内部で代入を行えないので注意してください。C 言語のプログラマは不満に思うかもしれませんが、この仕様は、C 言語プログラムで遭遇する、式の中で == のつもりで = とタイプしてしまうといったありふれた問題を回避します。

5.8 シーケンスとその他の型の比較

シーケンスオブジェクトは同じシーケンス型の他のオブジェクトと比較できます。比較には辞書的な (*lexicographical*) 順序が用いられます。まず、最初の二つの要素を比較し、その値が等しくなければその時点で比較結果が決まります。等しければ次の二つの要素を比較し、以降シーケンスの要素が尽きるまで続けます。比較しようとする二つの要素がいずれも同じシーケンス型であれば、そのシーケンス間での辞書比較を再帰的に行います。二つのシーケンスの全ての要素の比較結果が等しくなれば、シーケンスは等しいとみなされます。片方のシーケンスがもう一方の先頭部分にあたる部分シーケンスならば、短い方のシーケンスが小さいシーケンスとみなされます。文字列に対する辞書的な順序づけには、個々の文字ごとに ASCII 順序を用います。以下に、同じ型のオブジェクトを持つシーケンス間での比較を行った例を示します。

```
(1, 2, 3) < (1, 2, 4)
[1, 2, 3] < [1, 2, 4]
'ABC' < 'C' < 'Pascal' < 'Python'
(1, 2, 3, 4) < (1, 2, 4)
(1, 2) < (1, 2, -1)
(1, 2, 3) == (1.0, 2.0, 3.0)
(1, 2, ('aa', 'ab')) < (1, 2, ('abc', 'a'), 4)
```

違う型のオブジェクト間の比較は認められていることに注意してください。比較結果は決定性がありますが、その決め方は、型は型の名前で順番づけられる、という恣意的なものです。従って、リスト (list) 型は常に文字列 (string) 型よりも小さく、文字列型は常にタプル (tuple) よりも小さい、といった具合になります。¹ 型混合の数値の比較は、数値そのものに従って比較されるので、例えば 0 は 0.0 と等しい、という結果になります。

¹ 異なる型のオブジェクトを比較するための規則を今後にわたって当てにしてはなりません。Python 言語の将来のバージョンでは変更されるかもしれません。

モジュール

Python インタプリタを終了させ、再び起動すると、これまでに行ってきた定義 (関数や変数) は失われています。ですから、より長いプログラムを書きたいなら、テキストエディタを使ってインタプリタへの入力を用意しておき、手作業の代わりにファイルを入力に使うことで動作させるとよいでしょう。この作業をスクリプト (*script*) の作成と言います。プログラムが長くなるにつれ、メンテナンスを楽にするために、スクリプトをいくつかのファイルに分割したくなるかもしれません。また、いくつかのプログラムで書いてきた便利な関数について、その定義をコピーすることなく個々のプログラムで使いたいと思うかもしれません。

こういった要求をサポートするために、Python では定義をファイルに書いておき、スクリプトの中やインタプリタの対話インスタンス上で使う方法があります。このファイルを **モジュール** (*module*) と呼びます。モジュールにある定義は、他のモジュールや *main* モジュール (実行のトップレベルや電卓モードでアクセスできる変数の集まりを指します) に *import* (取り込み) することができます。

モジュールは Python の定義や文が入ったファイルです。ファイル名はモジュール名に接尾語 `.py` がついたものになります。モジュールの中では、(文字列の) モジュール名をグローバル変数 `__name__` で取得できます。例えば、お気に入りのテキストエディタを使って、現在のディレクトリに以下の内容のファイル `fibonacci.py` を作成してみましょう。

フィボナッチ数列モジュール

```
def fib(n):      # n までのフィボナッチ級数を出力
    a, b = 0, 1
    while b < n:
        print b,
        a, b = b, a+b

def fib2(n):     # n までのフィボナッチ級数を返す
    result = []
    a, b = 0, 1
    while b < n:
        result.append(b)
        a, b = b, a+b
    return result
```

次に Python インタプリタに入り、モジュールを以下のコマンドで *import* しましょう。

```
>>> import fibo
```

この操作では、`fibo` で定義された関数の名前を直接現在のシンボルテーブルに入力することはありません。

ん。単にモジュール名 `fibonacci` だけをシンボルテーブルに入れます。関数にはモジュール名を使ってアクセスします。

```
>>> fibonacci.fib(1000)
1 1 2 3 5 8 13 21 34 55 89 144 233 377 610 987
>>> fibonacci.fib2(100)
[1, 1, 2, 3, 5, 8, 13, 21, 34, 55, 89]
>>> fibonacci.__name__
'fibonacci'
```

関数を度々使うのなら、ローカルな名前に代入できます。

```
>>> fib = fibonacci.fib
>>> fib(500)
1 1 2 3 5 8 13 21 34 55 89 144 233 377
```

6.1 モジュールについてもうすこし

モジュールには、関数定義に加えて実行文を入れることができます。これらの実行文はモジュールを初期化するためのものです。これらの実行文は、モジュールがどこかで最初に `import` された時にだけ実行されます。¹

各々のモジュールは、自分のプライベートなシンボルテーブルを持っていて、モジュールで定義されている関数はこのテーブルをグローバルなシンボルテーブルとして使います。したがって、モジュールの作者は、ユーザのグローバル変数と偶然的な衝突が起こる心配をせずに、グローバルな変数をモジュールで使うことができます。一方、自分が行っている操作をきちんと理解していれば、モジュール内の関数を参照するのと同じ表記法 `modname.itemname` で、モジュールのグローバル変数をいじることもできます。

モジュールが他のモジュールを `import` することもできます。`import` 文は全てモジュールの (さらに言えばスクリプトでも) 先頭に置きますが、これは慣習であって必須ではありません。`import` されたモジュール名は `import` を行っているモジュールのグローバルなシンボルテーブルに置かれます。

`import` 文には、あるモジュール内の名前を、`import` を実行しているモジュールのシンボルテーブル内に直接取り込むという変型があります。例えば、

```
>>> from fibonacci import fib, fib2
>>> fib(500)
1 1 2 3 5 8 13 21 34 55 89 144 233 377
```

この操作は、`import` の対象となるモジュール名をローカルなシンボルテーブル内に取り入れることはありません (従って上の例では、`fibonacci` は定義されません)。

モジュールで定義されている名前を全て `import` するという変型もあります。

```
>>> from fibonacci import *
>>> fib(500)
1 1 2 3 5 8 13 21 34 55 89 144 233 377
```

上の操作は、アンダースコア (`_`) で開始する名前以外の全ての名前を `import` します。

¹ 実際には、関数定義も '実行' される '文' です。モジュールレベルの関数定義を実行すると、関数名はモジュールのグローバルなシンボルテーブルに入ります。

一般的には、モジュールやパッケージから `*` を `import` するというやり方には賛同できません。というのは、この操作を行うとしばしば可読性に乏しいコードになるからです。しかし、対話セッションでキータイプの量を減らすために使うのは構わないでしょう。

ノート: 実行効率上の理由で、各モジュールはインタプリタの 1 セッションごとに 1 回だけ `import` されます。従って、モジュールを修正した場合には、インタプリタを再起動させなければなりません – もしくは、その場で手直ししてテストしたいモジュールが 1 つだった場合には、例えば `reload(modulename)` のように `reload()` を使ってください。

6.2 モジュールをスクリプトとして実行する

Python モジュールを

```
python fibo.py <arguments>
```

と実行すると、`__name__` に `__main__` が設定されている点を除いて `import` したときと同じようにモジュール内のコードが実行されます。つまりモジュールの末尾に、

```
if __name__ == "__main__":
    import sys
    fib(int(sys.argv[1]))
```

このコードを追加することで、このファイルが `import` できるモジュールであると同時にスクリプトとしても使えるようになります。なぜならモジュールが “main” ファイルとして起動されたときだけ、コマンドラインを解釈するコードが実行されるからです。

```
$ python fibo.py 50
1 1 2 3 5 8 13 21 34
```

モジュールが `import` された場合は、そのコードは実行されません。

```
>>> import fibo
>>>
```

この方法はモジュールに便利なユーザインターフェースを提供したり、テストのために (スクリプトをモジュールとして起動しテストスイートを実行して) 使われます。

6.2.1 モジュール検索パス

`spam` という名前のモジュールが `import` されると、インタプリタは `spam.py` という名前のファイルを現在のディレクトリ内で探し、次に環境変数 `PYTHONPATH` に指定されているディレクトリのリストから探します。`PYTHONPATH` はシェル変数 `PATH` と同じ構文、すなわちディレクトリ名を並べたものです。`PYTHONPATH` が設定されていないか、探しているファイルが見つからなかった場合は、検索対象をインストール方法に依存するデフォルトのパスにして続けます。Unix では、このパスは通常 `./usr/local/lib/python` です。

実際には、モジュールは変数 `sys.path` で指定されたディレクトリのリストから検索されます。`sys.path` は、入力とするスクリプトの入ったディレクトリ (現在のディレクトリ)、`PYTHONPATH`、およびインス

ツール方法依存のデフォルト値を使って初期化されます。Python プログラマは、自分の行っている操作を理解しているなら、この変数を使ってモジュール検索パスを修正したり置き換えたりすることができます。起動しようとするスクリプトの入ったディレクトリが検索パス上にあるため、スクリプトが標準モジュールと同じ名前をもたないようにすることが重要です。さもなければ、Python が標準モジュールを import するときにスクリプトをモジュールとして import しようとしてしまうので注意してください。このような誤りを犯すと、通常はエラーになります。詳しくは [標準モジュール](#) を参照してください。

6.2.2 “コンパイル” された Python ファイル

たくさんの標準モジュールを使うような短いプログラムの起動時間を大きく高速化するために、`spam.py` が見つかったディレクトリに `spam.pyc` という名前のファイルがあった場合には、このファイルをモジュール `spam` の“バイトコンパイルされた”バージョンであると仮定します。`spam.pyc` を生成するのに使われたバージョンの `spam.py` のファイル修正時刻が `spam.pyc` に記録されており、この値が一致しなければ `spam.pyc` ファイルは無視されます。

通常、`spam.pyc` ファイルを生成するために何かをする必要はありません。`spam.py` が無事コンパイルされると、常にコンパイルされたバージョンを `spam.pyc` へ書き出すよう試みます。この試みが失敗してもエラーにはなりません。何らかの理由でファイルが完全に書き出されなかった場合、作成された `spam.pyc` は無効であるとみなされ、それ以後無視されます。`spam.pyc` ファイルの内容はプラットフォームに依存しないので、Python のモジュールのディレクトリは異なるアーキテクチャのマシン間で共有することができます。

エキスパート向けの Tips:

- Python インタプリタを `-O` フラグ付きで起動すると、最適化されたコードが生成されて `.pyo` ファイルに保存されます。最適化機構は今のところあまり役に立っていません。最適化機構は `assert` 文と `SET_LINENO` 命令を除去しているだけです。`-O` を使うと、すべてのバイトコード (*bytecode*) が最適化されます。`.pyc` ファイルは無視され、`.py` ファイルは最適化されたバイトコードにコンパイルされます。
- 二つの `-O` フラグ (`-OO`) を Python インタプリタへ渡すと、バイトコードコンパイラは、まれにプログラムが正しく動作しなくなるかもしれないような最適化を実行します。現状では、ただ `__doc__` 文字列をバイトコードから除去して、よりコンパクトな `.pyo` ファイルにするだけです。この文字列が利用できることをあてにしているプログラムがあるかもしれないので、自分の行っている操作が何かわかっているときにだけこのオプションを使うべきです。
- `.pyc` ファイルや `.pyo` ファイルから読み出されたとしても、プログラムは何ら高速に動作するわけではありません。`.pyc` ファイルや `.pyo` ファイルで高速化されるのは、読み込まれるときの速度だけです。
- スクリプトの名前をコマンドラインで指定して実行した場合、そのスクリプトのバイトコードが `.pyc` や `.pyo` に書き出されることはありません。従って、スクリプトのほとんどのコードをモジュールに移し、そのモジュールを import する小さなブートストラップスクリプトを作れば、スクリプトの起動時間を短縮できることがあります。`.pyc` または `.pyo` ファイルの名前を直接コマンドラインに指定することもできます。
- 一つのモジュールについて、ファイル `spam.py` のない `spam.pyc` (`-O` を使ったときは `spam.pyo`) があってもかまいません。この仕様は、Python コードでできたライブラリをリバースエンジニアリングがやや困難な形式で配布するために使えます。

- `compileall` は、`.pyc` ファイル (または `-O` を使ったときは `.pyo` ファイル) をディレクトリ内の全てのモジュールに対して生成することができます。

6.3 標準モジュール

Python には標準モジュールのライブラリが付属しています。ライブラリは独立したドキュメント Python ライブラリリファレンス (以降 “ライブラリリファレンス”) で記述されています。モジュールによってはインタプリタに組み込まれたものがあります。インタプリタに組み込まれているモジュールが提供しているのは、言語の中核の部分ではありませんが、効率化のためや、システムコールのようなオペレーティングシステムの根本機能へのアクセス手段を提供するための操作です。これらのモジュールのセットは設定時に選択可能で、またプラットフォームにも依存します。例えば、`winreg` モジュールは、Windows でのみ提供されます。とりわけ、注目に値するモジュールが一つあります。`sys` はどの Python インタプリタにも組み込まれています。変数 `sys.ps1` と `sys.ps2` は、それぞれ一次プロンプトと二次プロンプトとして使われる文字列を定義しています。

```
>>> import sys
>>> sys.ps1
'>>> '
>>> sys.ps2
'... '
>>> sys.ps1 = 'C> '
C> print 'Yuck!'
Yuck!
C>
```

これらの二つの変数は、インタプリタが対話モードにあるときだけ定義されています。

変数 `sys.path` は文字列からなるリストで、インタプリタがモジュールを検索するときのパスを決定します。`sys.path` は環境変数 `PYTHONPATH` から得たデフォルトパスに、`PYTHONPATH` が設定されていないければ組み込みのデフォルト値に設定されます。標準的なリスト操作で変更することができます。

```
>>> import sys
>>> sys.path.append('/ufs/guido/lib/python')
```

6.4 `dir()` 関数

組込み関数 `dir()` は、あるモジュールがどんな名前を定義しているか調べるために使われます。`dir()` はソートされた文字列のリストを返します。

```
>>> import fibo, sys
>>> dir(fibo)
['__name__', 'fib', 'fib2']
>>> dir(sys)
['__displayhook__', '__doc__', '__excepthook__', '__name__', '__stderr__',
 '__stdin__', '__stdout__', '__getframe__', 'api_version', 'argv',
 'builtin_module_names', 'byteorder', 'callstats', 'copyright',
 'displayhook', 'exc_clear', 'exc_info', 'exc_type', 'excepthook',
 'exec_prefix', 'executable', 'exit', 'getdefaultencoding', 'getdlopenflags',
 'getrecursionlimit', 'getrefcount', 'hexversion', 'maxint', 'maxunicode',
 'meta_path', 'modules', 'path', 'path_hooks', 'path_importer_cache',
 'platform', 'prefix', 'ps1', 'ps2', 'setcheckinterval', 'setdlopenflags',
```

```
'setprofile', 'setrecursionlimit', 'settrace', 'stderr', 'stdin', 'stdout',
'version', 'version_info', 'warnoptions']
```

引数がなければ、`dir()` は現在定義している名前を列挙します。

```
>>> a = [1, 2, 3, 4, 5]
>>> import fibo
>>> fib = fibo.fib
>>> dir()
['__builtins__', '__doc__', '__file__', '__name__', 'a', 'fib', 'fibo', 'sys']
```

変数、モジュール、関数、その他の、すべての種類の名前をリストすることに注意してください。

`dir()` は、組み込みの関数や変数の名前はリストしません。これらの名前からなるリストが必要なら、標準モジュール `__builtin__` で定義されています。

```
>>> import __builtin__
>>> dir(__builtin__)
['ArithmeticError', 'AssertionError', 'AttributeError', 'DeprecationWarning',
'EOFError', 'Ellipsis', 'EnvironmentError', 'Exception', 'False',
'FloatingPointError', 'FutureWarning', 'IOError', 'ImportError',
'IndentationError', 'IndexError', 'KeyError', 'KeyboardInterrupt',
'LookupError', 'MemoryError', 'NameError', 'None', 'NotImplemented',
'NotImplementedError', 'OSError', 'OverflowError',
'PendingDeprecationWarning', 'ReferenceError', 'RuntimeError',
'RuntimeWarning', 'StandardError', 'StopIteration', 'SyntaxError',
'SyntaxWarning', 'SystemError', 'SystemExit', 'TabError', 'True',
'TypeError', 'UnboundLocalError', 'UnicodeDecodeError',
'UnicodeEncodeError', 'UnicodeError', 'UnicodeTranslateError',
'UserWarning', 'ValueError', 'Warning', 'WindowsError',
'ZeroDivisionError', '_', '__debug__', '__doc__', '__import__',
'__name__', 'abs', 'apply', 'basestring', 'bool', 'buffer',
'callable', 'chr', 'classmethod', 'cmp', 'coerce', 'compile',
'complex', 'copyright', 'credits', 'delattr', 'dict', 'dir', 'divmod',
'enumerate', 'eval', 'execfile', 'exit', 'file', 'filter', 'float',
'frozenset', 'getattr', 'globals', 'hasattr', 'hash', 'help', 'hex',
'id', 'input', 'int', 'intern', 'isinstance', 'issubclass', 'iter',
'len', 'license', 'list', 'locals', 'long', 'map', 'max', 'min',
'object', 'oct', 'open', 'ord', 'pow', 'property', 'quit', 'range',
'raw_input', 'reduce', 'reload', 'repr', 'reversed', 'round', 'set',
'setattr', 'slice', 'sorted', 'staticmethod', 'str', 'sum', 'super',
'tuple', 'type', 'unichr', 'unicode', 'vars', 'xrange', 'zip']
```

6.5 パッケージ

パッケージ (package) は、Python のモジュール名前空間を“ドット付きモジュール名”を使って構造化する手段です。例えば、モジュール名 `A.B` は、`A` というパッケージのサブモジュール `B` を表します。ちょうど、モジュールを利用すると、別々のモジュールの著者が互いのグローバル変数名について心配しなくても済むようになるのと同じように、ドット付きモジュール名を利用すると、NumPy や Python Imaging Library のように複数モジュールからなるパッケージの著者が、互いのモジュール名について心配しなくても済むようになります。

音声ファイルや音声データを一様に扱うためのモジュールのコレクション (“パッケージ”) を設計したいと仮定しましょう。音声ファイルには多くの異なった形式がある (通常は拡張子、例えば `.wav`, `.aiff`, `.au` などで認識されます) ので、様々なファイル形式間で変換を行うためのモジュールからなる、次第に増え

ていくモジュールのコレクションを作成したりメンテナンスしたりする必要があるかもしれません。また、音声データに対して実行したい様々な独自の操作 (ミキシング、エコーの追加、イコライザ関数の適用、人工的なステレオ効果の作成など) があるかもしれません。そうすると、こうした操作を実行するモジュールを果てしなく書くことになるでしょう。以下に (階層的なファイルシステムで表現した) パッケージの構造案を示します。

```

sound/                                トップレベルのパッケージ
  __init__.py                        サウンドパッケージを初期化する
  formats/                          ファイルフォーマット変換用の下位パッケージ
    __init__.py
    wavread.py
    wavwrite.py
    aiffread.py
    aiffwrite.py
    auread.py
    auwrite.py
    ...
  effects/                          サウンド効果用の下位パッケージ
    __init__.py
    echo.py
    surround.py
    reverse.py
    ...
  filters/                          フィルタ用の下位パッケージ
    __init__.py
    equalizer.py
    vocoder.py
    karaoke.py
    ...

```

パッケージを `import` する際、Python は `sys.path` 上のディレクトリを検索して、トップレベルのパッケージの入ったサブディレクトリを探します。

あるディレクトリを、パッケージが入ったディレクトリとして Python に扱わせるには、ファイル `__init__.py` が必要です。このファイルを置かなければならないのは、`string` のようなよくある名前のディレクトリにより、モジュール検索パスの後の方で見つかる正しいモジュールが意図せず隠蔽されてしまうのを防ぐためです。最も簡単なケースでは `__init__.py` はただの空ファイルで構いませんが、`__init__.py` ではパッケージのための初期化コードを実行したり、後述の `__all__` 変数を設定してもかまいません。

パッケージのユーザは、個々のモジュールをパッケージから `import` することができます。例えば、

```
import sound.effects.echo
```

この操作はサブモジュール `sound.effects.echo` をロードします。このモジュールは、以下のように完全な名前でも参照しなければなりません。

```
sound.effects.echo.echofilter(input, output, delay=0.7, atten=4)
```

サブモジュールを `import` するもう一つの方法を示します。

```
from sound.effects import echo
```

これもサブモジュール `echo` をロードし、`echo` をパッケージ名を表す接頭辞なしで利用できるようにします。従って以下のように用いることができます。

```
echo.echofilter(input, output, delay=0.7, atten=4)
```

さらにもう一つのバリエーションとして、必要な関数や変数を直接 import する方法があります。

```
from sound.effects.echo import echofilter
```

この操作も同様にサブモジュール `echo` をロードしますが、`echofilter()` を直接利用できるようにします。

```
echofilter(input, output, delay=0.7, atten=4)
```

`from package import item` を使う場合、*item* はパッケージ *package* のサブモジュール (またはサブパッケージ) でもかまいませんし、関数やクラス、変数のような、*package* で定義されている別の名前でもかまわないことに注意してください。import 文はまず、*item* がパッケージ内で定義されているかどうか調べます。定義されていなければ、*item* はモジュール名であると仮定して、モジュールをロードしようと試みます。もしモジュールが見つからなければ、`ImportError` が送出されます。

反対に、`import item.subitem.subsubitem` のような構文を使った場合、最後の `subsubitem` を除く各要素はパッケージでなければなりません。最後の要素はモジュールかパッケージにできますが、一つ前の要素で定義されているクラスや関数や変数にはできません。

6.5.1 パッケージから * を import する

それでは、ユーザが `from sound.effects import *` と書いたら、どうなるのでしょうか？理想的には、何らかの方法でファイルシステムが調べられ、そのパッケージにどんなサブモジュールがあるかを調べ上げ、全てを import する、という処理を望むことでしょう。これには長い時間がかかってしまうこともありますし、あるサブモジュールを import することで、そのモジュールが明示的に import されたときのみ発生して欲しい副作用が起きてしまうかもしれません。

唯一の解決策は、パッケージの作者にパッケージの索引を明示的に提供させるというものです。import 文は次の規約を使います: パッケージの `__init__.py` コードに `__all__` という名前のリストが定義されていれば、`from package import *` が現れたときに import するリストとして使います。新たなパッケージがリリースされるときにリストを最新の状態に更新するのはパッケージの作者の責任となります。自分のパッケージから * を import するという使い方に同意できなければ、パッケージの作者はこの使い方をサポートしないことにしてもかまいません。例えば、ファイル `sounds/effects/__init__.py` には、次のようなコードを入れてもよいかもしれません。

```
__all__ = ["echo", "surround", "reverse"]
```

この例では、`from sound.effects import *` とすると、`sound` パッケージから指定された 3 つのサブモジュールが import されることになっている、ということを意味します。

もしも `__all__` が定義されていなければ、実行文 `from sound.effects import *` は、パッケージ `sound.effects` の全てのサブモジュールを現在の名前空間の中へ import しません。この文は単に (場合によっては初期化コード `__init__.py` を実行して) パッケージ `sound.effects` が import されたということを確認し、そのパッケージで定義されている名前を全て import するだけです。import される名前には、`__init__.py` で定義された名前 (と、明示的にロードされたサブモジュール) が含まれます。パッケージのサブモジュールで、以前の import 文で明示的にロードされたものも含まれます。以下のコードを考えてください。

```
import sound.effects.echo
import sound.effects.surround
from sound.effects import *
```

上の例では、`echo` と `surround` モジュールが現在の名前空間に `import` されます。これらのモジュールは `from...import` 文が実行された際に `sound.effects` 内で定義されているからです (この機構は `__all__` が定義されているときにも働きます)。

特定のモジュールでは `import *` を使ったときに、特定のパターンに従った名前のみを公開 (export) するように設計されていますが、それでもやはり製品のコードでは良いことではないと考えます。

`from package import specific_submodule` を使っても何も問題はないことに留意してください! 実際この表記法は、`import` を行うモジュールが他のパッケージと同じ名前を持つサブモジュールを使わなければならない場合を除いて推奨される方式です。

6.5.2 パッケージ内での参照

サブモジュール同士で互いに参照を行う必要がしばしば起こります。例えば、`surround` モジュールは `echo` モジュールを使うかもしれません。このような参照はよくあることなので、`import` 文を実行すると、まず最初に `import` 文の入っているパッケージを検索し、その後になって標準のモジュール検索パスを見に行きます。なので、`surround` モジュールは単に `import echo` や `from echo import echofilter` を使うことができます。`import` されたモジュールが現在のパッケージ (現在のモジュールをサブモジュールにしているパッケージ) 内に見つからなかった場合、`import` 文は指定した名前のトップレベルのモジュールを検索します。

パッケージが (前述の例の `sound` パッケージのように) サブパッケージの集まりに構造化されている場合、絶対 `import` を使って兄弟関係にあるパッケージを参照できます。例えば、モジュール `sound.filters.vocoder` で `sound.effects` パッケージの `echo` モジュールを使いたいとすると、`from sound.effects import echo` を使うことができます。

Python 2.5 からは、上で説明した暗黙の相対 `import` に加えて、明示的な相対 `import` を `from module import name` の形式の `import` 文で利用できます。この明示的な相対 `import` では、先頭のドットで現在および親パッケージを指定します。`surround` モジュールの例では、以下のように記述できます。

```
from . import echo
from .. import formats
from ..filters import equalizer
```

明示的および暗黙的な相対 `import` のどちらも現在のモジュール名をベースにすることに注意してください。メインモジュールの名前は常に `"__main__"` なので、Python アプリケーションのメインモジュールとして利用されることを意図しているモジュールでは絶対 `import` を利用すべきです。

6.5.3 複数ディレクトリ中のパッケージ

パッケージはもう一つ特別な属性として `__path__` をサポートしています。この属性は、パッケージの `__init__.py` 中のコードが実行されるよりも前に、`__init__.py` の収められているディレクトリ名の入ったリストになるよう初期化されます。この変数は変更することができます。変更を加えると、以降そのパッケージに入っているモジュールやサブパッケージの検索に影響します。

この機能はほとんど必要にはならないのですが、パッケージ内存在するモジュール群を拡張するために使うことができます。

入力と出力

プログラムから出力を行う方法がいくつかあります。データは人間が読める形で出力することも、将来使うためにファイルに書くこともできます。この章では、こうした幾つかの出力の方法について話します。

7.1 ファンシーな出力の書式化

これまでのところ、値を出力する二つの方法: 式文 (*expression statement*) と `print` 文が出てきました。(第三はファイルオブジェクトの `write()` メソッドを使う方法です。標準出力を表すファイルは `sys.stdout` で参照できます。詳細はライブラリリファレンスを参照してください。)

出力を書式化する際に、単に値をスペースで区切って出力するよりももっときめ細かな制御をしたいと思うことがあるでしょう。出力を書式化するには二つの方法があります。第一の方法は、全ての文字列を自分で処理するというものです。文字列のスライスや結合といった操作を使えば、思い通りのレイアウトを作成することができます。文字列オブジェクトは、文字列を指定されたカラム幅に揃えるための幾つかの便利なメソッドを提供しています。これらのメソッドについてはすぐ後で簡単に説明します。もうひとつの方法は `str.format()` メソッドを利用することです。

もちろん、一つ問題があります。値をどうやって文字列に変換したらいいのでしょうか？幸運なことに、Python には値を文字列に変換する方法があります。値を `repr()` か `str()` 関数に渡してください。

`str()` 関数は、値を表現するときに人間にとって読みやすい形式の文字列を返します。一方、`repr()` は、インタプリタが読めるような(あるいは、等価な値を表現するための構文がない場合には `SyntaxError` を送出させる)表現にするためのものです。人間が利用するための特別な表現をもたないオブジェクトでは、`str()` は `repr()` と同じ値を返します。数値や、リストや辞書などの構造体のような多くの値は、どちらの関数でも同じ表現になります。文字列と浮動小数点は特別で、二つの別個の表現となります。

下にいくつか例を挙げます。

```
>>> s = 'Hello, world.'
>>> str(s)
'Hello, world.'
>>> repr(s)
"'Hello, world.'"
>>> str(0.1)
'0.1'
```

```
>>> repr(0.1)
'0.10000000000000001'
>>> x = 10 * 3.25
>>> y = 200 * 200
>>> s = 'The value of x is ' + repr(x) + ', and y is ' + repr(y) + '...'
>>> print s
The value of x is 32.5, and y is 40000...
>>> # 文字列への repr() はクオートとバックスラッシュが付加される。
... hello = 'hello, world\n'
>>> hellos = repr(hello)
>>> print hellos
'hello, world\n'
>>> # repr() の引数は Python オブジェクトの場合もある:
... repr((x, y, ('spam', 'eggs'))
"(32.5, 40000, ('spam', 'eggs'))"
```

以下に 2 乗と 3 乗の値からなる表を書く二つの方法を示します。

```
>>> for x in range(1, 11):
...     print repr(x).rjust(2), repr(x*x).rjust(3),
...           # 上の行の末尾のコンマに注意
...           print repr(x*x*x).rjust(4)
...
1   1   1
2   4   8
3   9  27
4  16  64
5  25 125
6  36 216
7  49 343
8  64 512
9  81 729
10 100 1000

>>> for x in range(1,11):
...     print '{0:2d} {1:3d} {2:4d}'.format(x, x*x, x*x*x)
...
1   1   1
2   4   8
3   9  27
4  16  64
5  25 125
6  36 216
7  49 343
8  64 512
9  81 729
10 100 1000
```

(最初の例で、各カラムの間のスペース一個は `print` の働きで追加されていることに注意してください。
`print` は引数間に常に空白を追加します。)

この例では、文字列の `rjust()` メソッドの使い方を示しています。`rjust()` は文字列を指定された幅のフィールド内に右詰めで入るように、左に空白を追加します。同様のメソッドとして、`ljust()` と `center()` があります。これらのメソッドは何か出力を行うわけではなく、ただ新しい文字列を返します。入力文字列が長すぎる場合、文字列を切り詰めることはせず、ただ値をそのまま返します。この仕様のためにカラムのレイアウトが滅茶苦茶になるかもしれませんが、嘘の値が代わりに書き出されるよりはましです。(本当に切り詰めを行いたいのなら、全てのカラムに `x.ljust(n)[:n]` のようにスライス表記を加えることもできます。)

もう一つのメソッド、`zfill()` は、数値文字列の左側をゼロ詰めします。このメソッドは正と負の符号を

正しく扱います。

```
>>> '12'.zfill(5)
'00012'
>>> '-3.14'.zfill(7)
'-003.14'
>>> '3.14159265359'.zfill(5)
'3.14159265359'
```

`str.format()` メソッドの基本的な使い方は次のようなものです。

```
>>> print 'We are the {0} who say "{1}!".format('knights', 'Ni')
We are the knights who say "Ni!"
```

括弧とその中の文字 (これをフォーマットフィールドと呼びます) は、`format()` メソッドに渡されたオブジェクトに置換されます。括弧の中の数字は `format()` メソッドに渡されたオブジェクトの位置を表します。

```
>>> print '{0} and {1}'.format('spam', 'eggs')
spam and eggs
>>> print '{1} and {0}'.format('spam', 'eggs')
eggs and spam
```

`format()` メソッドにキーワード引数が渡された場合、その値はキーワード引数の名前によって参照されます。

```
>>> print 'This {food} is {adjective}.'.format(
...     food='spam', adjective='absolutely horrible')
This spam is absolutely horrible.
```

順序引数とキーワード引数を組み合わせて使うこともできます。

```
>>> print 'The story of {0}, {1}, and {other}'.format('Bill', 'Manfred',
...                                                  other='Georg')
The story of Bill, Manfred, and Georg.
```

`str()` を適応する `'!s'` や `repr()` を適応する `'!r'` を使って、値をフォーマットする前に変換することができます。

```
>>> import math
>>> print 'The value of PI is approximately {0}'.format(math.pi)
The value of PI is approximately 3.14159265359.
>>> print 'The value of PI is approximately {0!r}'.format(math.pi)
The value of PI is approximately 3.141592653589793.
```

オプションの `':'` とフォーマット指定子を、フィールド名の後ろに付けることができます。フォーマット指定子によって値がどうフォーマットされるかを制御することができます。次の例では、円周率 π を、小数点以下 3 桁でフォーマットしています。

```
>>> import math
>>> print 'The value of PI is approximately {0:.3f}'.format(math.pi)
The value of PI is approximately 3.142.
```

`':'` の後ろに整数をつけると、そのフィールドの最低の文字幅を指定できます。この機能は綺麗なテーブルを作るのに便利です。

```
>>> table = {'Sjoerd': 4127, 'Jack': 4098, 'Dcab': 7678}
>>> for name, phone in table.items():
...     print '{0:10} ==> {1:10d}'.format(name, phone)
...
Jack          ==>      4098
Dcab          ==>      7678
Sjoerd        ==>      4127
```

もしも長い書式化文字列があり、それを分割したくない場合には、変数を引数の位置ではなく変数の名前で参照できるとよいでしょう。これは、辞書を引数に渡して、角括弧 '`[]`' を使って辞書のキーを参照することで可能です。

```
>>> table = {'Sjoerd': 4127, 'Jack': 4098, 'Dcab': 8637678}
>>> print ('Jack: {0[Jack]:d}; Sjoerd: {0[Sjoerd]:d}; '
...       'Dcab: {0[Dcab]:d}'.format(table))
Jack: 4098; Sjoerd: 4127; Dcab: 8637678
```

`table` を '`**`' 記法を使ってキーワード引数として渡す方法もあります。

```
>>> table = {'Sjoerd': 4127, 'Jack': 4098, 'Dcab': 8637678}
>>> print 'Jack: {Jack:d}; Sjoerd: {Sjoerd:d}; Dcab: {Dcab:d}'.format(**table)
Jack: 4098; Sjoerd: 4127; Dcab: 8637678
```

全てのローカルな変数が入った辞書を返す、新たに紹介する組み込み関数 `vars()` と組み合わせると特に便利です。

`str.format()` による文字列フォーマットの完全な解説は、*formatstrings* を参照してください。

7.1.1 古い文字列フォーマット方法

`%` 演算子を使って文字列フォーマットをする方法もあります。これは、演算子の左側の `sprintf()` スタイルのフォーマット文字列に、演算子の右側の値を適用し、その結果の文字列を返します。例えば:

```
::
```

```
>>> import math
>>> print 'The value of PI is approximately %5.3f.' % math.pi
The value of PI is approximately 3.142.
```

`str.format()` は最近導入された機能なので、多くの Python のコードがまだ `%` 演算子を利用しています。ですが、古い方法はいつか削除されるかもしれないので、普通は `str.format()` を使うのが良いでしょう。

より詳しい情報は *string-formatting* にあります。

7.2 ファイルを読み書きする

`open()` はファイルオブジェクトを返します。大抵、`open(filename, mode)` のように二つの引数を伴って呼び出されます。

```
>>> f = open('/tmp/workfile', 'w')
>>> print f
<open file '/tmp/workfile', mode 'w' at 80a0960>
```

最初の引数はファイル名の入った文字列です。二つめの引数も文字列で、ファイルをどのように使うかを示す数個の文字が入っています。*mode* は、ファイルが読み出し専用なら `'r'`、書き込み専用 (同名の既存のファイルがあれば消去されます) なら `'w'` とします。`'a'` はファイルを追記用に開きます。ファイルに書き込まれた内容は自動的にファイルの終端に追加されます。`'r+'` はファイルを読み書き両用に開きます。*mode* 引数は省略可能で、省略された場合には `'r'` であると仮定します。

Windows では、*mode* に `'b'` を追加するとファイルをバイナリモードで開きます。したがって、`'rb'`、`'wb'`、`'r+b'` といったモードがあります。Windows 上で動く Python はテキストファイルとバイナリファイルを区別しています。テキストファイルでは、読み書きの際に行末文字が自動的に少し変更されます。この舞台裏でのファイルデータ変更は、ASCII でできたテキストファイルでは差し支えないものですが、JPEG や EXE ファイルのようなバイナリデータは破損してしまうことになるでしょう。こうしたファイルを読み書きするにはバイナリモードを使うよう十分注意してください。Unix では、`'b'` を追加しても何も影響がないので、バイナリフォーマットを扱うためのプラットフォーム非依存な方法として利用できます。

7.2.1 ファイルオブジェクトのメソッド

この節の以降の例は、`f` というファイルオブジェクトが既に生成されているものと仮定します。

ファイルの内容を読み出すには、`f.read(size)` を呼び出します。このメソッドはある量のデータを読み出して、文字列として返します。*size* は省略可能な数値引数です。*size* が省略されたり負の数であった場合、ファイルの内容全てを読み出して返します。ただし、ファイルがマシンのメモリの二倍の大きさもある場合にはどうなるかわかりません。*size* が負でない数ならば、最大で *size* バイトを読み出して返します。ファイルの終端にすでに達していた場合、`f.read()` は空の文字列 (`""`) を返します。

```
>>> f.read()
'This is the entire file.\n'
>>> f.read()
''
```

`f.readline()` はファイルから 1 行だけを読み取ります。改行文字 (`\n`) は読み出された文字列の終端に残ります。改行が省略されるのは、ファイルが改行で終わっていない場合の最終行のみです。これは、戻り値があいまいでないようにするためです;`f.readline()` が空の文字列を返したら、ファイルの終端に達したことが分かります。一方、空行は `'\n'`、すなわち改行 1 文字だけからなる文字列で表現されます。

```
>>> f.readline()
'This is the first line of the file.\n'
>>> f.readline()
'Second line of the file\n'
>>> f.readline()
''
```

`f.readlines()` は、ファイルに入っているデータの全ての行からなるリストを返します。省略可能な引数 *sizehint* が指定されていれば、ファイルから指定されたバイト数を読み出し、さらに一行を完成させるのに必要なだけを読み出して、読み出された行からなるリストを返します。このメソッドは巨大なファイルを行単位で効率的に読み出すためによく使われます。未完成の行が返されることはありません。

```
>>> f.readlines()
['This is the first line of the file.\n', 'Second line of the file\n']
```

行を読む別のアプローチは、ファイルオブジェクトについてループをおこなうことです。これは省メモリで、速く、コードがよりシンプルになります。

```
>>> for line in f:
    print line,
```

This is the first line of the file.
Second line of the file

この方法はシンプルですが細かなコントロールをすることができません。行バッファを管理する方法が異なるので、これらを混在させて使うことはできません。

`f.write(string)` は、*string* の内容をファイルに書き込み、`None` を返します。

```
>>> f.write('This is a test\n')
```

文字列以外のものを出力したい場合、まず文字列に変換してやる必要があります。

```
>>> value = ('the answer', 42)
>>> s = str(value)
>>> f.write(s)
```

`f.tell()` は、ファイルオブジェクトが指しているあるファイル中の位置を示す整数を、ファイルの先頭からのバイト数で図った値で返します。ファイルオブジェクトの位置を変更するには、`f.seek(offset, from_what)` を使います。ファイル位置は基準点 (reference point) にオフセット値 *offset* を足して計算されます。参照点は *from_what* 引数で選びます。 *from_what* の値が 0 ならばファイルの先頭から測り、1 ならば現在のファイル位置を使い、2 ならばファイルの終端を参照点として使います。 *from_what* は省略することができ、デフォルトの値は 0、すなわち参照点としてファイルの先頭を使います。

```
>>> f = open('/tmp/workfile', 'r+')
>>> f.write('0123456789abcdef')
>>> f.seek(5)          # ファイルの第 6 バイトへ行く
>>> f.read(1)
'5'
>>> f.seek(-3, 2) # 終端から前へ第 3 バイトへ行く
>>> f.read(1)
'd'
```

ファイルが用済みになったら、`f.close()` を呼び出してファイルを閉じ、ファイルを開くために取られていたシステム資源を解放します。`f.close()` を呼び出した後、そのファイルオブジェクトを使おうとすると自動的に失敗します。

```
>>> f.close()
>>> f.read()
Traceback (most recent call last):
  File "<stdin>", line 1, in ?
ValueError: I/O operation on closed file
```

ファイルオブジェクトを扱うときに `with` キーワードを使うのは良い習慣です。`with` を使うと、処理中に例外が発生しても必ず最後にファイルを閉じることができます。同じことを `try-finally` を使って書くよりずっと簡潔に書けます。

```
>>> with open('/tmp/workfile', 'r') as f:
...     read_data = f.read()
>>> f.closed
True
```

ファイルオブジェクトには、他にも `isatty()` や `truncate()` といった、あまり使われないメソッドがあります。ファイルオブジェクトについての完全なガイドは、ライブラリリファレンスを参照してください。

7.2.2 pickle モジュール

文字列をファイルに読み書きするのは簡単にできます。数値だとほんのわずかに手間が増えます。というのは、`read()` は文字列だけを返すので、`'123'` のような文字列を受け取って、その数値 `123` を返す `int()` のような関数に文字列を渡してやらなければならないからです。ところが、リストや辞書、クラスのインスタンスのように、もっと複雑なデータ型を保存したいなら、事態はもっと複雑になります。

複雑なデータ型を保存するためのコードを毎回毎回書いてデバッグする代わりに、Python では `pickle` という標準モジュールを用意しています。`pickle` は驚くべきモジュールで、ほとんどどんな Python オブジェクトでも (ある形式の Python コードでさえも!) 受け取って文字列表現へ変換できます。この変換過程は *pickling* (ピクルス (漬物) 化、以降 *pickle* 化) と呼ばれます。文字列表現からオブジェクトを再構成する操作は *unpickling* (逆 *pickle* 化) と呼びます。*pickle* 化してから *unpickle* 化するまでの間、オブジェクトを表現する文字列は、ファイルやデータに保存したり、ネットワーク接続を介して離れたマシンに送信したりできます。

オブジェクト `x` と、書込み用に開かれているファイルオブジェクト `f` があると仮定すると、オブジェクトを *pickle* 化する最も簡単な方法は、たった一行のコードです。

```
pickle.dump(x, f)
```

逆 *pickle* 化して再びオブジェクトに戻すには、`f` を読み取り用に開かれているファイル・オブジェクトと仮定して、

```
x = pickle.load(f)
```

とします。

(*pickle* / 逆 *pickle* 化にはいくつか方法があり、たくさんのオブジェクトを *pickle* 化したり、*pickle* 化されたデータをファイルに書きたくないときに使われます。完全なドキュメントについては、ライブラリリファレンスの *pickle* を調べてください。)

`pickle` は、Python のオブジェクトを保存できるようにし、他のプログラムや、同じプログラムが将来起動されたときに再利用できるようにする標準の方法です。技術的な用語でいうと *persistent* (永続性) オブジェクトです。`pickle` はとても広範に使われているので、Python 拡張モジュールの多くの作者は、行列のような新たなデータ型が正しく *pickle* / 逆 *pickle* 化できるよう気をつけています。

エラーと例外

これまでエラーメッセージについては簡単に触れるだけでしたが、チュートリアル中の例を自分で試していたら、実際にいくつかのエラーメッセージを見ていることでしょう。エラーには(少なくとも)二つのはっきり異なる種類があります。それは 構文エラー (*syntax error*) と 例外 (*exception*) です。

8.1 構文エラー

構文エラーは構文解析エラー (parsing error) としても知られており、Python を勉強している間に最もよく遭遇する問題の一つでしょう。

```
>>> while True print 'Hello world'
      File "<stdin>", line 1, in ?
            while True print 'Hello world'
                               ^
SyntaxError: invalid syntax
```

パーサは違反の起きている行を表示し、小さな「矢印」を表示して、行中でエラーが検出された最初の位置を示します。エラーは矢印の直前のトークンで引き起こされています(または、少なくともそこで検出されています)。上記の例では、エラーは `print` で検出されています。コロンの `(:)` がその前に無いからです。入力がスクリプトから来ている場合は、どこを見ればよいかわかるようにファイル名と行番号が出力されます。

8.2 例外

たとえ文や式が構文的に正しくても、実行しようとしたときにエラーが発生するかもしれません。実行中に検出されたエラーは 例外 (*exception*) と呼ばれ、常に致命的とは限りません。これから、Python プログラムで例外をどのように扱うかを学んでいきます。ほとんどの例外はプログラムで処理されず、以下に示されるようなメッセージになります。

```
>>> 10 * (1/0)
Traceback (most recent call last):
  File "<stdin>", line 1, in ?
ZeroDivisionError: integer division or modulo by zero
```

```
>>> 4 + spam*3
Traceback (most recent call last):
  File "<stdin>", line 1, in ?
NameError: name 'spam' is not defined
>>> '2' + 2
Traceback (most recent call last):
  File "<stdin>", line 1, in ?
TypeError: cannot concatenate 'str' and 'int' objects
```

エラーメッセージの最終行は何が起こったかを示しています。例外は様々な型 (type) で起こり、その型がエラーメッセージの一部として出力されます。上の例での型は `ZeroDivisionError`, `NameError`, `TypeError` です。例外型として出力される文字列は、発生した例外の組み込み名です。これは全ての組み込み例外について成り立ちますが、ユーザ定義の例外では (成り立つようにするのは有意義な慣習ですが) 必ずしも成り立ちません。標準例外の名前は組み込みの識別子です (予約語ではありません)。

残りの行は例外の詳細で、その例外の型と何が起きたかに依存します。

エラーメッセージの先頭部分では、例外が発生した実行コンテキスト (context) を、スタックのトレースバック (stack traceback) の形式で示しています。一般には、この部分にはソースコード行をリストしたトレースバックが表示されます。しかし、標準入力から読み取られたコードは表示されません。

`bltin-exceptions` には、組み込み例外とその意味がリストされています。

8.3 例外を処理する

例外を選別して処理するようなプログラムを書くことができます。以下の例を見てください。この例では、有効な文字列が入力されるまでユーザに入力を促しますが、ユーザがプログラムに (Control-C か、またはオペレーティングシステムがサポートしている何らかのキーを使って) 割り込みをかけてプログラムを中断させることができるようにしています。ユーザが生成した割り込みは、`KeyboardInterrupt` 例外が送出されることで通知されるということに注意してください。

```
>>> while True:
...     try:
...         x = int(raw_input("Please enter a number: "))
...         break
...     except ValueError:
...         print "Oops!  That was no valid number.  Try again..."
... 
```

`try` 文は下記のように動作します。

- まず、`try` 節 (*try clause*) (キーワード `try` と `except` の間の文) が実行されます。
- 何も例外が発生しなければ、`except` 節 をスキップして `try` 文の実行を終えます。
- `try` 節内の実行中に例外が発生すると、その節の残りは飛ばされます。次に、例外型が `except` キーワードの後に指定されている例外に一致する場合、`except` 節が実行された後、`try` 文の後ろへ実行が継続されます。
- もしも `except` 節で指定された例外と一致しない例外が発生すると、その例外は `try` 文の外側に渡されます。例外に対するハンドラ (handler、処理部) がどこにもなければ、処理されない例外 (*unhandled exception*) となり、上記に示したようなメッセージを出して実行を停止します。

一つの `try` 文に複数の `except` 節を設けて、さまざまな例外に対するハンドラを指定することができます。同時に一つ以上のハンドラが実行されることはありません。ハンドラは対応する `try` 節内で発生した例外だけを処理し、同じ `try` 節内の別の例外ハンドラで起きた例外は処理しません。`except` 節には複数の例外を丸括弧で囲ったタプルにして渡すことができます。例えば以下のようにします。

```
... except (RuntimeError, TypeError, NameError):
...     pass
```

最後の `except` 節では例外名を省いて、ワイルドカード (wildcard、総称記号) にすることができます。ワイルドカードの `except` 節は非常に注意して使ってください。というのは、ワイルドカードは通常のプログラムエラーをたやすく隠してしまうからです！ワイルドカードの `except` 節はエラーメッセージを出力した後に例外を再送出する (関数やメソッドの呼び出し側が同様にして例外を処理できるようにする) 用途にも使えます。

```
import sys

try:
    f = open('myfile.txt')
    s = f.readline()
    i = int(s.strip())
except IOError as (errno, strerror):
    print "I/O error({0}): {1}".format(errno, strerror)
except ValueError:
    print "Could not convert data to an integer."
except:
    print "Unexpected error:", sys.exc_info()[0]
    raise
```

`try ... except` 文には、オプションで `else` 節 (*else clause*) を設けることができます。`else` 節を設ける場合、全ての `except` 節よりも後ろに置かねばなりません。`else` 節は `try` 節で全く例外が送出されなかったときに実行されるコードを書くのに役立ちます。例えば次のようにします。

```
for arg in sys.argv[1:]:
    try:
        f = open(arg, 'r')
    except IOError:
        print 'cannot open', arg
    else:
        print arg, 'has', len(f.readlines()), 'lines'
        f.close()
```

追加のコードを追加するのは `try` 節の後ろよりも `else` 節の方がよいでしょう。なぜなら、そうすることで `try ... except` 文で保護したいコードから送出されたもの以外の例外を偶然に捕捉してしまうという事態を避けられるからです。

例外が発生するとき、例外は関連付けられた値を持つことができます。この値は例外の引数 (*argument*) とも呼ばれます。引数の有無および引数の型は、例外の型に依存します。

`except` 節では、例外名 (または例外名タプル) の後に変数を指定することができます。この変数は例外インスタンスに結び付けられており、`instance.args` に例外インスタンス生成時の引数が入っています。例外インスタンスには `__str__()` が定義されており、`.args` を参照しなくても引数を直接印字できるように利便性が図られています。

必要なら、例外を送出する前にインスタンス化して、任意の属性を追加できます。

```
>>> try:
...     raise Exception('spam', 'eggs')
... except Exception as inst:
...     print type(inst)         # 例外インスタンス
...     print inst.args         # .args に記憶されている引数
...     print inst              # __str__ により引数を直接出力できる
...     x, y = inst             # __getitem__ により引数を直接アンパックできる
...     print 'x =', x
...     print 'y =', y
...
<type 'exceptions.Exception'>
('spam', 'eggs')
('spam', 'eggs')
x = spam
y = eggs
```

例外が引数を持っていれば、それは処理されない例外のメッセージの最後の部分（「詳細説明」）に出力されます。

例外ハンドラは、try 節の直接内側で発生した例外を処理するだけでなく、その try 節から（たとえ間接的にでも）呼び出された関数の内部で発生した例外も処理します。例えば

```
>>> def this_fails():
...     x = 1/0
...
>>> try:
...     this_fails()
... except ZeroDivisionError, detail:
...     print 'Handling run-time error:', detail
...
Handling run-time error: integer division or modulo by zero
```

8.4 例外を送出する

raise 文を使って、特定の例外を発生させることができます。例えば、

```
>>> raise NameError('HiThere')
Traceback (most recent call last):
  File "<stdin>", line 1, in ?
NameError: HiThere
```

raise の引数は、送出したい例外クラスまたはインスタンスです。推奨されない古い構文として、クラスとコンストラクタへの引数を別々に指定する方法があります。上記の例は raise NameError, 'HiThere' と書くことができます。以前は一通りの形式しかなかったので、古いコードでは後者の形式が一般的です。

例外が発生したかどうかを判定したいだけで、その例外を処理するつもりがなければ、単純な形式の raise 文を使って例外を再送出させることができます。

```
>>> try:
...     raise NameError('HiThere')
... except NameError:
...     print 'An exception flew by!'
...     raise
...
An exception flew by!
Traceback (most recent call last):
```

```
File "<stdin>", line 2, in ?
NameError: HiThere
```

8.5 ユーザ定義の例外

プログラム上で新しい例外クラスを作成することで、独自の例外を指定することができます (Python のクラスについては [クラス](#) 参照)。例外は、典型的に `Exception` クラスから、直接または間接的に派生したものです。例を示します。

```
>>> class MyError(Exception):
...     def __init__(self, value):
...         self.value = value
...     def __str__(self):
...         return repr(self.value)
...
>>> try:
...     raise MyError(2*2)
... except MyError as e:
...     print 'My exception occurred, value:', e.value
...
My exception occurred, value: 4
>>> raise MyError('oops!')
Traceback (most recent call last):
  File "<stdin>", line 1, in ?
__main__.MyError: 'oops!'
```

この例では `Exception` のデフォルト `__init__()` がオーバーライドされています。新しい振る舞いでは、単に `value` 属性を作ります。これは、デフォルトの `args` 属性を作成する振る舞いを置き換えています。

例外クラスでは、普通のクラスができることなら何でも定義することができますが、通常は単純なものにしておきます。大抵は、いくつかの属性だけを提供し、例外が発生したときにハンドラがエラーに関する情報を取り出せるようにする程度にとどめます。複数の別個の例外を送出するようなモジュールを作成する際には、そのモジュールで定義されている例外の基底クラスを作成するのが一般的なプラクティスです。

```
class Error(Exception):
    """Base class for exceptions in this module."""
    pass

class InputError(Error):
    """Exception raised for errors in the input.

    Attributes:
        expr -- input expression in which the error occurred
        msg  -- explanation of the error
    """

    def __init__(self, expr, msg):
        self.expr = expr
        self.msg = msg

class TransitionError(Error):
    """Raised when an operation attempts a state transition that's not
    allowed.

    Attributes:
        prev -- state at beginning of transition
        next -- attempted new state
    """
```

```
msg -- explanation of why the specific transition is not allowed
"""

def __init__(self, prev, next, msg):
    self.prev = prev
    self.next = next
    self.msg = msg
```

ほとんどの例外は、標準の例外の名前付けと同様に、“Error” で終わる名前で定義されています。

多くの標準モジュールでは、モジュールで定義されている関数内で発生する可能性のあるエラーを報告させるために、独自の例外を定義しています。クラスについての詳細な情報は [クラス](#) 章で提供されています。

8.6 クリーンアップ動作を定義する

`try` 文にはもう一つオプションの節があります。この節はクリーンアップ動作を定義するためのもので、どんな状況でも必ず実行されます。例を示します。

```
>>> try:
...     raise KeyboardInterrupt
... finally:
...     print 'Goodbye, world!'
...
Goodbye, world!
KeyboardInterrupt
```

finally 節 (*finally clause*) は、例外が発生したかどうかに関わらず、`try` 文を抜ける前に常に実行されます。`try` 節の中で例外が発生して、`except` 節で処理されていない場合、または `except` 節か `else` 節で例外が発生した場合は、*finally* 節を実行した後、その例外を再送出します。*finally* 節はまた、`try` 節から `break` 文や `continue` 文、`return` 文経由で抜ける際にも、“抜ける途中で” 実行されます。より複雑な例です (`except` 節や *finally* 節が同じ `try` 文の中にある、Python 2.5 以降で動作します)。

```
>>> def divide(x, y):
...     try:
...         result = x / y
...     except ZeroDivisionError:
...         print "division by zero!"
...     else:
...         print "result is", result
...     finally:
...         print "executing finally clause"
...
>>> divide(2, 1)
result is 2
executing finally clause
>>> divide(2, 0)
division by zero!
executing finally clause
>>> divide("2", "1")
executing finally clause
Traceback (most recent call last):
  File "<stdin>", line 1, in ?
  File "<stdin>", line 3, in divide
TypeError: unsupported operand type(s) for /: 'str' and 'str'
```

見てわかるとおり、`finally` 節はどの場合にも実行されています。文字列を割り算することで発生した `TypeError` は `except` 節で処理されていないので、`finally` 節実行後に再度送出されています。

実世界のアプリケーションでは、`finally` 節は (ファイルやネットワーク接続などの) 外部リソースを、利用が成功したかどうかにかかわらず解放するために便利です。

8.7 定義済みクリーンアップ処理

オブジェクトのなかには、その利用の成否にかかわらず、不要になった際に実行される標準的なクリーンアップ処理が定義されているものがあります。以下の、ファイルをオープンして内容を画面に表示する例をみてください。

```
for line in open("myfile.txt"):
    print line
```

このコードの問題点は、コードが実行された後に不定の時間ファイルを開いたままにいることです。これは単純なスクリプトでは問題になりませんが、大きなアプリケーションでは問題になりえます。`with` 文はファイルのようなオブジェクトが常に、即座に正しくクリーンアップされることを保証します。

```
with open("myfile.txt") as f:
    for line in f:
        print line
```

この文が実行されたあとで、たとえ行の処理中に問題があったとしても、ファイル `f` は常に `close` されます。他の定義済みクリーンアップ処理を持つオブジェクトについては、それぞれのドキュメントで示されます。

クラス

Python は、最小限の構文と意味付けを使ってクラスを言語に追加しています。Python のクラスは、C++ と Modula-3 のクラスメカニズムを混ぜたものです。モジュールと同じく、Python におけるクラスでは、クラス定義とユーザとの間に絶対的な障壁をおかず、ユーザが礼儀正しく、“定義の邪魔をする” ことはないにあてにしています。とはいえ、クラスにおける最も重要な機能は、完全な力を持ったままです: クラスの継承メカニズムは、複数の基底クラスを持つことができ、派生クラスで基底クラスの任意のメソッドをオーバーライドすることができます。メソッドでは、基底クラスのメソッドを同じ名前で呼び出すことができます。オブジェクトには任意のデータを入れることができます。

C++ の用語で言えば、全てのクラスメンバ(データメンバも含む)は *public* (公開されたデータ) であり、メンバ関数はすべて 仮想関数 (*virtual*) です。Module-3 にあるような、オブジェクトのメンバをメソッドから参照するための短縮した記法は使えません: メソッド関数の宣言では、オブジェクト自体を表す第一引数を明示せねばなりません。第一引数のオブジェクトはメソッド呼び出しの際に暗黙の引数として渡されます。Smalltalk に似て、クラスはそれ自体がオブジェクトです。そのため、import や名前変更といった操作が可能です。C++ や Modula-3 と違って、ユーザーは組み込み型を基底クラスにして拡張を行えます。また、C++ とは同じで Modula-3 とは違う点として、特別な構文を伴うほとんどの組み込み演算子 (算術演算子 (arithmetic operator) や添字表記) はクラスインスタンスで使うために再定義できます。

(クラスに関して普遍的な用語定義がないので、Smalltalk と C++ の用語を場合に応じて使っていくことにします。C++ よりも Modula-3 の方がオブジェクト指向の意味論が Python に近いので、Modula-3 の用語を使いたいのですが、ほとんどの読者は Modula-3 について知らないでしょうから。)

9.1 名前とオブジェクトについて

オブジェクトには個性があり、同一のオブジェクトに (複数のスコープから) 複数の名前を割り当てることができます。この機能は他の言語では 別名づけ (alias) として知られています。Python を一見しただけでは、別名づけの重要性は分からないことが多く、変更不能基本型 (数値、文字列、タプル) を扱うときには無視して差し支えありません。しかしながら、別名付けは、リストや辞書や他の多くの型など、変更可能な型を扱う Python コード上で驚くべき効果があります。別名付けはいくつかの点でポインタのように振舞い、このことは通常はプログラムに利するように使われます。例えば、オブジェクトの受け渡しは、実装上はポインタが渡されるだけなのでコストの低い操作になります。また、関数があるオブジェクトを引

数として渡されたとき、関数の呼び出し側からオブジェクトに対する変更を見ることができます — これにより、Pascal にあるような二つの引数渡し機構をもつ必要をなくしています。

9.2 Python のスコープと名前空間

クラスを紹介する前に、Python のスコープのルールについてあることを話しておかなければなりません。クラス定義は巧みなトリックを名前空間に施すので、何が起きているのかを完全に理解するには、スコープと名前空間がどのように動作するかを理解する必要があります。ちなみに、この問題に関する知識は全ての Python プログラマにとって有用です。

まず定義から始めましょう。

名前空間 (*namespace*) とは、名前からオブジェクトへの対応付け (mapping) です。ほとんどの名前空間は、現状では Python の辞書として実装されていますが、そのことは通常は (パフォーマンス以外では) 目立つことはないし、将来は変更されるかもしれません。名前空間の例には、組み込み名の集合 (`abs()` 等の関数や組み込み例外名)、モジュール内のグローバルな名前、関数を呼び出したときのローカルな名前があります。オブジェクトの属性からなる集合もまた、ある意味では名前空間です。名前空間について知っておくべき重要なことは、異なった名前空間にある名前の間には全く関係がないということです。例えば、二つの別々のモジュールの両方で関数 `maximize` という関数を定義することができ、定義自体は混同されることはありません — モジュールのユーザは名前の前にモジュール名をつけなければなりません。

ところで、属性という言葉は、ドットに続く名前すべてに対して使っています — 例えば式 `z.real` で、`real` はオブジェクト `z` の属性です。厳密に言えば、モジュール内の名前に対する参照は属性の参照です。式 `modname.funcname` では、`modname` はあるモジュールオブジェクトで、`funcname` はその属性です。この場合には、モジュールの属性とモジュールの中で定義されているグローバル名の間には、直接的な対応付けがされます。これらの名前は同じ名前空間を共有しているのです！¹

属性は読取り専用にも、書込み可能にもできます。書込み可能であれば、属性に代入することができます。モジュール属性は書込み可能で、`modname.the_answer = 42` と書くことができます。書込み可能な属性は、`del` 文で削除することもできます。例えば、`del modname.the_answer` は、`modname` で指定されたオブジェクトから属性 `the_answer` を除去します。

名前空間は様々な時点で作成され、その寿命も様々です。組み込みの名前が入った名前空間は Python インタプリタが起動するときに作成され、決して削除されることはありません。モジュールのグローバルな名前空間は、モジュール定義が読み込まれたときに作成されます。通常、モジュールの名前空間は、インタプリタが終了するまで残ります。インタプリタのトップレベルで実行された文は、スクリプトファイルから読み出されたものでも対話的に読み出されたものでも、`__main__` という名前のモジュールの一部分であるとみなされるので、独自の名前空間を持つことになります。(組み込みの名前は実際にはモジュール内に存在します。そのモジュールは `__builtin__` と呼ばれています。)

関数のローカルな名前空間は、関数が呼び出されたときに作成され、関数から戻ったときや、関数内で例外が送出され、かつ関数内で処理されなかった場合に削除されます。(実際には、忘れられる、と言ったほうが起きていることをよく表しています。) もちろん、再帰呼び出しのときには、各々の呼び出しで各自のローカルな名前空間があります。

¹ 例外が一つあります。モジュールオブジェクトには、秘密の読取り専用の属性 `__dict__` があり、モジュールの名前空間を実装するために使われている辞書を返します; `__dict__` という名前は属性ですが、グローバルな名前ではありません。この属性を利用すると名前空間の実装に対する抽象化を侵すことになるので、プログラムを検死するデバッガのような用途に限るべきです。

スコープ (*scope*) とは、ある名前空間が直接アクセスできるような、Python プログラムのテキスト上の領域です。“直接アクセス可能”とは、修飾なしに (訳注: `spam.egg` ではなく単に `egg` のように) 名前を参照した際に、その名前空間から名前を見つけようと試みることを意味します。

スコープは静的に決定されますが、動的に使用されます。実行中はいつでも、直接名前空間にアクセス可能な、少なくとも三つの入れ子になったスコープがあります。

- 最初に探される、最も内側のスコープは、ローカルな名前を持っています。
- 外側の (enclosing) 関数のスコープは、近いほうから順に探され、ローカルでもグローバルでもない名前を持っています。
- 次のスコープは、現在のモジュールのグローバルな名前を持っています。
- 一番外側の (最後に検索される) スコープはビルトイン名を持っています。

名前が `global` と宣言されている場合、その名前に対する参照や代入は全て、モジュールのグローバルな名前の入った中間のスコープに対して直接行われます。そうでない場合、最も内側のスコープより外側にある変数は全て読み出し専用となります。(そのような変数に対する書き込みは、単に 新しい ローカル変数をもっとも内側のスコープで作成し、外部のスコープの値は変化しません)

通常、ローカルスコープは (プログラムテキスト上の) 現在の関数のローカルな名前を参照します。関数の外側では、ローカルスコープはグローバルな名前空間と同じ名前空間、モジュールの名前空間を参照します。クラス定義では、ローカルスコープの中にもう一つ名前空間が置かれます。

スコープはテキスト上で決定されていると理解することが重要です。モジュール内で定義される関数のグローバルなスコープは、関数がどこから呼び出されても、どんな別名をつけて呼び出されても、そのモジュールの名前空間になります。反対に、実際の名前の検索は実行時に動的に行われます — といえ、言語の定義は、“コンパイル” 時の静的な名前解決の方向に進化しているので、動的な名前解決に頼ってはいけません! (事実、ローカルな変数は既に静的に決定されています。)

Python 特有の癖として、代入を行うと — どの `global` 文も有効でない場合は — 名前がいつも最も内側のスコープに入るといえるものがあります。代入はデータのコピーを行いません — 単に名前をオブジェクトに結びつける (bind) だけです。オブジェクトの削除でも同じです: `del x` は、`x` をローカルスコープが参照している名前空間から削除します。実際、新たな名前を導入する操作は全てローカルスコープを用います。とりわけ、`import` 文や関数定義は、モジュールや関数の名前をローカルスコープに結び付けます。(`global` 文を使えば、特定の変数がグローバルスコープにあることを示せます。)

9.3 クラス初見

クラスでは、新しい構文を少しと、三つの新たなオブジェクト型、そして新たな意味付けをいくつか取り入れています。

9.3.1 クラス定義の構文

クラス定義の最も単純な形式は、次のようになります。

```
class ClassName:
    <文-1>
    .
    .
    .
    <文-N>
```

関数定義 (`def` 文) と同様、クラス定義が効果をもつにはまず実行しなければなりません。(クラス定義を `if` 文の分岐先や関数内部に置くことも、考え方としてはありえます。)

実際には、クラス定義の内側にある文は、通常は関数定義になりますが、他の文を書くこともでき、それが役に立つこともあります — これについては後で述べます。クラス内の関数定義は通常、メソッドの呼び出し規約で決められた独特の形式の引数リストを持ちます — これについても後で述べます。

クラス定義に入ると、新たな名前空間が作成され、ローカルな名前空間として使われます — 従って、ローカルな変数に対する全ての代入はこの新たな名前空間に入ります。特に、関数定義を行うと、新たな関数の名前はこの名前空間に結び付けられます。

クラス定義から普通に (定義の終端に到達して) 抜けると、クラスオブジェクト (*class object*) が生成されます。クラスオブジェクトは、基本的にはクラス定義で作成された名前空間の内容をくるむラッパ (wrapper) です。クラスオブジェクトについては次の節で詳しく学ぶことにします。(クラス定義に入る前に有効だった元のローカルスコープが復帰し、生成されたクラスオブジェクトは復帰したローカルスコープにクラス定義のヘッダで指定した名前 (上の例では `ClassName`) で結び付けられます。

9.3.2 クラスオブジェクト

クラス・オブジェクトでは2種類の演算、属性参照とインスタンス生成をサポートしています。

属性参照 (*attribute reference*) は、Python におけるすべての属性参照で使われている標準的な構文、`obj.name` を使います。クラスオブジェクトが生成された際にクラスの名前空間にあった名前すべてが有効な属性名です。従って、以下のようなクラス定義では、

```
class MyClass:
    """A simple example class"""
    i = 12345
    def f(self):
        return 'hello world'
```

`MyClass.i` と `MyClass.f` は妥当な属性参照であり、それぞれ整数と関数オブジェクトを返します。クラス属性に代入を行うこともできます。従って、`MyClass.i` の値を代入して変更できます。`__doc__` も有効な属性で、そのクラスに属している docstring、この場合は `"A simple example class"` を返します。

クラスの インスタンス生成 (*instantiation*) には関数のような表記法を使います。クラスオブジェクトのことを、単にクラスの新しいインスタンスを返すパラメータを持たない関数かのように扱います。例えば (上記のクラスでいえば)、

```
x = MyClass()
```

は、クラスの新しいインスタンス (*instance*) を生成し、そのオブジェクトをローカル変数 `x` へ代入します。

このクラスのインスタンス生成操作 (クラスオブジェクトの “呼出し”) を行うと、空のオブジェクトを生成します。多くのクラスは、オブジェクトを作成する際に、カスタマイズされた特定の初期状態になってほ

しいと望んでいます。そのために、クラスには `__init__()` という名前の特別なメソッド定義することができます。例えば次のようにします。

```
def __init__(self):
    self.data = []
```

クラスが `__init__()` メソッドを定義している場合、クラスのインスタンスを生成すると、新しく生成されたクラスインスタンスに対して自動的に `__init__()` を呼び出します。従って、この例では、新たな初期済みのインスタンスを次のようにして得ることができます。

```
x = MyClass()
```

もちろん、より大きな柔軟性を持たせるために、`__init__()` メソッドに複数の引数をもたせることができます。その場合、次の例のように、クラスのインスタンス生成操作に渡された引数は `__init__()` に渡されます。

```
>>> class Complex:
...     def __init__(self, realpart, imagpart):
...         self.r = realpart
...         self.i = imagpart
...
>>> x = Complex(3.0, -4.5)
>>> x.r, x.i
(3.0, -4.5)
```

9.3.3 インスタンスオブジェクト

ところで、インスタンスオブジェクトを使うと何ができるのでしょうか？インスタンスオブジェクトが理解できる唯一の操作は、属性の参照です。有効な属性の名前には二種類（データ属性およびメソッド）あります。

データ属性 (*data attribute*) は、これは Smalltalk の“インスタンス変数”や C++ の“データメンバ”に相当します。データ属性を宣言する必要はありません。ローカルな変数と同様に、これらの属性は最初に代入された時点で湧き出てきます。例えば、上で生成した `MyClass` のインスタンス `x` に対して、次のコードを実行すると、値 16 を印字し、`x` の痕跡は残りません。

```
x.counter = 1
while x.counter < 10:
    x.counter = x.counter * 2
print x.counter
del x.counter
```

もうひとつのインスタンス属性はメソッド (*method*) です。メソッドとは、オブジェクトに“属している”関数のことです。(Python では、メソッドという用語はクラスインスタンスだけのものではありません。オブジェクト型にもメソッドを持つことができます。例えば、リストオブジェクトには、`append`, `insert`, `remove`, `sort` などといったメソッドがあります。とはいえ、以下では特に明記しない限り、クラスのインスタンスオブジェクトのメソッドだけを意味するものとして使うことにします。)

インスタンスオブジェクトで有効なメソッド名は、そのクラスによります。定義により、クラスの全ての関数オブジェクトである属性がインスタンスオブジェクトの妥当なメソッド名に決まります。従って、例では、`MyClass.f` は関数なので、`x.f` はメソッドの参照として有効です。しかし、`MyClass.i` は関数ではないので、`x.i` はメソッドの参照として有効ではありません。`x.f` は `MyClass.f` と同じものではありません — 関数オブジェクトではなく、メソッドオブジェクト (*method object*) です。

9.3.4 メソッドオブジェクト

普通、メソッドはバインドされた直後に呼び出されます。

```
x.f()
```

MyClass の例では、上のコードは文字列 'hello world' を返すでしょう。しかしながら、必ずしもメソッドをその場で呼び出さなければならないわけではありません。 `x.f` はメソッドオブジェクトであり、どこかに記憶しておいて後で呼び出すことができます。例えば次のコードは、

```
xf = x.f
while True:
    print xf()
```

hello world を時が終わるまで印字し続けるでしょう。

メソッドが呼び出されるときには実際には何が起きているのでしょうか？ `f()` の関数定義では引数を一つ指定していたにもかかわらず、上の例では `x.f` が引数なしで呼び出されています。引数はどうなったのでしょうか？ たしか、引数が必要な関数を引数無しで呼び出すと、Python が例外を送出するはずですが — たえその引数が実際には使われなくても…。

もう答は想像できているかもしれませんね。メソッドについて特別なこととして、オブジェクトが関数の第 1 引数として渡されます。例では、`x.f()` という呼び出しは、`MyClass.f(x)` と厳密に等価なものです。一般に、 n 個の引数リストもったメソッドの呼出しは、そのメソッドのオブジェクトを最初の引数の前に挿入した引数リストでメソッドに対応する関数を呼び出すことと等価です。

もしまだメソッドの動作を理解できなければ、一度実装を見てみると事情がよく分かるかもしれません。データ属性ではないインスタンス属性が参照された時は、そのクラスが検索されます。その名前が有効なクラス属性を表している関数オブジェクトなら、インスタンスオブジェクトと見つかった関数オブジェクト（へのポインタ）を抽象オブジェクト、すなわちメソッドオブジェクトにバックして作成します。メソッドオブジェクトが引数リストと共に呼び出されるとき、インスタンスオブジェクトと渡された引数リストから新しい引数リストを作成して、元の関数オブジェクトを新しい引数リストで呼び出します。

9.4 いろいろな注意点

データ属性は同じ名前のメソッド属性を上書きしてしまいます。大規模なプログラムでみつけにくいバグを引き起こすことがあるこの偶然的な名前の衝突を避けるには、衝突の可能性を最小限にするような規約を使うのが賢明です。可能な規約としては、メソッド名を大文字で始める、データ属性名の先頭に短い一意な文字列（あるいはただの下線）をつける、またメソッドには動詞、データ属性には名詞を用いる、などがあります。

データ属性は、メソッドから参照できると同時に、通常のオブジェクトのユーザ（“クライアント”）からも参照できます。言い換えると、クラスは純粹な抽象データ型として使うことができません。実際、Python では、データ隠蔽を補強するための機構はなにもありません — データの隠蔽はすべて規約に基づいています。（逆に、C 言語で書かれた Python の実装では実装の詳細を完全に隠蔽し、必要に応じてオブジェクトへのアクセスを制御できます。この機構は C 言語で書かれた Python 拡張で使うことができます。）

クライアントはデータ属性を注意深く扱うべきです — クライアントは、メソッドが維持しているデータ属性の不変性を踏みにじり、台無しにするかもしれません。クライアントは、名前の衝突が回避されている

限り、メソッドの有効性に影響を及ぼすことなくインスタンスに独自の属性を追加することができる、ということに注意してください — ここでも、名前付けの規約は頭痛の種を無くしてくれます。

メソッドの中から、データ属性を (または別のメソッドも!) 参照するための短縮された記法はありません。私は、この仕様がメソッドの可読性を高めていると感じています。あるメソッドを眺めているときにローカルな変数とインスタンス変数をはっきり区別できるからです。

よく、メソッドの最初の引数を `self` と呼びます。この名前付けは単なる慣習でしかありません。 `self` という名前は、Python では何ら特殊な意味を持ちません。とはいえ、この慣行に従わないと、コードは他の Python プログラマにとってやや読みにくいものとなります。また、クラスブラウザ (*class browser*) プログラムがこの慣行をあてにして書かれているかもしれません。

クラス属性である関数オブジェクトはいずれも、そのクラスのインスタンスのためのメソッドを定義しています。関数定義は、テキスト上でクラス定義の中に入っている必要はありません。関数オブジェクトをクラスのローカルな変数の中に代入するのも OK です。例えば以下のコードのようにします。

```
# クラスの外側で定義された関数
def f1(self, x, y):
    return min(x, x+y)

class C:
    f = f1
    def g(self):
        return 'hello world'
    h = g
```

これで、`f`、`g`、および `h` は、すべて `C` の属性であり関数オブジェクトを参照しています。従って、これら全ては、`C` のインスタンスのメソッドとなります — `h` は `g` と全く等価です。これを実践しても、大抵は単にプログラムの読者に混乱をもたらすだけなので注意してください。

メソッドは、`self` 引数のメソッド属性を使って、他のメソッドを呼び出すことができます。

```
class Bag:
    def __init__(self):
        self.data = []
    def add(self, x):
        self.data.append(x)
    def addtwice(self, x):
        self.add(x)
        self.add(x)
```

メソッドは、通常、関数と同じようにしてグローバルな名前を参照します。(クラス自体はグローバルなスコープとして用いられることはありません。) メソッドでグローバルなデータを使う良い理由はほとんどありませんが、グローバルなスコープを使うべき場面は多々あります。一つ挙げると、メソッド内から、グローバルなスコープに `import` された関数やモジュールや、そのモジュール中で定義された関数やクラスを使うことができます。通常、メソッドの入っているクラス自体はグローバルなスコープ内で定義されています。次の節では、メソッドが自分のクラスを参照する理由として正当なものを見てみましょう。

個々の値はオブジェクトなので、クラス (型 とも言います) を持っています。それは `object.__class__` に保持されています。

9.5 継承

言うまでもなく、継承の概念をサポートしない言語機能は“クラス”と呼ぶに値しません。派生クラス (derived class) を定義する構文は次のようになります。

```
class DerivedClassName (BaseClassName) :  
    <文-1>  
    .  
    .  
    .  
    <文-N>
```

基底クラス (base class) の名前 `BaseClassName` は、派生クラス定義の入っているスコープで定義されていなければなりません。基底クラス名のかわりに任意の式を入れることもできます。これは次の例のように、基底クラスが別モジュールで定義されているときに便利ことがあります。

```
class DerivedClassName (modname.BaseClassName) :
```

派生クラス定義の実行は、基底クラスの場合と同じように進められます。クラスオブジェクトが構築される時、基底クラスが記憶されます。記憶された基底クラスは、属性参照を解決するために使われます。要求された属性がクラスに見つからなかった場合、基底クラスに検索が進みます。この規則は、基底クラスが他の何らかのクラスから派生したものであった場合、再帰的に適用されます。

派生クラスのインスタンス化では、特別なことは何もありません。`DerivedClassName()` はクラスの新たなインスタンスを生成します。メソッドの参照は次のようにして解決されます。まず対応するクラス属性が検索されます。検索は、必要に応じ、基底クラス連鎖を下って行われ、検索の結果として何らかの関数オブジェクトがもたらされた場合、メソッド参照は有効なものとなります。

派生クラスは基底クラスのメソッドを上書き (override) することができます。メソッドは同じオブジェクトの別のメソッドを呼び出す際に何ら特殊な権限を持ちません。このため、ある基底クラスのメソッドが、同じ基底クラスで定義されているもう一つのメソッド呼び出しを行っている場合、派生クラスで上書きされた何らかのメソッドが呼び出されることになるかもしれません。(C++ プログラマへ: Python では、すべてのメソッドは事実上 virtual です。)

派生クラスで上書きしているメソッドでは、基底クラスの同名のメソッドを置き換えるのではなく、拡張したいのかもしれませんが。基底クラスのメソッドを直接呼び出す簡単な方法があります。単に `BaseClassName.methodname(self, arguments)` を呼び出すだけです。この仕様は、場合によってはクライアントでも役に立ちます。(この呼び出し方が動作するのは、基底クラスがグローバルスコープの `BaseClassName` という名前でアクセスできるときだけです。)

Python には継承に関係する 2 つの組み込み関数があります。

- `isinstance()` を使うとインスタンスの型が調べられます。`isinstance(obj, int)` は `obj.__class__` が `int` や `int` の派生クラスの場合に限り `True` になります。
- `issubclass()` を使うとクラスの継承関係が調べられます。`bool` は `int` のサブクラスなので `issubclass(bool, int)` は `True` です。しかし、`unicode` は `str` のサブクラスではない(単に共通の祖先 `basestring` を共有している)ので `issubclass(unicode, str)` は `False` です。

9.5.1 多重継承

Python では、限られた形式の多重継承 (multiple inheritance) もサポートしています。複数の基底クラスをもつクラス定義は次のようになります。

```
class DerivedClassName(Base1, Base2, Base3):
    <文-1>
    .
    .
    .
    <文-N>
```

旧形式のクラスでは、名前解決規則は単に、深さ優先、左から右へ、だけです。従って、ある属性が `DerivedClassName` で見つからなければ `Base1` で検索され、次に `Base1` の基底クラスで (再帰的に) 検索されます。それでも見つからなければじめて `Base2` で検索される、といった具合です。

(人によっては、幅優先 (breadth first) — `Base2` と `Base3` を検索してから `Base1` の基底クラスで検索する — のほうが自然に思うかもしれません。しかしながら、幅優先の検索では、`Base1` の特定の属性のうち、実際に定義されているのが `Base1` なのか、その基底クラスなのかを知らなければ、`Base2` の属性との名前衝突がどんな結果をもたらすのか分からないことになります。深さ優先規則では、`Base1` の直接の属性と継承された属性とを区別しません。)

新スタイルクラス (*new-style class*) では、協調的な `super()` の呼び出しのためにメソッドの解決順序は動的に変更されます。このアプローチは他の多重継承のある言語で `call-next-method` として知られており、単一継承しかない言語の `super` 呼び出しよりも強力です。

新形式のクラスについて、多重継承の全ての場合に 1 つかそれ以上のダイヤモンド継承 (少なくとも 1 つの祖先クラスに対し最も下のクラスから到達する経路が複数ある状態) があるので、動的順序付けが必要です。例えば、全ての新形式のクラスは `object` を継承しているので、どの多重継承でも `object` へ到達するための道は複数存在します。基底クラスが複数回アクセスされないようにするために、動的アルゴリズムで検索順序を直列化し、各クラスで指定されている祖先クラスどうしの左から右への順序は崩さず、各祖先クラスを一度だけ呼び出し、かつ一様になる (つまり祖先クラスの順序に影響を与えずにサブクラス化できる) ようにします。まとめると、これらの特徴のおかげで信頼性と拡張性のある多重継承したクラスを設計することができるのです。さらに詳細を知りたいければ、<http://www.python.org/download/releases/2.3/mro/> を見てください。

9.6 プライベート変数

オブジェクトの中からしかアクセス出来ない“プライベート”インスタンス変数は、Python にはありません。しかし、ほとんどの Python コードが従っている慣習があります。アンダースコアで始まる名前 (例えば `_spam`) は、(関数であれメソッドであれデータメンバであれ) 非 public な API として扱います。これらは、予告なく変更されるかもしれない実装の詳細として扱われるべきです。

クラスのプライベートメンバについて適切なユースケース (特にサブクラスで定義された名前との衝突を避ける場合) があるので、マングリング (*name mangling*) と呼ばれる、限定されたサポート機構があります。`__spam` (先頭に二個以上の下線文字、末尾に一個以下の下線文字) という形式の識別子は、`__classname__spam` へとテキスト置換されるようになりました。ここで `classname` は、現在のクラス名から先頭の下線文字をはぎとった名前になります。このような難号化 (mangle) は、識別子の文法的な位置にかかわらず行われるので、クラス定義内に現れた識別子全てに対して実行されます。

難号化の規則は主に不慮の事故を防ぐためのものだということに注意してください; 確信犯的な方法で、プライベートとされている変数にアクセスしたり変更することは依然として可能なのです。デバッガのような特殊な状況では、この仕様は便利ですらあります。

`exec` や `eval()` や `execfile()` へ渡されたコードでは、呼出し元のクラス名を現在のクラスと見なさないことに注意してください。この仕様は `global` 文の効果と似ており、その効果もまた同様に、バイトコンパイルされたコードに制限されています。同じ制約が `getattr()` と `setattr()` と `delattr()` にも適用されます。また、`__dict__` を直接参照するときにも適用されます。

9.7 残りのはしばし

Pascal の“レコード (record)”や、C 言語の“構造体 (struct)”のような、名前付きのデータ要素を一まとめにするデータ型があると便利ことがあります。空のクラス定義を使うとうまくできます。

```
class Employee:
    pass

john = Employee() # 空の従業員レコードを造る

# レコードのフィールドを設定する
john.name = 'John Doe'
john.dept = 'computer lab'
john.salary = 1000
```

ある特定の抽象データ型を要求する Python コードの断片に、そのデータ型のメソッドをエミュレーションするクラスを代わりに渡すことができます。例えば、ファイルオブジェクトから何らかのデータを構築する関数がある場合、`read()` と `readline()` を持つクラスを定義して、ファイルではなく文字列バッファからデータを取得するようにしておき、引数として渡すことができます。

インスタンスメソッドオブジェクトにも属性があります。`m.im_self` はメソッド `m()` の属しているインスタンスオブジェクトで、`m.im_func` はメソッドに対応する関数オブジェクトです。

9.7.1 例外はクラスであってもよい

ユーザ定義の例外をクラスとして識別することもできます。このメカニズムを使って、拡張可能な階層化された例外を作成することができます。

新しい二つの (意味付け的な) 形式の `raise` 文があります。

```
raise Class, instance

raise instance
```

第一の形式では、`instance` は `Class` またはその派生クラスのインスタンスでなければなりません。第二の形式は以下の表記の短縮された記法です。

```
raise instance.__class__, instance
```

`except` 節のクラスは、例外と同じクラスが基底クラスのとくに互換 (compatible) となります。(逆方向では成り立ちません — 派生クラスの例外がリストされている `except` 節は基底クラスの例外と互換ではありません)。例えば、次のコードは、B, C, D を順序通りに出力します。

```

class B:
    pass
class C(B):
    pass
class D(C):
    pass

for cls in [B, C, D]:
    try:
        raise cls()
    except D:
        print "D"
    except C:
        print "C"
    except B:
        print "B"

```

except 節が逆に並んでいた場合 (except B が最初にくる場合)、B, B, B と出力されるはずだったことに注意してください — 最初に一致した except 節が駆動されるのです。

処理されないクラスの例外に対してエラーメッセージが出力されるとき、まずクラス名が出力され、続いてコロン、スペース、最後に組み込み関数 `str()` を使って文字列に変換したインスタンスが出力されます。

9.8 イテレータ (iterator)

すでに気づいているでしょうが、`for` 文を使うとほとんどのコンテナオブジェクトにわたってループを行うことができます。

```

for element in [1, 2, 3]:
    print element
for element in (1, 2, 3):
    print element
for key in {'one':1, 'two':2}:
    print key
for char in "123":
    print char
for line in open("myfile.txt"):
    print line

```

こうしたアクセス方法は明確で、簡潔で、かつ便利なものです。イテレータの使用は Python 全体に普及していて、統一性をもたらしています。背後では、`for` 文はコンテナオブジェクトの `iter()` を呼び出しています。この関数は `next()` メソッドの定義されたイテレータオブジェクトを返します。`next()` メソッドは一度コンテナ内の要素に一度に一つずつアクセスします。コンテナ内にアクセスすべき要素がなくなると、`next()` は `StopIteration` 例外を送出し、`for` ループを終了させます。実際にどのように動作するかを以下の例に示します。

```

>>> s = 'abc'
>>> it = iter(s)
>>> it
<iterator object at 0x00A1DB50>
>>> it.next()
'a'
>>> it.next()
'b'
>>> it.next()
'c'

```

```
>>> it.next()
```

```
Traceback (most recent call last):
  File "<stdin>", line 1, in ?
    it.next()
StopIteration
```

イテレータプロトコルの背後にあるメカニズムを一度目にすれば、自作のクラスにイテレータとしての振る舞いを追加するのは簡単です。__iter__() メソッドを定義して、next() メソッドを持つオブジェクトを返すようにしてください。クラス自体で next() を定義している場合、__iter__() では単に self を返すようにできます。

```
class Reverse:
    "Iterator for looping over a sequence backwards"
    def __init__(self, data):
        self.data = data
        self.index = len(data)
    def __iter__(self):
        return self
    def next(self):
        if self.index == 0:
            raise StopIteration
        self.index = self.index - 1
        return self.data[self.index]
```

```
>>> rev = Reverse('spam')
>>> iter(rev)
<__main__.Reverse object at 0x00A1DB50>
>>> for char in rev:
...     print char
...
m
a
p
s
```

9.9 ジェネレータ (generator)

ジェネレータ (*generator*) は、イテレータを作成するための簡潔で強力なツールです。ジェネレータは通常、関数のように書かれますが、何らかのデータを返すときには `yield` 文を使います。next() が呼び出されるたびに、ジェネレータは以前に中断した処理を再開します (ジェネレータは、全てのデータ値と最後にどの文が実行されたかを記憶しています)。以下の例を見れば、ジェネレータがとても簡単に作成できることがわかります。

```
def reverse(data):
    for index in range(len(data)-1, -1, -1):
        yield data[index]

>>> for char in reverse('golf'):
...     print char
...
f
l
o
g
```

ジェネレータを使ってできることは、前節で記述したクラスベースのイテレータを使ってもできます。ジェネレータを使うとコンパクトに記述できるのは、`__iter__()` と `next()` メソッドが自動的に作成されるからです。

ジェネレータのもう一つの重要な機能は、呼び出しごとにローカル変数と実行状態が自動的に保存されるということです。これにより、`self.index` や `self.data` といったインスタンス変数を使ったアプローチよりも簡単に関数を書くことができるようになります。

メソッドを自動生成したりプログラムの実行状態を自動保存するほかに、ジェネレータは終了時に自動的に `StopIteration` を送出します。これらの機能を組み合わせると、通常の間関数を書くのと同じ労力で、簡単にイテレータを生成できます。

9.10 ジェネレータ式

単純なジェネレータなら、式を使って簡潔にコードする方法があります。リスト内包に似た構文の式ですが、各括弧ではなく丸括弧を使います。ジェネレータ式は、関数の中でジェネレータをすぐに使いたいような状況のために用意されています。ジェネレータ式はコンパクトですが、完全なジェネレータに比べてちょっと融通の効かないところがありますが、同じ内容を返すリスト内包よりはメモリに優しいことが多いという利点があります。

例:

```
>>> sum(i*i for i in range(10))           # 平方和を求める
285

>>> xvec = [10, 20, 30]
>>> yvec = [7, 5, 3]
>>> sum(x*y for x,y in zip(xvec, yvec))   # 内積を求める
260

>>> from math import pi, sin
>>> sine_table = dict((x, sin(x*pi/180)) for x in range(0, 91))

>>> unique_words = set(word for line in page for word in line.split())

>>> valedictorian = max((student.gpa, student.name) for student in graduates)

>>> data = 'golf'
>>> list(data[i] for i in range(len(data)-1,-1,-1))
['f', 'l', 'o', 'g']
```

標準ライブラリミニツアー

10.1 OS へのインタフェース

os モジュールは、オペレーティングシステムと対話するための何ダースもの関数を提供しています。

```
>>> import os
>>> os.system('time 0:02')
0
>>> os.getcwd()          # 現在の作業ディレクトリを返す
'C:\\Python26'
>>> os.chdir('/server/accesslogs')
```

from os import * ではなく、import os 形式を使うようにしてください。そうすることで、動作が大きく異なる組み込み関数 open() が os.open() で隠蔽されるのを避けられます。

組み込み関数 dir() および help() は、os のような大規模なモジュールで作業をするときに、対話的な操作上の助けになります。

```
>>> import os
>>> dir(os)
<モジュール内の関数全てを含むリストを返す>
>>> help(os)
<モジュールの docstring から作られた広範囲に渡るマニュアルページを返す>
```

ファイルやディレクトリの日常的な管理作業のために、より簡単に使える高レベルインタフェースが shutil モジュールで提供されています。

```
>>> import shutil
>>> shutil.copyfile('data.db', 'archive.db')
>>> shutil.move('/build/executables', 'installdir')
```

10.2 ファイルのワイルドカード表記

glob モジュールでは、ディレクトリのワイルドカード検索からファイルのリストを生成するための関数を提供しています。

```
>>> import glob
>>> glob.glob('*.py')
['primes.py', 'random.py', 'quote.py']
```

10.3 コマンドライン引数

一般的なユーティリティスクリプトでは、よくコマンドライン引数を扱う必要があります。コマンドライン引数は `sys` モジュールの `argv` 属性にリストとして保存されています。例えば、以下の出力は、`python demo.py one two three` とコマンドライン上で起動した時に得られるものです。

```
>>> import sys
>>> print sys.argv
['demo.py', 'one', 'two', 'three']
```

`getopt` モジュールは、`sys.argv` を Unix の `getopt()` 関数の慣習に従って処理します。より強力で柔軟性のあるコマンドライン処理機能は、`optparse` モジュールで提供されています。

10.4 エラー出力のリダイレクトとプログラムの終了

`sys` モジュールには、`stdin`, `stdout`, `stderr` を表す属性も存在します。`stderr` は、警告やエラーメッセージを出力して、`stdout` がリダイレクトされた場合でも読めるようにするために便利です。

```
>>> sys.stderr.write('Warning, log file not found starting a new one\n')
Warning, log file not found starting a new one
```

`sys.exit()` は、スクリプトを終了させるもっとも直接的な方法です。

10.5 文字列のパターンマッチング

`re` モジュールでは、より高度な文字列処理のための正規表現を提供しています。正規表現は複雑な一致検索や操作に対して簡潔で最適化された解決策を提供します。

```
>>> import re
>>> re.findall(r'\bf[a-z]*', 'which foot or hand fell fastest')
['foot', 'fell', 'fastest']
>>> re.sub(r'(\b[a-z]+) \1', r'\1', 'cat in the the hat')
'cat in the hat'
```

最小限の機能だけが必要ななら、読みやすくデバッグしやすい文字列メソッドの方がお勧めです。

```
>>> 'tea for too'.replace('too', 'two')
'tea for two'
```

10.6 数学

`math` モジュールは、浮動小数点演算のための C 言語ライブラリ関数にアクセスする手段を提供しています。

```
>>> import math
>>> math.cos(math.pi / 4.0)
0.70710678118654757
>>> math.log(1024, 2)
10.0
```

random モジュールは、乱数に基づいた要素選択のためのツールを提供しています。

```
>>> import random
>>> random.choice(['apple', 'pear', 'banana'])
'apple'
>>> random.sample(xrange(100), 10)    # 要素を戻さないサンプリング
[30, 83, 16, 4, 8, 81, 41, 50, 18, 33]
>>> random.random()                  # ランダムな浮動小数点数
0.17970987693706186
>>> random.randrange(6)              # range(6) からランダムに選ばれた整数
4
```

10.7 インターネットへのアクセス

インターネットにアクセスしたり、インターネットプロトコルを処理したりするための数多くのモジュールがあります。その中でも特にシンプルなモジュールとして、URL を指定してデータを取得するための `urllib2` と、メールを送信するための `smtplib` があります。

```
>>> import urllib2
>>> for line in urllib2.urlopen('http://tycho.usno.navy.mil/cgi-bin/timer.pl'):
...     if 'EST' in line or 'EDT' in line:      # EST (東部標準時) を見る
...         print line
```

```
<BR>Nov. 25, 09:43:32 PM EST
```

```
>>> import smtplib
>>> server = smtplib.SMTP('localhost')
>>> server.sendmail('soothsayer@example.org', 'jcaesar@example.org',
... """To: jcaesar@example.org
... From: soothsayer@example.org
...
... Beware the Ides of March.
... """)
>>> server.quit()
```

(2 つ目の例は localhost でメールサーバーが動いている必要があることに注意してください。)

10.8 日付と時刻

`datetime` モジュールは、日付や時刻を操作するためのクラスを、単純な方法と複雑な方法の両方で提供しています。日付や時刻に対する算術がサポートされている一方、実装では出力の書式化や操作のための効率的なデータメンバ抽出に重点を置いています。このモジュールでは、タイムゾーンに対応したオブジェクトもサポートしています。

```
>>> # 日付は簡単に生成して書式化することができます。
>>> from datetime import date
>>> now = date.today()
```

```
>>> now
datetime.date(2003, 12, 2)
>>> now.strftime("%m-%d-%y. %d %b %Y is a %A on the %d day of %B")
'12-02-03. 02 Dec 2003 is a Tuesday on the 02 day of December'

>>> # date 型はカレンダー計算をサポートしています。
>>> birthday = date(1964, 7, 31)
>>> age = now - birthday
>>> age.days
14368
```

10.9 データ圧縮

データの書庫化や圧縮で広く使われている形式については、`zlib`, `gzip`, `bz2`, `zipfile`, `tarfile` といったモジュールで直接サポートしています。

```
>>> import zlib
>>> s = 'witch which has which witches wrist watch'
>>> len(s)
41
>>> t = zlib.compress(s)
>>> len(t)
37
>>> zlib.decompress(t)
'witch which has which witches wrist watch'
>>> zlib.crc32(s)
226805979
```

10.10 パフォーマンスの計測

Python ユーザの中には、同じ問題を異なったアプローチで解いた際の相対的なパフォーマンスについて知りたいという深い興味を持っている人がいます。Python は、そういった疑問に即座に答える計測ツールを提供しています。

例えば、引数の入れ替え操作に対して、伝統的なアプローチの代わりにタプルのパックやアンパックを使ってみたいと思うかもしれません。`timeit` モジュールを使えば、パフォーマンスがほんの少し良いことがすぐに分かります。

```
>>> from timeit import Timer
>>> Timer('t=a; a=b; b=t', 'a=1; b=2').timeit()
0.57535828626024577
>>> Timer('a,b = b,a', 'a=1; b=2').timeit()
0.54962537085770791
```

`timeit` では小さい粒度を提供しているのに対し、`profile` や `pstats` モジュールではより大きなコードブロックにおいて律速となる部分を判定するためのツールを提供しています。

10.11 品質管理

高い品質のソフトウェアを開発するための一つのアプローチは、各関数に対して開発と同時にテストを書き、開発の過程で頻繁にテストを走らせるというものです。

doctest モジュールでは、モジュールを検索してプログラムの docstring に埋め込まれたテストの評価を行うためのツールを提供しています。テストの作り方は単純で、典型的な呼び出し例とその結果を docstring にカット&ペーストするだけです。この作業は、ユーザに使用例を与えるという意味でドキュメントの情報を増やすと同時に、ドキュメントに書かれているコードが正しい事を確認できるようになります。

```
def average(values):
    """Computes the arithmetic mean of a list of numbers.

    >>> print average([20, 30, 70])
    40.0
    """
    return sum(values, 0.0) / len(values)
```

```
import doctest
doctest.testmod()    # 組み込まれたテストを自動的に検証する。
```

unittest モジュールは doctest モジュールほど気楽に使えるものではありませんが、より網羅的なテストセットを別のファイルで管理することができます。

```
import unittest

class TestStatisticalFunctions(unittest.TestCase):

    def test_average(self):
        self.assertEqual(average([20, 30, 70]), 40.0)
        self.assertEqual(round(average([1, 5, 7]), 1), 4.3)
        self.assertRaises(ZeroDivisionError, average, [])
        self.assertRaises(TypeError, average, 20, 30, 70)

unittest.main() # コマンドラインから呼び出すと全てのテストを実行する。
```

10.12 バッテリー同梱

Python には“バッテリー同梱 (batteries included)”哲学があります。この哲学は、洗練され、安定した機能を持つ Python の膨大なパッケージ群に如実に表れています。例えば、

- The `xmlrpclib` および `SimpleXMLRPCServer` モジュールは、遠隔手続き呼び出し (remote procedure call) を全く大したことの無い作業に変えてしまいます。モジュール名とは違い、XML を扱うための直接的な知識は必要ありません。
- The `email` パッケージは、MIME やその他の RFC 2822 に基づくメッセージ文書を含む電子メールメッセージを管理するためのライブラリです。実際にメッセージを送信したり受信したりする `smtplib` や `poplib` と違って、`email` パッケージには (添付文書を含む) 複雑なメッセージ構造の構築やデコードを行ったり、インターネット標準のエンコードやヘッダプロトコルの実装を行ったりするための完全なツールセットを備えています。
- `xml.dom` および `xml.sax` パッケージでは、一般的なデータ交換形式である XML を解析するための頑健なサポートを提供しています。同様に、`csv` モジュールでは、広く用いられているデータベース形式のデータを直接読み書きする機能をサポートしています。これらのモジュールやパッケージを利用することで、Python アプリケーションと他のツール群との間でのデータ交換が劇的に簡単になります。
- 国際化に関する機能は、`gettext`, `locale`, `codecs` パッケージといったモジュール群でサポートされています。

標準ライブラリミニツアー – その 2

2 回目のツアーでは、プロフェッショナルプログラミングを支えるもっと高度なモジュールをカバーします。ここで挙げるモジュールは、小さなスクリプトの開発ではほとんど使いません。

11.1 出力のフォーマット

`repr` モジュールは、大きなコンテナや、深くネストしたコンテナを省略して表示するバージョンの `repr()` を提供しています。

```
>>> import repr
>>> repr.repr(set('supercalifragilisticexpialidocious'))
"set(['a', 'c', 'd', 'e', 'f', 'g', ...])"
```

`pprint` モジュールを使うと、組み込み型やユーザ定義型がより洗練された形式で出力されるよう制御できます。出力が複数行にわたる場合には、“pretty printer” が改行を追加して、入れ子構造を理解しやすいようにインデントを挿入します。

```
>>> import pprint
>>> t = [[['black', 'cyan'], 'white', ['green', 'red']], [['magenta',
...     'yellow'], 'blue']]
...
>>> pprint.pprint(t, width=30)
[[['black', 'cyan'],
   'white',
   ['green', 'red']],
 [['magenta', 'yellow'],
  'blue']]
```

`textwrap` モジュールは、一段落の文を指定したスクリーン幅にぴったり収まるように調整します。

```
>>> import textwrap
>>> doc = """The wrap() method is just like fill() except that it returns
... a list of strings instead of one big string with newlines to separate
... the wrapped lines."""
...
>>> print textwrap.fill(doc, width=40)
The wrap() method is just like fill()
except that it returns a list of strings
```

instead of one big string with newlines
to separate the wrapped lines.

locale モジュールは、文化ごとに特化したデータ表現形式のデータベースにアクセスします。locale の format() 関数の grouping 属性を使えば、数値の各桁を適切な区切り文字でグループ化してフォーマットできます。

```
>>> import locale
>>> locale.setlocale(locale.LC_ALL, 'English_United States.1252')
'English_United States.1252'
>>> conv = locale.localeconv()           # get a mapping of conventions
>>> x = 1234567.8
>>> locale.format("%d", x, grouping=True)
'1,234,567'
>>> locale.format_string("%s%.*f", (conv['currency_symbol'],
...                               conv['frac_digits'], x), grouping=True)
'$1,234,567.80'
```

11.2 文字列テンプレート

string モジュールには、柔軟で、エンドユーザが簡単に編集できる簡単な構文を備えた Template クラスが入っています。このクラスを使うと、ユーザがアプリケーションを修正することなしにアプリケーションの出力をカスタマイズできるようになります。

テンプレートでは、\$ と有効な Python 識別子名 (英数字とアンダースコア) からなるプレースホルダ名を使います。プレースホルダの周りを丸括弧で囲えば、間にスペースをはさまなくても後ろに英数文字が続けられます。\$\$ のようにすると、\$ 自体をエスケープできます。

```
>>> from string import Template
>>> t = Template('${village}folk send $$10 to $cause.')
>>> t.substitute(village='Nottingham', cause='the ditch fund')
'Nottinghamfolk send $10 to the ditch fund.'
```

substitute() メソッドは、プレースホルダに相当する値が辞書やキーワード引数にない場合に KeyError を送出します。メールマージ型アプリケーションの場合、ユーザが入力するデータは不完全なことがあるので、欠落したデータがあるとプレースホルダをそのままにして出力する safe_substitute() メソッドを使う方が適切でしょう。

```
>>> t = Template('Return the $item to $owner.')
>>> d = dict(item='unladen swallow')
>>> t.substitute(d)
Traceback (most recent call last):
...
KeyError: 'owner'
>>> t.safe_substitute(d)
'Return the unladen swallow to $owner.'
```

Template をサブクラス化すると、区切り文字を自作できます。例えば、画像ブラウザ用にバッチで名前を変更するユーティリティを作っていたとして、現在の日付や画像のシーケンス番号、ファイル形式といったプレースホルダにパーセント記号を選んだとします。

```
>>> import time, os.path
>>> photofiles = ['img_1074.jpg', 'img_1076.jpg', 'img_1077.jpg']
>>> class BatchRename(Template):
```

```

...     delimiter = '%'
>>> fmt = raw_input('Enter rename style (%d-date %n-seqnum %f-format): ')
Enter rename style (%d-date %n-seqnum %f-format): Ashley_%n%f

>>> t = BatchRename(fmt)
>>> date = time.strftime('%d%b%y')
>>> for i, filename in enumerate(photofiles):
...     base, ext = os.path.splitext(filename)
...     newname = t.substitute(d=date, n=i, f=ext)
...     print '{0} --> {1}'.format(filename, newname)

img_1074.jpg --> Ashley_0.jpg
img_1076.jpg --> Ashley_1.jpg
img_1077.jpg --> Ashley_2.jpg

```

テンプレートのもう一つの用途は、複数ある出力様式からのプログラムロジックの分離です。テンプレートを使えば、カスタムのテンプレートを XML ファイル用や平文テキストのレポート、HTML で書かれた web レポート用などに置き換えられます。

11.3 バイナリデータレコードの操作

struct モジュールでは、可変長のバイナリレコード形式を操作する pack() や unpack() といった関数を提供しています。以下の例では、zipfile モジュールを使わずに、ZIP ファイルのヘッダ情報を巡回する方法を示しています。"H" と "I" というパック符号は、それぞれ 2 バイトと 4 バイトの符号無し整数を表しています。"<" は、そのパック符号が通常のサイズであり、バイトオーダーがリトルエンディアンであることを示しています。

```

import struct

data = open('myfile.zip', 'rb').read()
start = 0
for i in range(3):                                # 最初の 3 ファイルのヘッダを表示する
    start += 14
    fields = struct.unpack('<IIIHH', data[start:start+16])
    crc32, comp_size, uncomp_size, filenamesize, extra_size = fields

    start += 16
    filename = data[start:start+filenamesize]
    start += filenamesize
    extra = data[start:start+extra_size]
    print filename, hex(crc32), comp_size, uncomp_size

    start += extra_size + comp_size                # 次のヘッダまでスキップする。

```

11.4 マルチスレッド処理

スレッド処理 (threading) とは、順序的な依存関係にない複数のタスクを分割するテクニックです。スレッドは、ユーザの入力を受け付けつつ、背後で別のタスクを動かすようなアプリケーションの応答性を高めます。主なユースケースには、I/O を別のスレッドの計算処理と並列して動作させるというものがあります。

以下のコードでは、高水準のモジュール threading でメインのプログラムを動かしながら背後で別のタスクを動作させられるようにする方法を示しています。

```
import threading, zipfile

class AsyncZip(threading.Thread):
    def __init__(self, infile, outfile):
        threading.Thread.__init__(self)
        self.infile = infile
        self.outfile = outfile
    def run(self):
        f = zipfile.ZipFile(self.outfile, 'w', zipfile.ZIP_DEFLATED)
        f.write(self.infile)
        f.close()
        print 'Finished background zip of: ', self.infile

background = AsyncZip('mydata.txt', 'myarchive.zip')
background.start()
print 'The main program continues to run in foreground.'

background.join()    # Wait for the background task to finish
print 'Main program waited until background was done.'
```

マルチスレッドアプリケーションを作る上で最も難しい問題は、データやリソースを共有するスレッド間の調整 (coordination) です。この問題を解決するため、`threading` モジュールではロックやイベント、状態変数、セマフォといった数々の同期プリミティブを提供しています。

こうしたツールは強力な一方、ちょっとした設計上の欠陥で再現困難な問題を引き起こすことがあります。したがって、タスク間調整では `Queue` モジュールを使って他のスレッドから一つのスレッドにリクエストを送り込み、一つのリソースへのアクセスをできるだけ一つのスレッドに集中させるアプローチを勧めます。スレッド間の通信や調整に `Queue.Queue` オブジェクトを使うと、設計が容易になり、可読性が高まり、信頼性が増します。

11.5 ログ記録

`logging` モジュールでは、数多くの機能をそなえた柔軟性のあるログ記録システムを提供しています。最も簡単な使い方では、ログメッセージをファイルや `sys.stderr` に送信します。

```
import logging
logging.debug('Debugging information')
logging.info('Informational message')
logging.warning('Warning:config file %s not found', 'server.conf')
logging.error('Error occurred')
logging.critical('Critical error -- shutting down')
```

上記のコードは以下のような出力になります:

```
WARNING:root:Warning:config file server.conf not found
ERROR:root:Error occurred
CRITICAL:root:Critical error -- shutting down
```

デフォルトでは、単なる情報やデバッグメッセージの出力は抑制され、出力は標準エラーに送信されます。選択可能な送信先には、email、データグラム、ソケット、HTTP サーバへの送信などがあります。新たにフィルタを作成すると、`DEBUG`、`INFO`、`WARNING`、`ERROR`、`CRITICAL` といったメッセージのプライオリティに従って配送先を変更できます。

ログ記録システムは Python から直接設定できますし、アプリケーションを変更しなくてもカスタマイズできるよう、ユーザが編集できる設定ファイルでも設定できます。

11.6 弱参照

Python は自動的にメモリを管理します (ほとんどのオブジェクトは参照カウント方式で管理し、ガベージコレクション (*garbage collection*) で循環参照を除去します)。オブジェクトに対する最後の参照がなくなっ
てしばらくするとメモリは解放されます。

このようなアプローチはほとんどのアプリケーションでうまく動作しますが、中にはオブジェクトをどこか別の場所で利用している間だけ追跡しておきたい場合もあります。残念ながら、オブジェクトを追跡するだけでオブジェクトに対する恒久的な参照を作ることになってしまいます。weakref モジュールでは、オブジェクトへの参照を作らずに追跡するためのツールを提供しています。弱参照オブジェクトが不要になると、弱参照 (weakref) テーブルから自動的に除去され、コールバック関数がトリガされます。弱参照を使う典型的な応用例には、作成コストの大きいオブジェクトのキャッシュがあります。

```
>>> import weakref, gc
>>> class A:
...     def __init__(self, value):
...         self.value = value
...     def __repr__(self):
...         return str(self.value)
...
>>> a = A(10)                                # 参照を作成する。
>>> d = weakref.WeakValueDictionary()
>>> d['primary'] = a                           # 参照を作成しない。
>>> d['primary']                               # オブジェクトが生きていれば取得する。
10
>>> del a                                     # 参照を 1 つ削除する。
>>> gc.collect()                             # ガベージコレクションを実行する。
0
>>> d['primary']                             # エントリが自動的に削除されている。
Traceback (most recent call last):
  File "<stdin>", line 1, in <module>
    d['primary']                               # entry was automatically removed
  File "C:/python26/lib/weakref.py", line 46, in __getitem__
    o = self.data[key]()
KeyError: 'primary'
```

11.7 リスト操作のためのツール

多くのデータ構造は、組み込みリスト型を使った実装で事足ります。とはいえ、時には組み込みリストとは違うパフォーマンス上のトレードオフを持つような実装が必要になることもあります。

array モジュールでは、同じ形式のデータだけをコンパクトに保存できる、リスト型に似た array() オブジェクトを提供しています。以下の例では、通常 1 要素あたり 16 バイトを必要とする Python 整数型のリストの代りに、2 バイトの符号無し 2 進数 (タイプコード "H") を使っている数値配列を示します。

```
>>> from array import array
>>> a = array('H', [4000, 10, 700, 22222])
>>> sum(a)
26932
>>> a[1:3]
array('H', [10, 700])
```

collections モジュールでは、リスト型に似た deque() オブジェクトを提供しています。deque() オブジェクトでは、データの追加と左端からの取り出しが高速な半面、中間にある値の検索が低速になります。

す。こうしたオブジェクトはキューの実装や幅優先のツリー探索に向いています。

```
>>> from collections import deque
>>> d = deque(["task1", "task2", "task3"])
>>> d.append("task4")
>>> print "Handling", d.popleft()
Handling task1
```

```
unsearched = deque([starting_node])
def breadth_first_search(unsearched):
    node = unsearched.popleft()
    for m in gen_moves(node):
        if is_goal(m):
            return m
        unsearched.append(m)
```

リストの代わりの実装以外にも、標準ライブラリにはソート済みのリストを操作するための関数を備えた `bisect` のようなツールも提供しています。

```
>>> import bisect
>>> scores = [(100, 'perl'), (200, 'tcl'), (400, 'lua'), (500, 'python')]
>>> bisect.insort(scores, (300, 'ruby'))
>>> scores
[(100, 'perl'), (200, 'tcl'), (300, 'ruby'), (400, 'lua'), (500, 'python')]
```

`heapq` モジュールでは、通常のリストでヒープを実装するための関数を提供しています。ヒープでは、最も低い値をもつエントリがつねにゼロの位置に配置されます。ヒープは、毎回リストをソートすることなく、最小の値をもつ要素に繰り返しアクセスするようなアプリケーションで便利です。

```
>>> from heapq import heapify, heappop, heappush
>>> data = [1, 3, 5, 7, 9, 2, 4, 6, 8, 0]
>>> heapify(data) # rearrange the list into heap order
>>> heappush(data, -5) # add a new entry
>>> [heappop(data) for i in range(3)] # fetch the three smallest entries
[-5, 0, 1]
```

11.8 10 進浮動小数演算

`decimal` では、10 進浮動小数の算術演算をサポートする `Decimal` データ型を提供しています。組み込みの 2 進浮動小数の実装である `float` に比べて、このクラスがとりわけ便利なのは、

- 財務アプリケーションやその他の正確な 10 進表記が必要なアプリケーション、
- 精度の制御、
- 法的または規制上の理由に基づく値丸めの制御、
- 有効桁数の追跡が必要になる場合、
- ユーザが手計算の結果と同じ演算結果を期待するようなアプリケーション

の場合です。

例えば、70 セントの電話代にかかる 5% の税金を計算しようとする、10 進の浮動小数点値と 2 進の浮動小数点値では違う結果になってしまいます。計算結果を四捨五入してセント単位にしようとする、違いがはっきり現れます。

```
>>> from decimal import *
>>> Decimal('0.70') * Decimal('1.05')
Decimal('0.7350')
>>> .70 * 1.05
0.7349999999999999
```

Decimal を使った計算では、末尾桁のゼロが保存されており、有効数字 2 桁の被乗数から自動的に有効数字を 4 桁と判断しています。Decimal は手計算と同じ方法で計算を行い、2 進浮動小数点が 10 進小数成分を正確に表現できないことによって起きる問題を回避しています。

Decimal クラスは厳密な値を表現できるため、2 進浮動小数点数では期待通りに計算できないようなモジロの計算や等値テストも実現できます。

```
>>> Decimal('1.00') % Decimal('.10')
Decimal('0.00')
>>> 1.00 % 0.10
0.09999999999999995

>>> sum([Decimal('0.1')]*10) == Decimal('1.0')
True
>>> sum([0.1]*10) == 1.0
False
```

decimal モジュールを使うと、必要なだけの精度で算術演算を行えます。

```
>>> getcontext().prec = 36
>>> Decimal(1) / Decimal(7)
Decimal('0.142857142857142857142857142857142857')
```

さあ何を？

このチュートリアルを読んだことで、おそらく Python を使ってみようという関心はますます強くなったことでしょう — 現実世界の問題を解決するために、Python を適用してみたくなくなったはずです。さて、それではどこで勉強をしたらよいのでしょうか？

このチュートリアルは Python のドキュメンテーションセットの一部です。セットの中の他のドキュメンテーションをいくつか紹介します。

- *library-index*:

このマニュアルをざっと眺めておくと便利です。このマニュアルは型、関数、標準ライブラリのモジュールについての完全なリファレンスです。標準的な Python 配布物はたくさんの追加コードを含んでいます。Unix メールボックスの読み込み、HTTP によるドキュメント取得、乱数の生成、コマンドラインオプションの構文解析、CGI プログラムの作成、データ圧縮やその他たくさんのタスクのためのモジュールがあります。ライブラリリファレンスをざっと見ることで、何が利用できるかのイメージをつかむことができます。

- *install-index* は、他の Python ユーザによって書かれた外部モジュールをどうやってインストールするかを説明しています。
- *reference-index*: Python の文法とセマンティクスを詳しく説明しています。読むのは大変ですが、言語の完全なガイドとして有用です。

さらなる Python に関するリソース:

- <http://www.python.org>: メインの Python Web サイト。このサイトには、コード、ドキュメント、そして Web のあちこちの Python に関連したページへのポインタがあります。この Web サイトは世界のあちこちのさまざまな場所、例えばヨーロッパ、日本、オーストラリアなどでミラーされています。地理的な位置によっては、メインのサイトよりミラーのほうが速いかもしれません。
- <http://docs.python.org>: Python ドキュメントへの素早いアクセスを提供します。
- <http://pypi.python.org>: Python パッケージインデックス、以前は Cheese Shop という愛称でも呼ばれていました。これは、ユーザ作成のダウンロードできる Python モジュールの索引です。コードのリリースをしたら、ここに登録することで他の人が見つかります。
- <http://aspn.activestate.com/ASPN/Python/Cookbook/>: Python クックブックはコード例、モジュール、実

用的なスクリプトの巨大なコレクションです。主要なものは同名の本 Python Cookbook (O'Reilly & Associates, ISBN 0-596-00797-3.) に収録されています。

Python に関する質問をしたり、問題を報告するために、ニュースグループ `comp.lang.python` に投稿したり、 python-list@python.org のメーリングリストに送信することができます。ニュースグループとメーリングリストは相互接続されているので、どちらかにポストされたメッセージは自動的にもう一方にも転送されます。一日に約 120 通程度 (ピーク時は数百通) の、質問 (とその回答)、新機能の提案、新たなモジュールのアナウンスが投稿されています。投稿する前に、必ず [よく出される質問](#) (Frequently Asked Questions, FAQ とも言います) のリストを確認するか、Python ソースコード配布物の `Misc/` ディレクトリを探すようにしてください。メーリングリストのアーカイブは <http://mail.python.org/pipermail/> で入手することができます。FAQ では、何度も繰り返し現れる質問の多くに答えています。読者の抱えている問題に対する解答がすでに入っているかもしれません。

対話入力編集とヒストリ置換

あるバージョンの Python インタプリタでは、Korn シェルや GNU Bash シェルに見られる機能に似た、現在の入力行に対する編集機能やヒストリ置換機能をサポートしています。この機能は [GNU Readline](#) ライブラリを使って実装されています。このライブラリは Emacs スタイルと vi スタイルの編集をサポートしています。ライブラリには独自のドキュメントがあり、ここでそれを繰り返すつもりはありません。とはいえ、基本について簡単に解説することにした。ここで述べる対話的な編集とヒストリについては、Unix 版と Cygwin 版のインタプリタでオプションとして利用することができます。

この章では、Mark Hammond の PythonWin パッケージや、Python とともに配布される Tk ベースの環境である IDLE にある編集機能については解説しません。NT 上の DOS ボックスやその他の DOS および Windows 類で働くコマンド行ヒストリ呼出しもまた別のものです。

13.1 行編集

入力行の編集がサポートされている場合、インタプリタが一次または二次プロンプトを出力している際にはいつでも有効になっています。現在の行は、慣例的な Emacs 制御文字を使って編集することができます。そのうち最も重要なものとして、次のようなキーがあります。C-A (Control-A) はカーソルを行の先頭へ移動させます。C-E は末尾へ移動させます。C-B は逆方向へ一つ移動させます。C-F は順方向へ移動させます。Backspace は逆方向に向かって文字を消します。C-D は順方向に向かって消します。C-K は順方向に向かって行の残りを kill し (消し) ます、C-Y は最後に kill された文字列を再び yank し (取り出し) ます。C-underscore 最後の変更を元に戻します。これは、繰り返してどんどんさかのぼることができます。

13.2 ヒストリ置換

ヒストリ置換は次のように働きます。入力された行のうち、空行でない実行された行はすべてヒストリバッファに保存されます。そして、プロンプトが提示されるときには、ヒストリバッファの最も下の新たな行に移動します。C-P はヒストリバッファの中を一行だけ上に移動し (戻し) ます。C-N は 1 行だけ下に移動します。ヒストリバッファのどの行も編集することができます。行が編集されると、それを示すためにプロンプトの前にアスタリスクが表示されます¹。Return キーを押すと現在行がインタプリタへ渡されます。

¹ 訳注: これはデフォルト設定の Readline では現れません。set mark-modified-lines on という行を ~/.inputrc または環境変数 INPUTRC が指定するファイルに置くことによって現れるようになります。

C-R はインクリメンタルな逆方向サーチ (reverse search) を開始し、C-S は順方向サーチ (forward search) を開始します。

13.3 キー割り当て

Readline ライブラリのキー割り当て (key binding) やその他のパラメタは、`~/.inputrc` という初期化ファイル² にコマンドを置くことでカスタマイズできます。キー割り当ての形式は

```
key-name: function-name
```

または

```
"string": function-name
```

で、オプションの設定方法は

```
set option-name value
```

です。例えば、以下のように設定します。

```
# vi スタイルの編集を選択する:
set editing-mode vi

# 一行だけを使って編集する:
set horizontal-scroll-mode On

# いくつかのキーを再束縛する:
Meta-h: backward-kill-word
"\C-u": universal-argument
"\C-x\C-r": re-read-init-file
```

Python では、Tab に対するデフォルトの割り当ては TAB の挿入です。Readline のデフォルトであるファイル名補完関数ではないので注意してください。もし、どうしても Readline のデフォルトを割り当てたいのなら、`~/.inputrc` に

```
Tab: complete
```

を入れれば設定を上書きすることができます。(もちろん、Tab を使ってインデントするのに慣れている場合、この設定を行うとインデントされた継続行を入力しにくくなります。)

変数名とモジュール名の自動的な補完がオプションとして利用できます。補完をインタプリタの対話モードで有効にするには、以下の設定をスタートアップファイルに追加します。³

```
import rlcompleter, readline
readline.parse_and_bind('tab: complete')
```

この設定は、Tab キーを補完関数に束縛します。従って、Tab キーを二回たたくと補完候補が示されます。補完機能は Python の文の名前、現在のローカル変数、および利用可能なモジュール名を検索します。`string.a` のようなドットで区切られた式については、最後の `'.'` までの式を評価し、結果として得られたオブジェクトの属性から補完候補を示します。`__getattr__()` メソッドを持ったオブジェクトが式に含まれている場合、`__getattr__()` がアプリケーション定義のコードを実行するかもしれないので注意してください。

² 訳注: このファイル名は環境変数 `INPUTRC` がもしあればその指定が優先されます。

³ Python は、対話インタプリタを開始する時に `PYTHONSTARTUP` 環境変数が指定するファイルの内容を実行します。

より良くできたスタートアップファイルは以下例のようになります。この例では、作成した名前が不要になると削除されるのに注目してください。これは、スタートアップファイルが対話コマンドと同じ名前空間で実行されているので、不要な名前を除去して対話環境に副作用を生まないようにするためです。importされたモジュールのうち、osのようなインタプリタのほとんどのセッションで必要なものについては、残しておくると便利に思うかもしれません。

```
# Add auto-completion and a stored history file of commands to your Python
# interactive interpreter. Requires Python 2.0+, readline. Autocomplete is
# bound to the Esc key by default (you can change it - see readline docs).
#
# Store the file in ~/.pystartup, and set an environment variable to point
# to it, e.g. "export PYTHONSTARTUP=/home/user/.pystartup" in bash.
#
# Note that PYTHONSTARTUP does not expand "~", so you have to put in the
# full path to your home directory.

import atexit
import os
import readline
import rlcompleter

historyPath = os.path.expanduser("~/pyhistory")

def save_history(historyPath=historyPath):
    import readline
    readline.write_history_file(historyPath)

if os.path.exists(historyPath):
    readline.read_history_file(historyPath)

atexit.register(save_history)
del os, atexit, readline, rlcompleter, save_history, historyPath
```

13.4 インタラクティブインタプリタの代替

この機能は、初期の版のインタプリタに比べれば大きな進歩です。とはいえ、まだいくつかの要望が残されています。例えば、行を継続するときに正しいインデントが提示されたら快適でしょう（パーサは次の行でインデントトークンが必要かどうかを知っています）。補完機構がインタプリタのシンボルテーブルを使ってもよいかもしれません。括弧やクォートなどの対応をチェックする（あるいは指示する）コマンドも有用でしょう。

より優れたインタラクティブインタプリタの代替の一つに **IPython** があります。このインタプリタは、様々なところで使われていて、タブ補完、オブジェクト探索や先進的な履歴管理といった機能を持っています。他のアプリケーションにカスタマイズされたり、組込まれこともあります。別の優れたインタラクティブ環境としては **bpython** があります。

浮動小数点演算、その問題と制限

浮動小数点数は、計算機ハードウェアの中では、基数を 2 とする (2 進法の) 分数として表現されています。例えば、小数

0.125

は、 $1/10 + 2/100 + 5/1000$ という値を持ちますが、これと同様に、2 進法の分数

0.001

は $0/2 + 0/4 + 1/8$ という値になります。これら二つの分数は同じ値を持っていますが、ただ一つ、最初の分数は基数 10 で記述されており、二番目の分数は基数 2 で記述されていることが違います。

残念なことに、ほとんどの小数は 2 進法の分数として正確に表わすことができません。その結果、一般に、入力した 10 進の浮動小数点数は、2 進法の浮動小数点数で近似された後、実際にマシンに記憶されます。

最初は基数 10 を使うと問題を簡単に理解できます。分数 $1/3$ を考えてみましょう。分数 $1/3$ は、基数 10 の分数として、以下のように近似することができます。

0.3

さらに正確な近似は、

0.33

です。さらに正確に近似すると、

0.333

となり、以後同様です。何個桁数を増やして書こうが、結果は決して厳密な $1/3$ にはなりません。しかし、少しずつ正確な近似にはなっていくでしょう。

同様に、基数を 2 とした表現で何桁使おうとも、10 進数の 0.1 は基数を 2 とした分数で正確に表現することはできません。基数 2 では、 $1/10$ は循環小数 (repeating fraction) となります。

0.000110011001100110011001100110011001100110011001100110011...

どこか有限の桁で止めると、近似値を得ることになります。これこそが、次のような事態に出くわす理由です。

```
>>> 0.1
0.100000000000000001
```

今日では、ほとんどのマシンでは、0.1 を Python のプロンプトから入力すると上のような結果を目にします。そうならないかもしれませんが、これはハードウェアが浮動小数点数を記憶するのに用いているビット数がマシンによって異なり、Python は単にマシンに 2 進で記憶されている、真の 10 進の値を近似した値を、それに 10 進で近似して出力するだけだからです。ほとんどのマシンでは、Python が 0.1 を記憶するために 2 進近似した真の値を 10 進で表すと、以下のような出力になるでしょう！

```
>>> 0.1
0.1000000000000000055511151231257827021181583404541015625
```

Python プロンプトは、文字列表現を得るために何に対しても `repr()` を使います。浮動小数点数の場合、`repr(float)` は真の 10 進値を有効数字 17 桁で丸め、以下のような表示を行います。

```
0.100000000000000001
```

`repr(float)` が有効数字 17 桁の値を生成するのは、この値が(ほとんどのマシン上で)、全ての有限の浮動小数点数 x について `eval(repr(x)) == x` が成り立つのに十分で、かつ有効数字 16 桁に丸めると成り立たないからです。

これは 2 進法の浮動小数点の性質です: Python のバグでも、ソースコードのバグでもなく、浮動小数点演算を扱えるハードウェア上の、すべての言語で同じ類の現象が発生します(ただし、言語によっては、デフォルトのモードや全ての出力モードでその差を表示しないかもしれません)。

Python の組み込みの `str()` 関数は有効数字 12 桁しか生成しません。このため、この関数を代わりに使用したいと思うかもしれません。この関数は `eval(str(x))` としたときに x を再現しないことが多いですが、出力を目で見るには好ましいかもしれません。

```
>>> print str(0.1)
0.1
```

現実には、上の表示は錯覚であると気づくのは重要なことです。マシン内の値は厳密に $1/10$ ではなく、単に真のマシン内の表示される値を丸めているだけなのです。

まだ驚くべきことがあります。例えば、以下を見て、

```
>>> 0.1
0.100000000000000001
```

`round()` 関数を使って桁を切り捨て、期待する 1 桁にしたい誘惑にかられたとします。しかし、結果は依然同じ値です。

```
>>> round(0.1, 1)
0.100000000000000001
```

問題は、"0.1" を表すために記憶されている 2 進表現の浮動小数点数の値は、すでに $1/10$ に対する最良の近似になっており、値を再度丸めようとしてもこれ以上ましにはならないということです。すでに値は、`round()` で得られる値になっているというわけです。

もう一つの重要なことは、0.1 が正確に $1/10$ ではないため、0.1 を 10 個加算すると厳密に 1.0 にはならないこともある、ということです。

```
>>> sum = 0.0
>>> for i in range(10):
```

```
...      sum += 0.1
...
>>> sum
0.9999999999999999
```

2 進の浮動小数点数に対する算術演算は、このような意外性をたくさん持っています。“0.1”に関する問題は、以下の“表現エラー”の章で詳細に説明します。2 進法の浮動小数点演算にともなうその他のよく知られた意外な事象に関しては [The Perils of Floating Point](#) を参照してください。

究極的にいうと、“容易な答えはありません”。ですが、浮動小数点数のことを過度に警戒しないでください！ Python の float 型操作におけるエラーは浮動小数点処理ハードウェアから受けついたものであり、ほとんどのマシン上では一つの演算あたり高々 2^{53} 分の 1 です。この誤差はほとんどの作業で充分以上のものですが、浮動小数点演算は 10 進の演算ではなく、浮動小数点の演算を新たに行うと、新たな丸め誤差の影響を受けることを心にとどめておいてください。

異常なケースが存在する一方で、普段の浮動小数点演算の利用では、単に最終的な結果の値を必要な 10 進の桁数に丸めて表示するのなら、最終的には期待通りの結果を得ることになるでしょう。こうした操作は普通 `str()` で事足りますし、よりきめ細かな制御をしたければ、*formatstrings* にある `str.format()` メソッドのフォーマット仕様を参照してください。

14.1 表現エラー

この章では、“0.1”の例について詳細に説明し、このようなケースに対してどのようにすれば正確な分析を自分でできるかを示します。ここでは、2 進法表現の浮動小数点数についての基礎的な知識があるものとして話を進めます。

表現エラー (*Representation error*) は、いくつかの (実際にはほとんどの) 10 進の小数が 2 進法 (基数 2) の分数として表現できないという事実に関係しています。これは Python (あるいは Perl、C、C++、Java、Fortran、およびその他多く) が期待通りの正確な 10 進数を表示できない主要な理由です。

```
>>> 0.1
0.10000000000000001
```

なぜこうなるのでしょうか？ $1/10$ は 2 進法の分数で厳密に表現することができません。今日 (2000 年 11 月) のマシンは、ほとんどすべて IEEE-754 浮動小数点演算を使用しており、ほとんどすべてのプラットフォームでは Python の浮動小数点を IEEE-754 における“倍精度 (double precision)”に対応付けます。754 の double には 53 ビットの精度を持つ数が入るので、計算機に入力を行おうとすると、可能な限り 0.1 を最も近い値の分数に変換し、 $*J/2^{**N}$ の形式にしようと努力します。 J はちょうど 53 ビットの精度の整数です。

$$1 / 10 \sim J / (2^{**N})$$

を書き直すと、

$$J \sim 2^{**N} / 10$$

となります。 J は厳密に 53 ビットの精度を持っている ($\geq 2^{52}$ だが $< 2^{53}$) ことを思い出すと、 N として最適な値は 56 になります。

```
>>> 2**52
4503599627370496L
```

```
>>> 2**53
9007199254740992L
>>> 2**56/10
7205759403792793L
```

すなわち、56 は J をちょうど 53 ビットの精度のままに保つ N の唯一の値です。 J の取りえる値はその商を丸めたものです。

```
>>> q, r = divmod(2**56, 10)
>>> r
6L
```

残りは 10 の半分以上なので、最良の近似は丸め値を一つ増やした (round up) ものになります。

```
>>> q+1
7205759403792794L
```

従って、754 倍精度における $1/10$ の取りえる最良の近似は 2^{**56} 以上の値、もしくは

7205759403792794 / 72057594037927936

となります。丸め値を 1 増やしたので、この値は実際には $1/10$ より少し小さいことに注意してください；丸め値を 1 増やさない場合、商は $1/10$ よりもわずかに小さくなります。しかし、どちらにしろ 厳密に $1/10$ ではありません！

つまり、計算機は $1/10$ を“理解する”ことは決してありません。計算機が理解できるのは、上記のような厳密な分数であり、754 の倍精度浮動小数点数で得られるもっともよい近似は:

```
>>> .1 * 2**56
7205759403792794.0
```

となります。

この分数に $10^{**}30$ を掛ければ、有効数字 30 桁の十進数の (切り詰められた) 値を見ることができます。

```
>>> 7205759403792794 * 10**30 / 2**56
10000000000000000005551115123125L
```

これは、計算機が記憶している正確な数値が、10 進数値 0.100000000000000005551115123125 にほぼ等しいということです。この値を有効数字 17 桁で丸めると、Python が表示する値は 0.10000000000000001 になります (もちろんこのような値になるのは、IEEE 754 に適合していて、C ライブラリで可能な限り正確に値の入出力を行った場合だけです — 読者の計算機ではそうではないかもしれませんが！)

日本語訳について

この文書は、Python ドキュメント翻訳プロジェクトによる Python Tutorial の日本語訳版です。日本語訳に対する質問や提案などがありましたら、Python ドキュメント翻訳プロジェクトのメーリングリスト

<http://www.python.jp/mailman/listinfo/python-doc-jp>

または、Google Project Hosting 上の Issue Tracker

<http://code.google.com/p/python-doc-ja/issues/list>

までご報告ください。

15.1 翻訳者一覧 (敬称略)

- 1.3 和訳: SUZUKI Hisao <suzuki at acm.org> (August 27, 1995)
- 1.4 和訳: SUZUKI Hisao <suzuki at acm.org> (April 20, 1997)
- 1.5.1 和訳: SUZUKI Hisao <suzuki at acm.org> (August 23, 1998)
- 2.1 和訳: SUZUKI Hisao <suzuki at acm.org> (June 10, 2001)
- 2.2.3 差分和訳: sakito <sakito at s2.xrea.com> (August 10, 2003)
- 2.2.3 敬体訳: ymasuda <y.masuda at acm.org> (September 5, 2003)
- 2.3 差分和訳: sakito <sakito at s2.xrea.com> (August 30, 2003)
- 2.3 敬体訳: ymasuda <y.masuda at acm.org> (November 30, 2003)
- 2.3.3 差分訳: ymasuda <y.masuda at acm.org> (December 25, 2003)
- 2.4 差分訳: ymasuda <y.masuda at acm.org>, G. Yoshida (etale) (March 20, 2006)
- 2.4 差分訳: moriwaka <moriwaka at gmail.com> (September 11, 2007)
- 2.5 差分訳: moriwaka <moriwaka at gmail.com> (September 12, 2007)
- 2.6 差分訳: cocoatomo, INADA Naoki

用語集

>>> インタラクティブシェルにおける、デフォルトの Python プロンプト。インタラクティブに実行されるコードサンプルとしてよく出てきます。

... インタラクティブシェルにおける、インデントされたコードブロックや対応する括弧 (丸括弧 `()`、角括弧 `[]`、curly brace `{}`) の内側で表示されるデフォルトのプロンプト。

2to3 Python 2.x のコードを Python 3.x のコードに変換するツール。ソースコードを解析して、その解析木を巡回 (traverse) して、非互換なコードの大部分を処理する。

2to3 は、`lib2to3` モジュールとして標準ライブラリに含まれています。スタンドアローンのツールとして使うときのコマンドは `Tools/scripts/2to3` として提供されています。*2to3-reference* を参照してください。

abstract base class (抽象基底クラス) Abstract Base Classes (ABCs と略されます) は *duck-typing* を補完するもので、`hasattr()` などの別のテクニックでは不恰好になる場合にインタフェースを定義する方法を提供します。Python は沢山のビルトイン ABCs を、(`collections` モジュールで) データ構造、(`numbers` モジュールで) 数値型、(`io` モジュールで) ストリーム型で提供しています。`abc` モジュールを利用して独自の ABC を作成することもできます。

argument (引数) 関数やメソッドに渡された値。関数の中では、名前の付いたローカル変数に代入されます。

関数やメソッドは、その定義中に位置指定引数 (positional arguments, 訳注: `f(1, 2)` のように呼び出し側で名前を指定せず、引数の位置に引数の値を対応付けるもの) とキーワード引数 (keyword arguments, 訳注: `f(a=1, b=2)` のように、引数名に引数の値を対応付けるもの) の両方を持つことができます。位置指定引数とキーワード引数は可変長です。関数定義や呼び出しは、`*` を使って、不定数個の位置指定引数をシーケンス型に入れて受け取ったり渡したりすることができます。同じく、キーワード引数は `**` を使って、辞書に入れて受け取ったり渡したりできます。

引数リスト内では任意の式を使うことができ、その式を評価した値が渡されます。

attribute (属性) オブジェクトに関連付けられ、ドット演算子を利用して名前で参照される値。例えば、オブジェクト `o` が属性 `a` を持っているとき、その属性は `o.a` で参照されます。

BDFL 慈悲ぶかき独裁者 (Benevolent Dictator For Life) の略です。Python の作者、[Guido van Rossum](#) のことです。

bytecode (バイトコード) Python のソースコードはバイトコードへとコンパイルされます。バイトコードは Python プログラムのインタプリタ内部での形です。バイトコードはまた、`.pyc` や `.pyo` ファイルにキャッシュされ、同じファイルを二度目に実行した際により高速に実行できるようにします(ソースコードからバイトコードへの再度のコンパイルは回避されます)。このバイトコードは、各々のバイトコードに対応するサブルーチン呼び出すような“仮想計算機 (*virtual machine*)”で動作する“中間言語 (intermediate language)”といえます。

class (クラス) ユーザー定義オブジェクトを作成するためのテンプレート。クラス定義は普通、そのクラスのインスタンス上の操作をするメソッドの定義を含みます。

classic class (旧スタイルクラス) `object` を継承していないクラス全てを指します。新スタイルクラス (*new-style class*) も参照してください。旧スタイルクラスは Python 3.0 で削除されます。

coercion (型強制) 同じ型の 2 つの引数を要する演算の最中に、ある型のインスタンスを別の型に暗黙のうちに変換することです。例えば、`int(3.15)` は浮動小数点数を整数の 3 にします。しかし、`3+4.5` の場合、各引数は型が異なっていて(一つは整数、一つは浮動小数点数)、加算をする前に同じ型に変換しなければいけません。そうでないと、`TypeError` 例外が投げられます。2 つの被演算子間の型強制は組み込み関数の `coerce` を使って行えます。従って、`3+4.5` は `operator.add(*coerce(3, 4.5))` を呼び出すことに等しく、`operator.add(3.0, 4.5)` という結果になります。型強制を行わない場合、たとえ互換性のある型であっても、すべての引数はプログラマーが、単に `3+4.5` とするのではなく、`float(3)+4.5` というように、同じ型に正規化しなければいけません。

complex number (複素数) よく知られている実数系を拡張したもので、すべての数は実部と虚部の和として表されます。虚数は虚数単位元 (-1 の平方根) に実数を掛けたもので、一般に数学では i と書かれ、工業では j と書かれます。

Python は複素数に組み込みで対応し、後者の表記を取っています。虚部は末尾に j をつけて書きます。例えば、`3+1j` となります。`math` モジュールの複素数版を利用するには、`cmath` を使います。

複素数の使用はかなり高度な数学の機能です。必要性を感じなければ、ほぼ間違いなく無視してしまってもよいでしょう。

context manager (コンテキストマネージャー) `with` 文で扱われる、環境を制御するオブジェクト。`__enter__()` と `__exit__()` メソッドを定義することで作られる。

[PEP 343](#) を参照。

CPython Python プログラミング言語の基準となる実装。CPython という単語は、この実装を Jython や IronPython といった他の実装と区別する必要がある文脈で利用されます。

decorator (デコレータ) 関数を返す関数。通常、`@wrapper` という文法によって関数を変換するのに利用されます。デコレータの一般的な利用例として、`classmethod()` と `staticmethod()` があります。

デコレータの文法はシンタックスシュガーです。次の 2 つの関数定義は意味的に同じものです。

```
def f(...):
    ...
f = staticmethod(f)

@staticmethod
def f(...):
    ...
```

デコレータについてのより詳しい情報は、*the documentation for function definition* を参照してください。

descriptor (デスクリプタ) メソッド `__get__()`, `__set__()`, あるいは `__delete__()` が定義されている新スタイル (*new-style*) のオブジェクトです。あるクラス属性がデスクリプタである場合、その属性を参照するときに、そのデスクリプタに束縛されている特別な動作を呼び出します。通常、`get`, `set`, `delete` のために `a.b` と書くと、`a` のクラス辞書内でオブジェクト `b` を検索しますが、`b` がデスクリプタの場合にはデスクリプタで定義されたメソッドを呼び出します。デスクリプタの理解は、Python を深く理解する上で鍵となります。というのは、デスクリプタこそが、関数、メソッド、プロパティ、クラスメソッド、静的メソッド、そしてスーパークラスの参照といった多くの機能の基盤だからです。

dictionary (辞書) 任意のキーを値に対応付ける連想配列です。`dict` の使い方は `list` に似ていますが、ゼロから始まる整数に限らず、`__hash__()` 関数を実装している全てのオブジェクトをキーにできます。Perl ではハッシュ (`hash`) と呼ばれています。

docstring クラス、関数、モジュールの最初の式となっている文字列リテラルです。実行時には無視されますが、コンパイラによって識別され、そのクラス、関数、モジュールの `__doc__` 属性として保存されます。イントロスペクションできる (訳注: 属性として参照できる) ので、オブジェクトのドキュメントを書く正しい場所です。

duck-typing Python 的なプログラムスタイルではオブジェクトの型を (型オブジェクトとの関係ではなく) メソッドや属性といったシグネチャを見ることで判断します。(「もしそれがガチョウのようにみえて、ガチョウのように鳴けば、それはガチョウである」) インタフェースを型より重視することで、上手くデザインされたコードは (polymorphic な置換を許可することによって) 柔軟性を増すことができます。duck-typing は `type()` や `isinstance()` を避けます。(ただし、duck-typing を抽象ベースクラス (*abstract base class*) で補完することもできます。) その代わりに `hasattr()` テストや *EAFP* プログラミングを利用します。

EAFP 「認可をとるより許しを請う方が容易 (*easier to ask for forgiveness than permission*、マーフイーの法則)」の略です。Python で広く使われているコーディングスタイルでは、通常は有効なキーや属性が存在するものと仮定し、その仮定が誤っていた場合に例外を捕捉します。この簡潔で手早く書けるコーディングスタイルには、`try` 文および `except` 文がたくさんあるのが特徴です。このテクニックは、C のような言語でよく使われている *LBYL* スタイルと対照的なものです。

expression (式) 何かの値に評価される、一つづきの構文 (a piece of syntax). 言い換えると、リテラル、名前、属性アクセス、演算子や関数呼び出しといった、値を返す式の要素の組み合わせ。他の多くの言語と違い、Python は言語の全ての構成要素が式というわけではありません。`print` や `if` のように、式にはならない、文 (*statement*) もあります。代入も式ではなく文です。

extension module (拡張モジュール) C や C++ で書かれたモジュール。ユーザーコードや Python のコアとやりとりするために、Python の C API を利用します。

finder モジュールの *loader* を探すオブジェクト。`find_module()` という名前のメソッドを実装していなければなりません。詳細については [PEP 302](#) を参照してください。

function (関数) 呼び出し側に値を返す、一連の文。ゼロ個以上の引数を受け取り、それを関数の本体を実行するときに諒できます。*argument* や *method* も参照してください。

__future__ 互換性のない新たな機能を現在のインタプリタで有効にするためにプログラマが利用できる擬似モジュールです。例えば、式 `11/4` は現状では `2` になります。この式を実行しているモジュールで

```
from __future__ import division
```

を行って 真の除算操作 (*true division*) を有効にすると、式 $11/4$ は 2.75 になります。実際に `__future__` モジュールを `import` してその変数を評価すれば、新たな機能が初めて追加されたのがいつで、いつデフォルトの機能になる予定かわかります。

```
>>> import __future__
>>> __future__.division
_Feature((2, 2, 0, 'alpha', 2), (3, 0, 0, 'alpha', 0), 8192)
```

garbage collection (ガベージコレクション) もう使われなくなったメモリを開放する処理。Python は、Python は参照カウントと循環参照を見つけて破壊する循環参照コレクタを使ってガベージコレクションを行います。

generator (ジェネレータ) イテレータを返す関数です。 `return` 文の代わりに `yield` 文を使って呼び出し側に要素を返す他は、通常の関数と同じに見えます。

よくあるジェネレータ関数は一つまたはそれ以上の `for` ループや `while` ループを含んでおり、ループの呼び出し側に要素を返す (`yield`) になっています。ジェネレータが返すイテレータを使って関数を実行すると、関数は `yield` キーワードで (値を返して) 一旦停止し、 `next()` を呼んで次の要素を要求するたびに実行を再開します。

generator expression (ジェネレータ式) イテレータを返す式です。普通の式に、ループ変数を定義している `for` 式、範囲、そして省略可能な `if` 式がつづいているように見えます。こうして構成された式は、外側の関数に対して値を生成します。:

```
>>> sum(i*i for i in range(10))           # sum of squares 0, 1, 4, ... 81
285
```

GIL グローバルインタプリタロック (*global interpreter lock*) を参照してください。

global interpreter lock (グローバルインタプリタロック) *CPython* の VM(*virtual machine*) の中で一度に 1 つのスレッドだけが動作することを保証するために使われているロックです。このロックによって、同時に同じメモリにアクセスする 2 つのプロセスは存在しないと保証されているので、*CPython* を単純な構造にできるのです。インタプリタ全体にロックをかけると、多重プロセッサ計算機における並列性の恩恵と引き換えにインタプリタの多重スレッド化を簡単に行えます。かつて“スレッド自由な (*free-threaded*)”インタプリタを作ろうと努力したことがありましたが、広く使われている単一プロセッサの場合にはパフォーマンスが低下するという事態に悩まされました。

hashable (ハッシュ可能) ハッシュ可能 なオブジェクトとは、生存期間中変わらないハッシュ値を持ち (`__hash__()` メソッドが必要)、他のオブジェクトと比較ができる (`__eq__()` か `__cmp__()` メソッドが必要) オブジェクトです。同値なハッシュ可能オブジェクトは必ず同じハッシュ値を持つ必要があります。

辞書のキーや集合型のメンバーは、内部でハッシュ値を使っているので、ハッシュ可能オブジェクトである必要があります。

Python の全ての不変 (*immutable*) なビルドインオブジェクトはハッシュ可能です。リストや辞書といった変更可能なコンテナ型はハッシュ可能ではありません。

ユーザー定義クラスのインスタンスはデフォルトでハッシュ可能です。それらは、比較すると常に不等で、ハッシュ値は `id()` になります。

IDLE Python の組み込み開発環境 (Integrated DeveLopment Environment) です。IDLE は Python の標準的な配布物についてくる基本的な機能のエディタとインタプリタ環境です。初心者に向いている点として、IDLE はよく洗練され、複数プラットフォームで動作する GUI アプリケーションを実装したい人むけの明解なコード例にもなっています。

immutable (不変オブジェクト) 固定の値を持ったオブジェクトです。変更不能なオブジェクトには、数値、文字列、およびタプルなどがあります。これらのオブジェクトは値を変えられません。別の値を記憶させる際には、新たなオブジェクトを作成しなければなりません。不変オブジェクトは、固定のハッシュ値が必要となる状況で重要な役割を果たします。辞書におけるキーがその例です。

integer division (整数除算) 剰余を考慮しない数学的除算です。例えば、式 $11/4$ は現状では 2.75 ではなく 2 になります。これは 切り捨て除算 (*floor division*) とも呼ばれます。二つの整数間で除算を行うと、結果は (端数切捨て関数が適用されて) 常に整数になります。しかし、被演算子の一方が (float のような) 別の数値型の場合、演算の結果は共通の型に型強制されます (型強制 (*coercion*) 参照)。例えば、浮動小数点数で整数を除算すると結果は浮動小数点になり、場合によっては端数部分を伴います。// 演算子を / の代わりに使うと、整数除算を強制できます。__future__ も参照してください。

importer モジュールを探してロードするオブジェクト。finder と loader のどちらでもあるオブジェクト。

interactive (対話的) Python には対話的インタプリタがあり、文や式をインタプリタのプロンプトに入力すると即座に実行されて結果を見ることができます。python と何も引数を与えずに実行してください。(コンピュータのメインメニューから Python の対話的インタプリタを起動できるかもしれません。) 対話的インタプリタは、新しいアイデアを試してみたり、モジュールやパッケージの中を覗いてみる (help(x) を覚えておいてください) のに非常に便利なツールです。

interpreted Python はインタプリタ形式の言語であり、コンパイラ言語の対極に位置します。(バイトコードコンパイラがあるために、この区別は曖昧ですが。) ここでのインタプリタ言語とは、ソースコードのファイルを、まず実行可能形式にしてから実行させるといった操作なしに、直接実行できることを意味します。インタプリタ形式の言語は通常、コンパイラ形式の言語よりも開発 / デバッグのサイクルは短いものの、プログラムの実行は一般に遅いです。対話的 (*interactive*) も参照してください。

iterable (反復可能オブジェクト) 要素を一つずつ返せるオブジェクトです。

反復可能オブジェクトの例には、(list, str, tuple といった) 全てのシーケンス型や、dict や file といった幾つかの非シーケンス型、あるいは __iter__() か __getitem__() メソッドを実装したクラスのインスタンスが含まれます。

反復可能オブジェクトは for ループ内やその他多くのシーケンス (訳注: ここでのシーケンスとは、シーケンス型ではなくただの列という意味) が必要となる状況 (zip(), map(), ...) で利用できます。

反復可能オブジェクトを組み込み関数 iter() の引数として渡すと、オブジェクトに対するイテレータを返します。このイテレータは一連の値を引き渡す際に便利です。反復可能オブジェクトを使う際には、通常 iter() を呼んだり、イテレータオブジェクトを自分で扱う必要はありません。for 文ではこの操作を自動的に行い、無名の変数を作成してループの間イテレータを記憶します。イテレータ (*iterator*) シーケンス (*sequence*)、およびジェネレータ (*generator*) も参照してください。

iterator 一連のデータ列 (stream) を表現するオブジェクトです。イテレータの next() メソッドを繰り返し呼び出すと、データ列中の要素を一つずつ返します。後続のデータがなくなると、データの代わりに StopIteration 例外を送出します。その時点で、イテレータオブジェクトは全てのオブジェクトを出し尽くしており、それ以降は next() を何度呼んでも StopIteration を送ります。イテレータは、そのイテレータオブジェクト自体を返す __iter__() メソッドを実装しなければならないっており、そのため全てのイテレータは他の反復可能オブジェクトを受理できるほとんどの場所

で利用できます。著しい例外は複数の反復を行うようなコードです。(list のような) コンテナオブジェクトでは、`iter()` 関数にオブジェクトを渡したり、`for` ループ内で使うたびに、新たな未使用のイテレータを生成します。このイテレータをさらに別の場所でイテレータとして使おうとすると、前回のイテレーションパスで使用された同じイテレータオブジェクトを返すため、空のコンテナのように見えます。

より詳細な情報は *typeiter* にあります。

keyword argument (キーワード引数) 呼び出し時に、`variable_name=` が手前にある引数。変数名は、その値が関数内のどのローカル変数に渡されるかを指定します。キーワード引数として辞書を受け取ったり渡したりするために `**` を使うことができます。 *argument* も参照してください。

lambda (ラムダ) 無名のインライン関数で、関数が呼び出されたときに評価される 1 つの式 (*expression*) を持ちます。ラムダ関数を作る構文は、`lambda [arguments]: expression` です。

LBYL 「ころばぬ先の杖」 (look before you leap) の略です。このコーディングスタイルでは、呼び出しや検索を行う前に、明示的に前提条件 (pre-condition) 判定を行います。EAFP アプローチと対照的で、`if` 文がたくさん使われるのが特徴的です。

list (リスト) Python のビルトインのシーケンス型 (*sequence*) です。リストという名前ですが、リンクリストではなく、他の言語で言う配列 (array) と同種のもので、要素へのアクセスは $O(1)$ です。

list comprehension (リスト内包表記) シーケンス内の全てあるいは一部の要素を処理して、その結果からなるリストを返す、コンパクトな書き方です。`result = ["0x%02x" % x for x in range(256) if x % 2 == 0]` とすると、0 から 255 までの偶数を 16 進数表記 (0x..) した文字列からなるリストを生成します。`if` 節はオプションです。`if` 節がない場合、`range(256)` の全ての要素が処理されます。

loader モジュールをロードするオブジェクト。`load_module()` という名前のメソッドを定義していなければなりません。詳細は **PEP 302** を参照してください。

mapping (マップ) 特殊メソッド `__getitem__()` を使って、任意のキーに対する検索をサポートする (dict のような) コンテナオブジェクトです。

metaclass (メタクラス) クラスのクラスです。クラス定義は、クラス名、クラスの辞書と、基底クラスのリストを作ります。メタクラスは、それら 3 つを引数として受け取り、クラスを作る責任を負います。ほとんどのオブジェクト指向言語は (訳注:メタクラスの) デフォルトの実装を提供しています。Python はカスタムのメタクラスを作成できる点が特別です。ほとんどのユーザーにとって、メタクラスは全く必要のないものです。しかし、一部の場面では、メタクラスは強力でエレガントな方法を提供します。たとえば属性アクセスのログを取ったり、スレッドセーフ性を追加したり、オブジェクトの生成を追跡したり、シングルトンを実装するなど、多くの場面で利用されます。

method クラス内で定義された関数。クラス属性として呼び出された場合、メソッドはインスタンスオブジェクトを第一引数 (*argument*) として受け取ります (この第一引数は普段 `self` と呼ばれます)。 *function* と *nested scope* も参照してください。

mutable (変更可能オブジェクト) 変更可能なオブジェクトは、`id()` を変えることなく値を変更できます。変更不能 (*immutable*) も参照してください。

named tuple (名前付きタプル) タプルに似ていて、インデックスによりアクセスする要素に名前付き属性としてもアクセス出来るクラス。(例えば、`time.localtime()` はタプルに似たオブジェクトを返し、その `year` には `t[0]` のようなインデックスによるアクセスと、`t.tm_year` のような名前付き要素としてのアクセスが可能です。)

名前付きタプルには、`time.struct_time` のようなビルトイン型もありますし、通常のクラス定義によって作成することもできます。名前付きタプルを `collections.namedtuple()` ファクトリ関数で作成することもできます。最後の方法で作った名前付きタプルには自動的に、`Employee(name='jones', title='programmer')` のような自己ドキュメント表現 (self-documenting representation) 機能が付いてきます。

namespace (名前空間) 変数を記憶している場所です。名前空間は辞書を用いて実装されています。名前空間には、ローカル、グローバル、組み込み名前空間、そして(メソッド内の)オブジェクトのネストされた名前空間があります。例えば、関数 `__builtin__.open()` と `os.open()` は名前空間で区別されます。名前空間はまた、ある関数をどのモジュールが実装しているかをはっきりさせることで、可読性やメンテナンス性に寄与します。例えば、`random.seed()`, `itertools.izip()` と書くことで、これらの関数がそれぞれ `random` モジュールや `itertools` モジュールで実装されていることがはっきりします。

nested scope (ネストされたスコープ) 外側で定義されている変数を参照する機能。具体的に言えば、ある関数が別の関数の中で定義されている場合、内側の関数は外側の関数中の変数を参照できます。ネストされたスコープは変数の参照だけができ、変数の代入はできないので注意してください。変数の代入は、常に最も内側のスコープにある変数に対する書き込みになります。同様に、グローバル変数を使うとグローバル名前空間の値を読み書きします。

new-style class (新スタイルクラス) `object` から継承したクラス全てを指します。これには `list` や `dict` のような全ての組み込み型が含まれます。 `__slots__()`、デスクリプタ、プロパティ、`__getattr__()` といった、Python の新しい機能を使えるのは新スタイルクラスだけです。

より詳しい情報は *newstyle* を参照してください。

object 状態(属性や値)と定義された振る舞い(メソッド)をもつ全てのデータ。もしくは、全ての新スタイルクラス (*new-style class*) の基底クラスのこと。

positional argument (位置指定引数) 引数のうち、呼び出すときの順序で、関数やメソッドの中のどの名前に代入されるかが決定されるもの。複数の位置指定引数を、関数定義側が受け取ったり、渡したりするために、`*` を使うことができます。 *argument* も参照してください。

Python 3000 Python の次のメジャーバージョンである Python 3.0 のニックネームです。(Python 3 が遠い将来の話だった頃に作られた言葉です。) “Py3k” と略されることもあります。

Pythonic 他の言語で一般的な考え方で書かれたコードではなく、Python の特に一般的なイディオムに繋がる、考え方やコード。例えば、Python の一般的なイディオムに `iterable` の要素を `for` 文を使って巡回することです。この仕組みを持たない言語も多くあるので、Python に慣れ親しんでいない人は数値のカウンターを使うかもしれません。

```
for i in range(len(food)):
    print food[i]
```

これと対照的な、よりきれいな Pythonic な方法はこうなります。

```
for piece in food:
    print piece
```

reference count (参照カウント) あるオブジェクトに対する参照の数。参照カウントが0になったとき、そのオブジェクトは破棄されます。参照カウントは通常は Python のコード上には現れませんが、*CPython* 実装の重要な要素です。`sys` モジュールは、プログラマーが任意のオブジェクトの参照カウントを知るための `getrefcount()` 関数を提供しています。

__slots__ 新スタイルクラス (*new-style class*) 内で、インスタンス属性の記憶に必要な領域をあらかじめ定義しておき、それとひきかえにインスタンス辞書を排除してメモリの節約を行うための宣言です。これはよく使われるテクニックですが、正しく動作させるのには少々手際を要するので、例えばメモリが死活問題となるようなアプリケーション内にインスタンスが大量に存在するといった稀なケースを除き、使わないのがベストです。

sequence (シーケンス) 特殊メソッド `__getitem__()` で整数インデックスによる効率的な要素へのアクセスをサポートし、`len()` で長さを返すような反復可能オブジェクト (*iterable*) です。組み込みシーケンス型には、`list`, `str`, `tuple`, `unicode` などがあります。`dict` は `__getitem__()` と `__len__()` もサポートしますが、検索の際に任意の変更不能 (*immutable*) なキーを使うため、シーケンスではなくマップ (*mapping*) とみなされているので注意してください。

slice (スライス) 多くの場合、シーケンス (*sequence*) の一部を含むオブジェクト。スライスは、添字記号 `[]` で数字の間にコロンを書いたときに作られます。例えば、`variable_name[1:3:5]` です。添字記号は `slice` オブジェクトを内部で利用しています。(もしくは、古いバージョンの、`__getslice__()` と `__setslice__()` を利用します。)

special method (特殊メソッド) ある型に対する特定の動作をするために、Python から暗黙的に呼ばれるメソッド。この種類のメソッドは、メソッド名の最初と最後にアンダースコア 2 つを持ちます。特殊メソッドについては *specialnames* で解説されています。

statement (文) 文は一種のコードブロックです。文は *expression* か、それ以外のキーワードにより構成されます。例えば `if`, `while`, `print` は文です。

triple-quoted string (三重クォート文字列) 3 つの連続したクォート記号 (") かアポストロフィー (') で囲まれた文字列。通常の (一重) クォート文字列に比べて表現できる文字列に違いはありませんが、幾つかの理由で有用です。1 つか 2 つの連続したクォート記号をエスケープ無しに書くことができますし、行継続文字 (\) を使わなくても複数行にまたがることのできるため、ドキュメンテーション文字列を書く時に特に便利です。

type (型) Python のオブジェクトの型は、そのオブジェクトの種類を決定します。全てのオブジェクトは型を持っています。オブジェクトの型は、`__class__` 属性からアクセスしたり、`type(obj)` で取得することができます。

virtual machine (仮想マシン) ソフトウェアにより定義されたコンピュータ。Python の仮想マシンは、バイトコードコンパイラが出力したバイトコード (*bytecode*) を実行します。

Zen of Python (Python の悟り) Python を理解し利用する上での導きとなる、Python の設計原則と哲学をリストにしたものです。対話プロンプトで `"import this"` とするとこのリストを読めます。

このドキュメントについて

このドキュメントは、Python のドキュメントを主要な目的として作られたドキュメントプロセッサの [Sphinx](#) を利用して、[reStructuredText](#) 形式のソースから生成されました。

ドキュメントとそのツール群の開発は、docs@python.org メーリングリスト上で行われています。私たちは常に、一緒にドキュメントの開発をしてくれるボランティアを探しています。気軽にこのメーリングリストにメールしてください。

多大な感謝を:

- Fred L. Drake, Jr., the creator of the original Python documentation toolset and writer of much of the content;
- the [Docutils](#) project for creating reStructuredText and the Docutils suite;
- Fredrik Lundh for his [Alternative Python Reference](#) project from which Sphinx got many good ideas.

このドキュメントや、Python 自体のバグ報告については、[reporting-bugs](#) を参照してください。

ノート: 訳注: 日本語訳の問題については、Google Project Hosting 上の Issue Tracker <http://code.google.com/p/python-doc-jp/issues/list> に登録するか、python-doc-jp@python.jp にメールで報告をお願いします。

B.1 Python ドキュメント 貢献者

この節では、Python ドキュメントに何らかの形で貢献した人をリストアップしています。このリストは完全ではありません – もし、このリストに載っているべき人を知っていたら、docs@python.org にメールで教えてください。私たちは喜んでその問題を修正します。

Aahz, Michael Abbott, Steve Alexander, Jim Ahlstrom, Fred Allen, A. Amoroso, Pehr Anderson, Oliver Andrich, Jesus Cea Avila, Daniel Barclay, Chris Barker, Don Bashford, Anthony Baxter, Alexander Belopolsky, Bennett Benson, Jonathan Black, Robin Boerdijk, Michal Bozon, Aaron Brancotti, Georg Brandl, Keith Briggs, Ian Bruntlett, Lee Busby, Lorenzo M. Catucci, Carl Cerecke, Mauro Cicognini, Gilles Civario, Mike Clarkson, Steve

Clift, Dave Cole, Matthew Cowles, Jeremy Craven, Andrew Dalke, Ben Darnell, L. Peter Deutsch, Robert Donohue, Fred L. Drake, Jr., Josip Dzolong, Jeff Epler, Michael Ernst, Blame Andy Eskilsson, Carey Evans, Martijn Faassen, Carl Feynman, Dan Finnie, Hernán Martínez Foffani, Stefan Franke, Jim Fulton, Peter Funk, Lele Gaifax, Matthew Gallagher, Ben Gertzfield, Nadim Ghaznavi, Jonathan Giddy, Shelley Gooch, Nathaniel Gray, Grant Griffin, Thomas Guettler, Anders Hammarquist, Mark Hammond, Harald Hanche-Olsen, Manus Hand, Gerhard Haring, Travis B. Hartwell, Tim Hatch, Janko Hauser, Thomas Heller, Bernhard Herzog, Magnus L. Hetland, Konrad Hinsén, Stefan Hoffmeister, Albert Hofkamp, Gregor HOFFLEIT, Steve Holden, Thomas Holenstein, Gerrit Holl, Rob Hooft, Brian Hooper, Randall Hopper, Michael Hudson, Eric Huss, Jeremy Hylton, Roger Irwin, Jack Jansen, Philip H. Jensen, Pedro Diaz Jimenez, Kent Johnson, Lucas de Jonge, Andreas Jung, Robert Kern, Jim Kerr, Jan Kim, Greg Kochanski, Guido Kollerie, Peter A. Koren, Daniel Kozan, Andrew M. Kuchling, Dave Kuhlman, Erno Kuusela, Thomas Lamb, Detlef Lannert, Piers Lauder, Glyph Lefkowitz, Robert Lehmann, Marc-André Lemburg, Ross Light, Ulf A. Lindgren, Everett Lipman, Mirko Liss, Martin von Löwis, Fredrik Lundh, Jeff MacDonald, John Machin, Andrew MacIntyre, Vladimir Marangozov, Vincent Marchetti, Laura Matson, Daniel May, Rebecca McCreary, Doug Mennella, Paolo Milani, Skip Montanaro, Paul Moore, Ross Moore, Sjoerd Mullender, Dale Nagata, Ng Pheng Siong, Koray Oner, Tomas Oppelstrup, Denis S. Otkidach, Zooko O'Whielacronx, Shriphani Palakodety, William Park, Joonas Paalasmaa, Harri Pasanen, Bo Peng, Tim Peters, Benjamin Peterson, Christopher Petrilli, Justin D. Pettit, Chris Phoenix, François Pinard, Paul Prescod, Eric S. Raymond, Edward K. Ream, Sean Reifschneider, Bernhard Reiter, Armin Rigo, Wes Rishel, Armin Ronacher, Jim Roskind, Guido van Rossum, Donald Wallace Rouse II, Mark Russell, Nick Russo, Chris Ryland, Constantina S., Hugh Sasse, Bob Savage, Scott Schram, Neil Schemenauer, Barry Scott, Joakim Sernbrant, Justin Sheehy, Charlie Shepherd, Michael Simcich, Ionel Simionescu, Michael Sloan, Gregory P. Smith, Roy Smith, Clay Spence, Nicholas Spies, Tage Stabell-Kulo, Frank Stajano, Anthony Starks, Greg Stein, Peter Stoehr, Mark Summerfield, Reuben Sumner, Kalle Svensson, Jim Tittsler, Ville Vainio, Martijn Vries, Charles G. Waldman, Greg Ward, Barry Warsaw, Corran Webster, Glyn Webster, Bob Weiner, Eddy Welbourne, Jeff Wheeler, Mats Wichmann, Gerry Wiener, Timothy Wild, Collin Winter, Blake Winton, Dan Wolfe, Steven Work, Thomas Wouters, Ka-Ping Yee, Rory Yorke, Moshe Zadka, Milan Zamazal, Cheng Zhang.

Python がこの素晴らしいドキュメントを持っているのは、Python コミュニティによる情報提供と貢献のおかげです。 – ありがとう！

History and License

C.1 Python の歴史

Python は 1990 年代の始め、オランダにある Stichting Mathematisch Centrum (CWI, <http://www.cwi.nl/> 参照) で Guido van Rossum によって ABC と呼ばれる言語の後継言語として生み出されました。その後多くの人々が Python に貢献していますが、Guido は今日でも Python 製作者の先頭に立っています。

1995 年、Guido は米国ヴァージニア州レストンにある Corporation for National Research Initiatives (CNRI, <http://www.cnri.reston.va.us/> 参照) で Python の開発に携わり、いくつかのバージョンをリリースしました。

2000 年 3 月、Guido と Python のコア開発チームは BeOpen.com に移り、BeOpen PythonLabs チームを結成しました。同年 10 月、PythonLabs チームは Digital Creations (現在の Zope Corporation, <http://www.zope.com/> 参照) に移りました。そして 2001 年、Python に関する知的財産を保有するための非営利組織 Python Software Foundation (PSF, <http://www.python.org/psf/> 参照) を立ち上げました。このとき Zope Corporation は PSF の賛助会員になりました。

Python のリリースは全てオープンソース (オープンソースの定義は <http://www.opensource.org/> を参照してください) です。歴史的にみて、ごく一部を除くほとんどの Python リリースは GPL 互換になっています; 各リリースについては下表にまとめてあります。

リリース	ベース	年	権利	GPL 互換
0.9.0 - 1.2	n/a	1991-1995	CWI	yes
1.3 - 1.5.2	1.2	1995-1999	CNRI	yes
1.6	1.5.2	2000	CNRI	no
2.0	1.6	2000	BeOpen.com	no
1.6.1	1.6	2001	CNRI	no
2.1	2.0+1.6.1	2001	PSF	no
2.0.1	2.0+1.6.1	2001	PSF	yes
2.1.1	2.1+2.0.1	2001	PSF	yes
2.2	2.1.1	2001	PSF	yes
2.1.2	2.1.1	2002	PSF	yes
2.1.3	2.1.2	2002	PSF	yes
次のページに続く				

表 C.1 – 前のページからの続き

リリース	ベース	年	権利	GPL 互換
2.2.1	2.2	2002	PSF	yes
2.2.2	2.2.1	2002	PSF	yes
2.2.3	2.2.2	2002-2003	PSF	yes
2.3	2.2.2	2002-2003	PSF	yes
2.3.1	2.3	2002-2003	PSF	yes
2.3.2	2.3.1	2003	PSF	yes
2.3.3	2.3.2	2003	PSF	yes
2.3.4	2.3.3	2004	PSF	yes
2.3.5	2.3.4	2005	PSF	yes
2.4	2.3	2004	PSF	yes
2.4.1	2.4	2005	PSF	yes
2.4.2	2.4.1	2005	PSF	yes
2.4.3	2.4.2	2006	PSF	yes
2.4.4	2.4.3	2006	PSF	yes
2.5	2.4	2006	PSF	yes
2.5.1	2.5	2007	PSF	yes
2.5.2	2.5.1	2008	PSF	yes
2.5.3	2.5.2	2008	PSF	yes
2.6	2.5	2008	PSF	yes
2.6.1	2.6	2008	PSF	yes
2.6.2	2.6.1	2009	PSF	yes
2.6.3	2.6.2	2009	PSF	yes
2.6.4	2.6.3	2009	PSF	yes
2.6.5	2.6.4	2010	PSF	yes

ノート: 「GPL 互換」という表現は、Python が GPL で配布されているという意味ではありません。Python のライセンスは全て、GPL と違い、変更したバージョンを配布する際に変更をオープンソースにしなくてもかまいません。GPL 互換のライセンスの下では、GPL でリリースされている他のソフトウェアと Python を組み合わせられますが、それ以外のライセンスではそうではありません。

Guido の指示の下、これらのリリースを可能にくださった多くのボランティアのみなさんに感謝します。

C.2 Terms and conditions for accessing or otherwise using Python

PSF LICENSE AGREEMENT FOR PYTHON 2.6ja2

1. This LICENSE AGREEMENT is between the Python Software Foundation (“PSF”), and the Individual or Organization (“Licensee”) accessing and otherwise using Python 2.6ja2 software in source or binary form and its associated documentation.
2. Subject to the terms and conditions of this License Agreement, PSF hereby grants Licensee a nonexclusive, royalty-free, world-wide license to reproduce, analyze, test, perform and/or display publicly, prepare deriva-

tive works, distribute, and otherwise use Python 2.6ja2 alone or in any derivative version, provided, however, that PSF's License Agreement and PSF's notice of copyright, i.e., "Copyright 2001-2010 Python Software Foundation; All Rights Reserved" are retained in Python 2.6ja2 alone or in any derivative version prepared by Licensee.

3. In the event Licensee prepares a derivative work that is based on or incorporates Python 2.6ja2 or any part thereof, and wants to make the derivative work available to others as provided herein, then Licensee hereby agrees to include in any such work a brief summary of the changes made to Python 2.6ja2.
4. PSF is making Python 2.6ja2 available to Licensee on an "AS IS" basis. PSF MAKES NO REPRESENTATIONS OR WARRANTIES, EXPRESS OR IMPLIED. BY WAY OF EXAMPLE, BUT NOT LIMITATION, PSF MAKES NO AND DISCLAIMS ANY REPRESENTATION OR WARRANTY OF MERCHANTABILITY OR FITNESS FOR ANY PARTICULAR PURPOSE OR THAT THE USE OF PYTHON 2.6ja2 WILL NOT INFRINGE ANY THIRD PARTY RIGHTS.
5. PSF SHALL NOT BE LIABLE TO LICENSEE OR ANY OTHER USERS OF PYTHON 2.6ja2 FOR ANY INCIDENTAL, SPECIAL, OR CONSEQUENTIAL DAMAGES OR LOSS AS A RESULT OF MODIFYING, DISTRIBUTING, OR OTHERWISE USING PYTHON 2.6ja2, OR ANY DERIVATIVE THEREOF, EVEN IF ADVISED OF THE POSSIBILITY THEREOF.
6. This License Agreement will automatically terminate upon a material breach of its terms and conditions.
7. Nothing in this License Agreement shall be deemed to create any relationship of agency, partnership, or joint venture between PSF and Licensee. This License Agreement does not grant permission to use PSF trademarks or trade name in a trademark sense to endorse or promote products or services of Licensee, or any third party.
8. By copying, installing or otherwise using Python 2.6ja2, Licensee agrees to be bound by the terms and conditions of this License Agreement.

BEOPEN.COM LICENSE AGREEMENT FOR PYTHON 2.0

BEOPEN PYTHON OPEN SOURCE LICENSE AGREEMENT VERSION 1

1. This LICENSE AGREEMENT is between BeOpen.com ("BeOpen"), having an office at 160 Saratoga Avenue, Santa Clara, CA 95051, and the Individual or Organization ("Licensee") accessing and otherwise using this software in source or binary form and its associated documentation ("the Software").
2. Subject to the terms and conditions of this BeOpen Python License Agreement, BeOpen hereby grants Licensee a non-exclusive, royalty-free, world-wide license to reproduce, analyze, test, perform and/or display publicly, prepare derivative works, distribute, and otherwise use the Software alone or in any derivative version, provided, however, that the BeOpen Python License is retained in the Software, alone or in any derivative version prepared by Licensee.
3. BeOpen is making the Software available to Licensee on an "AS IS" basis. BEOPEN MAKES NO REPRESENTATIONS OR WARRANTIES, EXPRESS OR IMPLIED. BY WAY OF EXAMPLE, BUT NOT LIMITATION, BEOPEN MAKES NO AND DISCLAIMS ANY REPRESENTATION OR WARRANTY OF MERCHANTABILITY OR FITNESS FOR ANY PARTICULAR PURPOSE OR THAT THE USE OF THE SOFTWARE WILL NOT INFRINGE ANY THIRD PARTY RIGHTS.
4. BEOPEN SHALL NOT BE LIABLE TO LICENSEE OR ANY OTHER USERS OF THE SOFTWARE FOR ANY INCIDENTAL, SPECIAL, OR CONSEQUENTIAL DAMAGES OR LOSS AS A RESULT

OF USING, MODIFYING OR DISTRIBUTING THE SOFTWARE, OR ANY DERIVATIVE THEREOF, EVEN IF ADVISED OF THE POSSIBILITY THEREOF.

5. This License Agreement will automatically terminate upon a material breach of its terms and conditions.
6. This License Agreement shall be governed by and interpreted in all respects by the law of the State of California, excluding conflict of law provisions. Nothing in this License Agreement shall be deemed to create any relationship of agency, partnership, or joint venture between BeOpen and Licensee. This License Agreement does not grant permission to use BeOpen trademarks or trade names in a trademark sense to endorse or promote products or services of Licensee, or any third party. As an exception, the “BeOpen Python” logos available at <http://www.pythonlabs.com/logos.html> may be used according to the permissions granted on that web page.
7. By copying, installing or otherwise using the software, Licensee agrees to be bound by the terms and conditions of this License Agreement.

CNRI LICENSE AGREEMENT FOR PYTHON 1.6.1

1. This LICENSE AGREEMENT is between the Corporation for National Research Initiatives, having an office at 1895 Preston White Drive, Reston, VA 20191 (“CNRI”), and the Individual or Organization (“Licensee”) accessing and otherwise using Python 1.6.1 software in source or binary form and its associated documentation.
2. Subject to the terms and conditions of this License Agreement, CNRI hereby grants Licensee a nonexclusive, royalty-free, world-wide license to reproduce, analyze, test, perform and/or display publicly, prepare derivative works, distribute, and otherwise use Python 1.6.1 alone or in any derivative version, provided, however, that CNRI’s License Agreement and CNRI’s notice of copyright, i.e., “Copyright 1995-2001 Corporation for National Research Initiatives; All Rights Reserved” are retained in Python 1.6.1 alone or in any derivative version prepared by Licensee. Alternately, in lieu of CNRI’s License Agreement, Licensee may substitute the following text (omitting the quotes): “Python 1.6.1 is made available subject to the terms and conditions in CNRI’s License Agreement. This Agreement together with Python 1.6.1 may be located on the Internet using the following unique, persistent identifier (known as a handle): 1895.22/1013. This Agreement may also be obtained from a proxy server on the Internet using the following URL: <http://hdl.handle.net/1895.22/1013>.”
3. In the event Licensee prepares a derivative work that is based on or incorporates Python 1.6.1 or any part thereof, and wants to make the derivative work available to others as provided herein, then Licensee hereby agrees to include in any such work a brief summary of the changes made to Python 1.6.1.
4. CNRI is making Python 1.6.1 available to Licensee on an “AS IS” basis. CNRI MAKES NO REPRESENTATIONS OR WARRANTIES, EXPRESS OR IMPLIED. BY WAY OF EXAMPLE, BUT NOT LIMITATION, CNRI MAKES NO AND DISCLAIMS ANY REPRESENTATION OR WARRANTY OF MERCHANTABILITY OR FITNESS FOR ANY PARTICULAR PURPOSE OR THAT THE USE OF PYTHON 1.6.1 WILL NOT INFRINGE ANY THIRD PARTY RIGHTS.
5. CNRI SHALL NOT BE LIABLE TO LICENSEE OR ANY OTHER USERS OF PYTHON 1.6.1 FOR ANY INCIDENTAL, SPECIAL, OR CONSEQUENTIAL DAMAGES OR LOSS AS A RESULT OF MODIFYING, DISTRIBUTING, OR OTHERWISE USING PYTHON 1.6.1, OR ANY DERIVATIVE THEREOF, EVEN IF ADVISED OF THE POSSIBILITY THEREOF.
6. This License Agreement will automatically terminate upon a material breach of its terms and conditions.

7. This License Agreement shall be governed by the federal intellectual property law of the United States, including without limitation the federal copyright law, and, to the extent such U.S. federal law does not apply, by the law of the Commonwealth of Virginia, excluding Virginia's conflict of law provisions. Notwithstanding the foregoing, with regard to derivative works based on Python 1.6.1 that incorporate non-separable material that was previously distributed under the GNU General Public License (GPL), the law of the Commonwealth of Virginia shall govern this License Agreement only as to issues arising under or with respect to Paragraphs 4, 5, and 7 of this License Agreement. Nothing in this License Agreement shall be deemed to create any relationship of agency, partnership, or joint venture between CNRI and Licensee. This License Agreement does not grant permission to use CNRI trademarks or trade name in a trademark sense to endorse or promote products or services of Licensee, or any third party.
8. By clicking on the "ACCEPT" button where indicated, or by copying, installing or otherwise using Python 1.6.1, Licensee agrees to be bound by the terms and conditions of this License Agreement.

ACCEPT

CWI LICENSE AGREEMENT FOR PYTHON 0.9.0 THROUGH 1.2

Copyright 1991 - 1995, Stichting Mathematisch Centrum Amsterdam, The Netherlands. All rights reserved.

Permission to use, copy, modify, and distribute this software and its documentation for any purpose and without fee is hereby granted, provided that the above copyright notice appear in all copies and that both that copyright notice and this permission notice appear in supporting documentation, and that the name of Stichting Mathematisch Centrum or CWI not be used in advertising or publicity pertaining to distribution of the software without specific, written prior permission.

STICHTING MATHEMATISCH CENTRUM DISCLAIMS ALL WARRANTIES WITH REGARD TO THIS SOFTWARE, INCLUDING ALL IMPLIED WARRANTIES OF MERCHANTABILITY AND FITNESS, IN NO EVENT SHALL STICHTING MATHEMATISCH CENTRUM BE LIABLE FOR ANY SPECIAL, INDIRECT OR CONSEQUENTIAL DAMAGES OR ANY DAMAGES WHATSOEVER RESULTING FROM LOSS OF USE, DATA OR PROFITS, WHETHER IN AN ACTION OF CONTRACT, NEGLIGENCE OR OTHER TORTIOUS ACTION, ARISING OUT OF OR IN CONNECTION WITH THE USE OR PERFORMANCE OF THIS SOFTWARE.

C.3 Licenses and Acknowledgements for Incorporated Software

This section is an incomplete, but growing list of licenses and acknowledgements for third-party software incorporated in the Python distribution.

C.3.1 Mersenne Twister

The `_random` module includes code based on a download from <http://www.math.keio.ac.jp/matsumoto/MT2002/emt19937ar.html>. The following are the verbatim comments from the original code:

```
A C-program for MT19937, with initialization improved 2002/1/26.
Coded by Takuji Nishimura and Makoto Matsumoto.
```

```
Before using, initialize the state by using init_genrand(seed)
or init_by_array(init_key, key_length).
```

Copyright (C) 1997 - 2002, Makoto Matsumoto and Takuji Nishimura,
All rights reserved.

Redistribution and use in source and binary forms, with or without
modification, are permitted provided that the following conditions
are met:

1. Redistributions of source code must retain the above copyright
notice, this list of conditions and the following disclaimer.
2. Redistributions in binary form must reproduce the above copyright
notice, this list of conditions and the following disclaimer in the
documentation and/or other materials provided with the distribution.
3. The names of its contributors may not be used to endorse or promote
products derived from this software without specific prior written
permission.

THIS SOFTWARE IS PROVIDED BY THE COPYRIGHT HOLDERS AND CONTRIBUTORS
"AS IS" AND ANY EXPRESS OR IMPLIED WARRANTIES, INCLUDING, BUT NOT
LIMITED TO, THE IMPLIED WARRANTIES OF MERCHANTABILITY AND FITNESS FOR
A PARTICULAR PURPOSE ARE DISCLAIMED. IN NO EVENT SHALL THE COPYRIGHT OWNER OR
CONTRIBUTORS BE LIABLE FOR ANY DIRECT, INDIRECT, INCIDENTAL, SPECIAL,
EXEMPLARY, OR CONSEQUENTIAL DAMAGES (INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO,
PROCUREMENT OF SUBSTITUTE GOODS OR SERVICES; LOSS OF USE, DATA, OR
PROFITS; OR BUSINESS INTERRUPTION) HOWEVER CAUSED AND ON ANY THEORY OF
LIABILITY, WHETHER IN CONTRACT, STRICT LIABILITY, OR TORT (INCLUDING
NEGLIGENCE OR OTHERWISE) ARISING IN ANY WAY OUT OF THE USE OF THIS
SOFTWARE, EVEN IF ADVISED OF THE POSSIBILITY OF SUCH DAMAGE.

Any feedback is very welcome.
<http://www.math.keio.ac.jp/matsumoto/emt.html>
email: matsumoto@math.keio.ac.jp

C.3.2 Sockets

The `socket` module uses the functions, `getaddrinfo()`, and `getnameinfo()`, which are coded in separate
source files from the WIDE Project, <http://www.wide.ad.jp/>.

Copyright (C) 1995, 1996, 1997, and 1998 WIDE Project.
All rights reserved.

Redistribution and use in source and binary forms, with or without
modification, are permitted provided that the following conditions
are met:

1. Redistributions of source code must retain the above copyright
notice, this list of conditions and the following disclaimer.
2. Redistributions in binary form must reproduce the above copyright
notice, this list of conditions and the following disclaimer in the
documentation and/or other materials provided with the distribution.
3. Neither the name of the project nor the names of its contributors
may be used to endorse or promote products derived from this software
without specific prior written permission.

THIS SOFTWARE IS PROVIDED BY THE PROJECT AND CONTRIBUTORS ``AS IS'' AND
GAI_ANY EXPRESS OR IMPLIED WARRANTIES, INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, THE
IMPLIED WARRANTIES OF MERCHANTABILITY AND FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE
ARE DISCLAIMED. IN NO EVENT SHALL THE PROJECT OR CONTRIBUTORS BE LIABLE

FOR GAI_ANY DIRECT, INDIRECT, INCIDENTAL, SPECIAL, EXEMPLARY, OR CONSEQUENTIAL DAMAGES (INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, PROCUREMENT OF SUBSTITUTE GOODS OR SERVICES; LOSS OF USE, DATA, OR PROFITS; OR BUSINESS INTERRUPTION) HOWEVER CAUSED AND ON GAI_ANY THEORY OF LIABILITY, WHETHER IN CONTRACT, STRICT LIABILITY, OR TORT (INCLUDING NEGLIGENCE OR OTHERWISE) ARISING IN GAI_ANY WAY OUT OF THE USE OF THIS SOFTWARE, EVEN IF ADVISED OF THE POSSIBILITY OF SUCH DAMAGE.

C.3.3 Floating point exception control

The source for the `fpectl` module includes the following notice:

```

-----
/                               Copyright (c) 1996.                               \
|                               The Regents of the University of California.          |
|                               All rights reserved.                                |
|                                                                                     |
|  Permission to use, copy, modify, and distribute this software for                |
|  any purpose without fee is hereby granted, provided that this en-               |
|  tire notice is included in all copies of any software which is or               |
|  includes a copy or modification of this software and in all                    |
|  copies of the supporting documentation for such software.                       |
|                                                                                     |
|  This work was produced at the University of California, Lawrence                  |
|  Livermore National Laboratory under contract no. W-7405-ENG-48                  |
|  between the U.S. Department of Energy and The Regents of the                   |
|  University of California for the operation of UC LLNL.                         |
|                                                                                     |
|                               DISCLAIMER                                           |
|                                                                                     |
|  This software was prepared as an account of work sponsored by an                |
|  agency of the United States Government. Neither the United States               |
|  Government nor the University of California nor any of their em-                |
|  ployees, makes any warranty, express or implied, or assumes any                 |
|  liability or responsibility for the accuracy, completeness, or                  |
|  usefulness of any information, apparatus, product, or process                   |
|  disclosed, or represents that its use would not infringe                       |
|  privately-owned rights. Reference herein to any specific commer-                |
|  cial products, process, or service by trade name, trademark,                   |
|  manufacturer, or otherwise, does not necessarily constitute or                  |
|  imply its endorsement, recommendation, or favoring by the United               |
|  States Government or the University of California. The views and                 |
|  opinions of authors expressed herein do not necessarily state or                |
|  reflect those of the United States Government or the University                  |
|  of California, and shall not be used for advertising or product                 |
|  endorsement purposes.                                                            |
\-----

```

C.3.4 MD5 message digest algorithm

The source code for the `md5` module contains the following notice:

Copyright (C) 1999, 2002 Aladdin Enterprises. All rights reserved.

This software is provided 'as-is', without any express or implied warranty. In no event will the authors be held liable for any damages arising from the use of this software.

Permission is granted to anyone to use this software for any purpose, including commercial applications, and to alter it and redistribute it freely, subject to the following restrictions:

1. The origin of this software must not be misrepresented; you must not claim that you wrote the original software. If you use this software in a product, an acknowledgment in the product documentation would be appreciated but is not required.
2. Altered source versions must be plainly marked as such, and must not be misrepresented as being the original software.
3. This notice may not be removed or altered from any source distribution.

L. Peter Deutsch
ghost@aladdin.com

Independent implementation of MD5 (RFC 1321).

This code implements the MD5 Algorithm defined in RFC 1321, whose text is available at

<http://www.ietf.org/rfc/rfc1321.txt>

The code is derived from the text of the RFC, including the test suite (section A.5) but excluding the rest of Appendix A. It does not include any code or documentation that is identified in the RFC as being copyrighted.

The original and principal author of md5.h is L. Peter Deutsch <ghost@aladdin.com>. Other authors are noted in the change history that follows (in reverse chronological order):

2002-04-13 lpd Removed support for non-ANSI compilers; removed references to Ghostscript; clarified derivation from RFC 1321; now handles byte order either statically or dynamically.
1999-11-04 lpd Edited comments slightly for automatic TOC extraction.
1999-10-18 lpd Fixed typo in header comment (ansi2knr rather than md5); added conditionalization for C++ compilation from Martin Purschke <purschke@bnl.gov>.
1999-05-03 lpd Original version.

C.3.5 Asynchronous socket services

The `asynchat` and `asyncore` modules contain the following notice:

Copyright 1996 by Sam Rushing

All Rights Reserved

Permission to use, copy, modify, and distribute this software and its documentation for any purpose and without fee is hereby granted, provided that the above copyright notice appear in all copies and that both that copyright notice and this permission notice appear in supporting documentation, and that the name of Sam Rushing not be used in advertising or publicity pertaining to distribution of the software without specific, written prior permission.

SAM RUSHING DISCLAIMS ALL WARRANTIES WITH REGARD TO THIS SOFTWARE, INCLUDING ALL IMPLIED WARRANTIES OF MERCHANTABILITY AND FITNESS, IN NO EVENT SHALL SAM RUSHING BE LIABLE FOR ANY SPECIAL, INDIRECT OR CONSEQUENTIAL DAMAGES OR ANY DAMAGES WHATSOEVER RESULTING FROM LOSS

OF USE, DATA OR PROFITS, WHETHER IN AN ACTION OF CONTRACT, NEGLIGENCE OR OTHER TORTIOUS ACTION, ARISING OUT OF OR IN CONNECTION WITH THE USE OR PERFORMANCE OF THIS SOFTWARE.

C.3.6 Cookie management

The Cookie module contains the following notice:

Copyright 2000 by Timothy O'Malley <timo@alum.mit.edu>

All Rights Reserved

Permission to use, copy, modify, and distribute this software and its documentation for any purpose and without fee is hereby granted, provided that the above copyright notice appear in all copies and that both that copyright notice and this permission notice appear in supporting documentation, and that the name of Timothy O'Malley not be used in advertising or publicity pertaining to distribution of the software without specific, written prior permission.

Timothy O'Malley DISCLAIMS ALL WARRANTIES WITH REGARD TO THIS SOFTWARE, INCLUDING ALL IMPLIED WARRANTIES OF MERCHANTABILITY AND FITNESS, IN NO EVENT SHALL Timothy O'Malley BE LIABLE FOR ANY SPECIAL, INDIRECT OR CONSEQUENTIAL DAMAGES OR ANY DAMAGES WHATSOEVER RESULTING FROM LOSS OF USE, DATA OR PROFITS, WHETHER IN AN ACTION OF CONTRACT, NEGLIGENCE OR OTHER TORTIOUS ACTION, ARISING OUT OF OR IN CONNECTION WITH THE USE OR PERFORMANCE OF THIS SOFTWARE.

C.3.7 Profiling

The profile and pstats modules contain the following notice:

Copyright 1994, by InfoSeek Corporation, all rights reserved.
Written by James Roskind

Permission to use, copy, modify, and distribute this Python software and its associated documentation for any purpose (subject to the restriction in the following sentence) without fee is hereby granted, provided that the above copyright notice appears in all copies, and that both that copyright notice and this permission notice appear in supporting documentation, and that the name of InfoSeek not be used in advertising or publicity pertaining to distribution of the software without specific, written prior permission. This permission is explicitly restricted to the copying and modification of the software to remain in Python, compiled Python, or other languages (such as C) wherein the modified or derived code is exclusively imported into a Python module.

INFOSEEK CORPORATION DISCLAIMS ALL WARRANTIES WITH REGARD TO THIS SOFTWARE, INCLUDING ALL IMPLIED WARRANTIES OF MERCHANTABILITY AND FITNESS. IN NO EVENT SHALL INFOSEEK CORPORATION BE LIABLE FOR ANY SPECIAL, INDIRECT OR CONSEQUENTIAL DAMAGES OR ANY DAMAGES WHATSOEVER RESULTING FROM LOSS OF USE, DATA OR PROFITS, WHETHER IN AN ACTION OF CONTRACT, NEGLIGENCE OR OTHER TORTIOUS ACTION, ARISING OUT OF OR IN CONNECTION WITH THE USE OR PERFORMANCE OF THIS SOFTWARE.

C.3.8 Execution tracing

The trace module contains the following notice:

```
portions copyright 2001, Autonomous Zones Industries, Inc., all rights...
err... reserved and offered to the public under the terms of the
Python 2.2 license.
Author: Zooko O'Whielacronx
http://zooko.com/
mailto:zooko@zooko.com
```

```
Copyright 2000, Mojam Media, Inc., all rights reserved.
Author: Skip Montanaro
```

```
Copyright 1999, Bioreason, Inc., all rights reserved.
Author: Andrew Dalke
```

```
Copyright 1995-1997, Automatrix, Inc., all rights reserved.
Author: Skip Montanaro
```

```
Copyright 1991-1995, Stichting Mathematisch Centrum, all rights reserved.
```

```
Permission to use, copy, modify, and distribute this Python software and
its associated documentation for any purpose without fee is hereby
granted, provided that the above copyright notice appears in all copies,
and that both that copyright notice and this permission notice appear in
supporting documentation, and that the name of neither Automatrix,
Bioreason or Mojam Media be used in advertising or publicity pertaining to
distribution of the software without specific, written prior permission.
```

C.3.9 UUencode and UUdecode functions

The uu module contains the following notice:

```
Copyright 1994 by Lance Ellinghouse
Cathedral City, California Republic, United States of America.
All Rights Reserved
```

```
Permission to use, copy, modify, and distribute this software and its
documentation for any purpose and without fee is hereby granted,
provided that the above copyright notice appear in all copies and that
both that copyright notice and this permission notice appear in
supporting documentation, and that the name of Lance Ellinghouse
not be used in advertising or publicity pertaining to distribution
of the software without specific, written prior permission.
```

```
LANCE ELLINGHOUSE DISCLAIMS ALL WARRANTIES WITH REGARD TO
THIS SOFTWARE, INCLUDING ALL IMPLIED WARRANTIES OF MERCHANTABILITY AND
FITNESS, IN NO EVENT SHALL LANCE ELLINGHOUSE CENTRUM BE LIABLE
FOR ANY SPECIAL, INDIRECT OR CONSEQUENTIAL DAMAGES OR ANY DAMAGES
WHATSOEVER RESULTING FROM LOSS OF USE, DATA OR PROFITS, WHETHER IN AN
ACTION OF CONTRACT, NEGLIGENCE OR OTHER TORTIOUS ACTION, ARISING OUT
OF OR IN CONNECTION WITH THE USE OR PERFORMANCE OF THIS SOFTWARE.
```

Modified by Jack Jansen, CWI, July 1995:

- Use binascii module to do the actual line-by-line conversion between ascii and binary. This results in a 1000-fold speedup. The C version is still 5 times faster, though.
- Arguments more compliant with Python standard

C.3.10 XML Remote Procedure Calls

The `xmlrpc.lib` module contains the following notice:

The XML-RPC client interface is

Copyright (c) 1999-2002 by Secret Labs AB
Copyright (c) 1999-2002 by Fredrik Lundh

By obtaining, using, and/or copying this software and/or its associated documentation, you agree that you have read, understood, and will comply with the following terms and conditions:

Permission to use, copy, modify, and distribute this software and its associated documentation for any purpose and without fee is hereby granted, provided that the above copyright notice appears in all copies, and that both that copyright notice and this permission notice appear in supporting documentation, and that the name of Secret Labs AB or the author not be used in advertising or publicity pertaining to distribution of the software without specific, written prior permission.

SECRET LABS AB AND THE AUTHOR DISCLAIMS ALL WARRANTIES WITH REGARD TO THIS SOFTWARE, INCLUDING ALL IMPLIED WARRANTIES OF MERCHANTABILITY AND FITNESS. IN NO EVENT SHALL SECRET LABS AB OR THE AUTHOR BE LIABLE FOR ANY SPECIAL, INDIRECT OR CONSEQUENTIAL DAMAGES OR ANY DAMAGES WHATSOEVER RESULTING FROM LOSS OF USE, DATA OR PROFITS, WHETHER IN AN ACTION OF CONTRACT, NEGLIGENCE OR OTHER TORTIOUS ACTION, ARISING OUT OF OR IN CONNECTION WITH THE USE OR PERFORMANCE OF THIS SOFTWARE.

C.3.11 test_epoll

The `test_epoll` contains the following notice:

Copyright (c) 2001-2006 Twisted Matrix Laboratories.

Permission is hereby granted, free of charge, to any person obtaining a copy of this software and associated documentation files (the "Software"), to deal in the Software without restriction, including without limitation the rights to use, copy, modify, merge, publish, distribute, sublicense, and/or sell copies of the Software, and to permit persons to whom the Software is furnished to do so, subject to the following conditions:

The above copyright notice and this permission notice shall be included in all copies or substantial portions of the Software.

THE SOFTWARE IS PROVIDED "AS IS", WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EXPRESS OR IMPLIED, INCLUDING BUT NOT LIMITED TO THE WARRANTIES OF MERCHANTABILITY, FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE AND NONINFRINGEMENT. IN NO EVENT SHALL THE AUTHORS OR COPYRIGHT HOLDERS BE LIABLE FOR ANY CLAIM, DAMAGES OR OTHER LIABILITY, WHETHER IN AN ACTION OF CONTRACT, TORT OR OTHERWISE, ARISING FROM, OUT OF OR IN CONNECTION WITH THE SOFTWARE OR THE USE OR OTHER DEALINGS IN THE SOFTWARE.

C.3.12 Select kqueue

The `select` and contains the following notice for the `kqueue` interface:

Copyright (c) 2000 Doug White, 2006 James Knight, 2007 Christian Heimes
All rights reserved.

Redistribution and use in source and binary forms, with or without
modification, are permitted provided that the following conditions
are met:

1. Redistributions of source code must retain the above copyright
notice, this list of conditions and the following disclaimer.
2. Redistributions in binary form must reproduce the above copyright
notice, this list of conditions and the following disclaimer in the
documentation and/or other materials provided with the distribution.

THIS SOFTWARE IS PROVIDED BY THE AUTHOR AND CONTRIBUTORS ``AS IS'' AND
ANY EXPRESS OR IMPLIED WARRANTIES, INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, THE
IMPLIED WARRANTIES OF MERCHANTABILITY AND FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE
ARE DISCLAIMED. IN NO EVENT SHALL THE AUTHOR OR CONTRIBUTORS BE LIABLE
FOR ANY DIRECT, INDIRECT, INCIDENTAL, SPECIAL, EXEMPLARY, OR CONSEQUENTIAL
DAMAGES (INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, PROCUREMENT OF SUBSTITUTE GOODS
OR SERVICES; LOSS OF USE, DATA, OR PROFITS; OR BUSINESS INTERRUPTION)
HOWEVER CAUSED AND ON ANY THEORY OF LIABILITY, WHETHER IN CONTRACT, STRICT
LIABILITY, OR TORT (INCLUDING NEGLIGENCE OR OTHERWISE) ARISING IN ANY WAY
OUT OF THE USE OF THIS SOFTWARE, EVEN IF ADVISED OF THE POSSIBILITY OF
SUCH DAMAGE.

Copyright

Python and this documentation is:

Copyright 2001-2010 Python Software Foundation. All rights reserved.

Copyright 2000 BeOpen.com. All rights reserved.

Copyright 1995-2000 Corporation for National Research Initiatives. All rights reserved.

Copyright 1991-1995 Stichting Mathematisch Centrum. All rights reserved.

Japanese translation is: Copyright 2003-2009 Python Document Japanese Translation Project. All rights reserved.

ライセンスおよび許諾に関する完全な情報は、[History and License](#) を参照してください。

- ***
 - 文, 30
 - ****
 - 文, 30
- ..., 111
- `__all__`, 52
- `__builtin__`
- モジュール, 50
- `__future__`, 113
- `__slots__`, 118
- `>>>`, 111
- 2to3, 111
- abstract base class, 111
- argument, 111
- attribute, 111
- BDFL, 111
- bytecode, 112
- class, 112
- classic class, 112
- coding
 - style, 32
- coercion, 112
- compileall
 - モジュール, 48
- complex number, 112
- context manager, 112
- CPython, 112
- decorator, 112
- descriptor, 113
- dictionary, 113
- docstring, 113
- docstrings, 26, 31
- documentation strings, 26, 31
- duck-typing, 113
- EAFP, 113
- expression, 113
- extension module, 113
- file
 - オブジェクト, 58
- finder, 113
- for
 - 文, 23
- function, 113
- garbage collection, 114
- generator, 114, 114
- generator expression, 114, 114
- GIL, 114
- global interpreter lock, 114
- hashable, 114
- help
 - 組み込み関数, 85
- IDLE, 115
- immutable, 115
- importer, 115
- INPUTRC, 101, 102
- integer division, 115
- interactive, 115
- interpreted, 115
- iterable, 115
- iterator, 115
- keyword argument, 116

- lambda, **116**
- LBYL, **116**
- list, **116**
- list comprehension, **116**
- loader, **116**
- mapping, **116**
- metaclass, **116**
- method, **116**
 - オブジェクト, [75](#)
- module
 - search path, [47](#)
- mutable, **116**
- named tuple, **116**
- namespace, **117**
- nested scope, **117**
- new-style class, **117**
- object, **117**
- open
 - 組み込み関数, [58](#)
- PATH, [7](#), [47](#)
- path
 - module search, [47](#)
- pickle
 - モジュール, [61](#)
- positional argument, **117**
- Python 3000, **117**
- Python Enhancement Proposals
 - PEP 302, [113](#), [116](#)
 - PEP 343, [112](#)
 - PEP 8, [32](#)
- Pythonic, **117**
- PYTHONPATH, [47](#), [49](#)
- PYTHONSTARTUP, [9](#), [102](#)
- readline
 - モジュール, [102](#)
- reference count, **117**
- rlcompleter
 - モジュール, [102](#)
- search
 - path, module, [47](#)
- sequence, **118**
- slice, **118**
- special method, **118**
- statement, **118**
- string
 - モジュール, [55](#)
- strings, documentation, [26](#), [31](#)
- style
 - coding, [32](#)
- sys
 - モジュール, [49](#)
- triple-quoted string, **118**
- type, **118**
- unicode
 - 組み込み関数, [18](#)
- virtual machine, **118**
- Zen of Python, **118**
- オブジェクト
 - file, [58](#)
 - method, [75](#)
- 環境変数
 - INPUTRC, [101](#), [102](#)
 - PATH, [7](#), [47](#)
 - PYTHONPATH, [47](#), [49](#)
 - PYTHONSTARTUP, [9](#), [102](#)
- 組み込み関数
 - help, [85](#)
 - open, [58](#)
 - unicode, [18](#)
- 文
 - *, [30](#)
 - **, [30](#)
 - for, [23](#)
- モジュール
 - __builtin__, [50](#)
 - compileall, [48](#)
 - pickle, [61](#)
 - readline, [102](#)
 - rlcompleter, [102](#)
 - string, [55](#)
 - sys, [49](#)